KULIC

18

1984. 11

慶應義塾大学研究・教育情報センター

〔稀 覯 書 解 題〕

17世紀の大学図書館目録

Catalogus uniucrsalis librorum in Bibliothea Bodleiana omnium librorum, Oxoniae, Excudebant Iohanis Lichfield & Iacobus Short, 1620. 539, 36p. 4° (120 X 607 1)

Catalogus impressorm librorum Bibliothecae Bodlejanae in Academia Oxoniensi. Oxonii, e Theatro Sheldoniano, 1674. 480, 272p. 2° (142 X 11 1)

Oxford 大学の Bodleian 図書館は，衰頽していた図書館再興の願いを込めた Sir Thomas Bodley の提案で，1602年に開館した。この図書館は，今も，Oxford 大学における学術研究の重要機関の一つとして活動している。特に中世・近世資料の豊富な蔵書は，British Library・Cambridge 大学図書館と並んで有名であり，全世界からそれを求めて学者が訪れている。

Bodley はその蔵書の基盤を作っている。彼は London に在って写本・刊本を収集し，Keeper of Library（図書館長）に任命された Thomas James ち督励して蔵書目録を編纂した。最初の目録は1605年に刊行された。

その後 Bodley は，Stationers' Company（出版社協同組合）と掛け合い，加盟全出版社の出版する書物を Bodleian 図書館に寄贈させることに成功した。これは，今日著作権法に基づく納本制度の嚆矢をなすものであった。このことが蔵書の増加につながり，図書館では1620年と1674年にも目録を刊行することになった。写真はこれらの目録である。

目録の歴史は古く，プロトタイプの図書館が成立した古代から存在していた。紀元前2000年頃のスメリア粘土板の中から Nippur にあった図書館の目録が発見されている。それ以来目録法（目録編纂の技術）の歴史は今日のコンピュータ目録まで続いている。

Bodleian 図書館の17世紀の目録は，目録法の展開を調べる上で，極めて重要な史料である。1620年と1674年の目録は，史上初めて，著者目録として編成された。著者名による配列はごく簡単なようだが，無著者著作の問題やいろいろな形で標示される人名の表記など数々の問題を処理する必要がある。2つの目録は史上初めてこの問題解決に当っている。その技法は初歩的なものであったが，Bodleian 図書館での創意工夫が現代目録規則の出発点となったといってよい。それは，Panizzi, Cutter を経て世界的標準目録規則である英米目録規則に結びついている。〔渋川雅俊〕

Keio University Libraries & Information Centers

KULIC 18

目　次

1……理工学情報センター所長に就任して　天野　弘
4……相互協力時代の塾図書館　大江　晃
9……むかしの慶應義塾図書館　渡部満彦
15……情報の量と質<ティー・ルーム>　渡辺　彰
16……レファレンス・サービスとライブラリー・インストラクション—スライドの試作—　市古健次
23……慶應義塾図書館蔵書劣化調査計画　上田修一・奥沢美佐
25……書痴・書債・売書<ティー・ルーム>　金　文京
26……よく動きよく学び<スタッフ・ルーム>　酒井明夫
27……『萬國政表』の原書の行方　東田全義

KULICのノウハウ

29……慶應義塾大学図書館・情報学への国内留学　岡田　隆
31……ＩＬＬ (Interlibrary Loan)
① 三田情報センターのＩＬＬ —海外との相互貸借を中心として—　樋口恵子
② 医学情報センターにおける Interlibrary Loan—現状と課題—　松井　朗
③ 理工学情報センターにおける Interlibrary Loan —文献取寄せ（依頼）の現状と展望—　吉川智江
37……理工学情報センター雑誌目録　斎藤憲一郎

40……ビジネス・スクールと経商資料室<スタッフ・ルーム>　川上清子
41……米国の大学図書館—カリフォルニア大学バークレー校の図書館活動を中心にして　高山正也
63……福澤諭吉の読書論<スタッフ・ルーム>　渋川雅俊

資　料

64……研究・教育情報センターに関する書誌，1983. 10—1984. 6
64……図書館関係英語文献の和文抄訳リスト
66……スタッフによる論文発表・研究発表
68……年次統計要覧<昭和58年度>

72……編集後記

〈表紙〉孫福　弘　〈カット〉日下部寿子

ＫＵＬＩＣ第18号＊1984年11月20日発行＊編集人 渋川雅俊＊発行人 大江　晃
＊発行所　慶應義塾大学研究・教育情報センター本部事務室　〒108 東京都港区三田2—15—45＊電話（453）4511（内線 2501）＊印刷所　梅沢印刷＊

理工学情報センター所長に就任して

理工学情報センター
天　野　　弘
（理工学部教授　電気工学科）

所長をお引受けして早くも3ケ月が過ぎた。その間，各種の資料を一覧したり現場の実情説明を受けて，センターの当面する諸問題について学び，塾の三田新図書館を訪れその充実した施設やサービスを一覧し，日吉の新図書館計画についての資料を拝見し，医学情報センターのサービスに触れ，塾外では東京工業大学の図書館を訪ねる等駈足で見聞を拡めてきた。KULIC 編集子から今後十年位の展望を述べるよう求められたが，浅学を省みず，現時点での所感を述べて抱負といたしたい。勿論これには工学部の諸先輩，塾の理工学初め各学部の教員の方々，情報センターや図書館関係者，情報処理関係の専門家の方々の隔意のない御意見を寄せて頂くと共にまた御指導と御援助を下さるようお願いする。

1.　施設の増設の必要性

鷲尾前所長からの唯一最大の申継は，施設の増設を具体化して欲しいということであった。昭和59年度初めのセンターの蔵書は15万8,000冊に達していて約2万冊が32棟101号の予備書庫に移管されている。現在の収容余力はギュー詰めにつめて約1万冊位，毎年8,000冊～10,000冊の増加冊数をどう処理するかが問題となっている。昭和46年の新設の際当初の計画は縮小を余儀なくされたが，それでも一応のスペースがあり，しばらくは維持できると思われた図書館書庫も，52年には自習室の3分の2をつぶして書架を入れたり，館内のいたるところで閲覧座席を間引き，更に理工学部への改組による図書の増加のため，前述のように昭和57，58の両年度には昭和35年（1960年）までのバックナンバーを予備書庫に移管せざるを得なかった。この予備書庫は何分にもセンターから百数十米も離れているため利用者にも御不便をお掛けしているばかりでなく，出納の都度カウンターまでの運搬の取扱過程等で図書は痛みを受け易く，先き行きが案ぜられるのが偽らざるその実体である。

2.　研究者用共同利用施設等の確保

矢上移転の際各学科の御協力を頂いて実現をみた雑誌の集中管理システムも，館内の新着雑誌展示棚附近の雑誌閲覧席が年々狭められて，今日ではゆったり拾い読みする雰囲気も失われつつある。またキャレルといっても前の人の背中がまる見えの一人机を気の利いたものにリプレースすることや，館内の資料を集中的に使える個人研究室，共同討議のできる研究室等を増設の機会に設けたい。同時に機材を備えたものとして「フイルム・ライブラリー」やオーディオとビデオの施設は近代的な図書館には必備なものであるので是非実現を計りたい。この辺の諸施設を新設し，館内の交通整理をしないと，極度に狭ばめられた現在の2階の閲覧室の騒々しさを解消させることができず，研究図書館としても本来の姿からは程遠い存在となりかねないおそれがある。

このような実情をふまえて明年4月の日吉の新図書館の開館後に，改めて矢上台の図書館利用者から，理工学情報センターの今後のサービスや，館内諸施設や設備等についてのアンケートを実施し，その結果，利用者各位の御意見に十分応えた

施設の確保を目指したい。要するに施設の増設は単なる書庫のスペースの拡張に終ることなく，館内の閲覧サービスを近代化させるよう立案したいので御理解と御協力を得たい。

3. 学術情報システムとの対応について

大学図書館の主たる任務はいうまでもなく大学における研究・教育に必要な図書，雑誌等の資料を収集，整理し提供することであるが，近年これらの資料の増加及び多様化に伴い研究者等が必要とする資料を個々の大学単位ですべて自給自足することは困難となり，広く他大学等と相互補完関係に立つことが不可欠になって来ている。また適切な資料をタイムリーに提供することが従来以上に求められているため，資料の選択，受入，整理，提供という図書館業務全般にわたって，より迅速・的確な処理体制が必要となってきた。国公私立を問わず大学図書館業務のあらゆる方面に電算機化が行われつつある動向にもあらわれている。

周知のように昭和55年学術審議会は文部大臣の諮問に対して「今後における学術情報システムの在り方」を答申し，文部省はこれを受けて学術情報センターシステム開発調査協力会議を設置（昭和55年度）し，昭和57年度までに情報検索システムと目録システムを中心に調査を行い，実際的なセンターシステム設計仕様が検討された。

学術情報システムは，資源共有の理念を基調として，各大学の人的・物的諸資源を相互に利用しあう全国的なネットワークとして機能するものとされているが，前述の検討の結果，図書館ネットワークは図書館業務の電算機化の中で最も中心的で経費を要する目録システムを学術情報システムが引受け，また図書館のハウスキーピング・システムを各図書館がそれぞれ維持し，両者を結合することにより不備を改め，図書館業務のトータルシステムを実現しようとするものである。

この全国的なネットワークの中枢機関である学術情報センターの中心的施設として昭和58年４月に東京大学文献情報センターが設置された。

さてこの文献情報センターと各大学図書館との関わり合いであるが，塾の場合，ごく最近作成された「研究・教育情報センター業務機械化計画」（59・6.30）によると，その巻頭の「機械化の目的と特徴」のＣ項の「新しい課題の出現」には，『文献情報センターに早期に加盟することは慶應義塾大学の研究・教育の発展には必要不可欠のことである。（中略）そして加盟することによって塾内の研究者が得られるメリットは，はかりしれないものがある，』と記されていて学術情報システムとの対応については明確な方向が確立されていて心強い限りであり，その早期実現を切望するものである。

4. 全塾のネットワークの構成

つづいて前述の「業務機械化計画」を見ると，３項の「開発の方法」では，三田情報センターで開発した標準システムを他のセンターの環境に合せ移入する。更に，ネットワーク・システムの開発では四つのセンター間をネットワークで結び，それぞれの情報センターから他の情報センターの所蔵情報等を端末を通じて知ることを可能とする等，慶應義塾大学の蔵書を有効に生かし資料の調整を容易にすると記されている。

理工学情報センターについて考えると学術情報システムへの参加には当然のことながら自館諸業務の機械化が前提となってきている。従来我々のセンターは規模が小さく個々の機械化を思いとどまらせていた点も多くあったが，個々の業務の機械化のための標準化等には可成りの配慮がなされていたものもあり，今後の重要な課題である。

ここで理工学情報センターとして一考しなければならない問題がある。それは国立大学の中で「地域センター館」として指定を受けた東京工業大学図書館の動向である。東工大は全国の理工学系の拠点校として有数の１次資料（雑誌）を収集している図書館であり，平素我々のカウンターからは利用者の方々が紹介状持参で，資料の閲覧や文献複写に訪れたり，文献取寄せでも同館からは多大の便宜を受けている。過日の私の東工大訪問に際しても，日頃の御協力に関し謝意を述べると，先方からも二次資料の整備や情報サービスで

の当方からの協力に感謝している旨の応答があった。話題が学術情報システムに及ぶと，東工大とのネットワークに参加する意向があるならば，先方には用意があるという好意的な発言もあって，多分に驚ろかされた程である。ここ数年来，東工大，早大と塾の三大学大学院共同研究のプロジェクトが継続して行われたこと等思い浮べると十年後のセンターの図書館活動についても，自然と相互協力の路線が三大学間で結ばれることも夢でないように思われる。

最後に現在私は理工学部の運営会議のメンバーの一人でもあり，学部運営のサイドでも理工学情報センターの抱えている問題をはっきり提起し，その解決には大いに力を尽したいので研究・教育情報センター関係者のみならず理工学部教職員各位にも是非御理解と御支援をお願いいたしたい。

KULAS 研 究 会

昭和59年5月から，部内研修の一環として，KULAS（Keio University Library Automation System）研究会が始められた。KULAS研究会は，文字通り，図書館のコンピュータ化を意識したもので，前号（17号）に発表された図書館関係英語文献の抄訳の成果をもとに，情報センター職員が研究成果を報告する場である。報告は，論文の概要，問題点，慶應義塾に適用した場合の問題点などを中心に行われ，報告後，その内容にもとづいて，活発な議論がかわされ，話題は，しばしば，飛躍して，とんでもない方向へ行ったりする。機械化を考えるときに，職員のあいだに，少しでも，共通の基盤を持ちたいというのが，研究会の発足の契機である。

これまで行なわれた報告の報告者とテーマは，以下のとおりである。

第1回

加藤　好郎　「オンライン目録の特徴」

宮木さえみ　「アクセス装置としての目録：背景と思想」

第2回

斎藤　泰則　「カリフォルニア大学の“MELVYL”について」

広田とし子　「図書館のテクノロジー：ブラックボックス・シンドローム」

第3回

松井　　朗　「新しい目録体系の選択時における教員・職員・学生の参画について」

松本　和子　「ビブリオグラフィック・インストラクションとオンライン・カタログの開発」

第4回

長島　敏樹　「科学技術とオンライン目録」

仲　　博美　「目録情報の遡及的変換」

第5回

斎藤憲一郎　「総合的な機能を持つ図書館と図書購入販売の機械化」

藤村　敦子　「目録作成のために民間のコンピュータ会社を利用して―リバプール工科大学の場合―」

研究会は，今後，月一回程度のペースで続けられる予定である。

相互協力時代の塾図書館

大江　晃
（研究・教育情報センター所長，文学部教授）

この6月に惜しまれつつ他界したフランスの思想家 Michel Foucault は，その著書＜言葉と物＞のなかで，＜16世紀の知＞を＜書かれたもの＞（écriture）によって特徴づけている。彼によると，16世紀においては言葉と物は分離することなく一体化していて，世界はそのまま＜書かれたもの＞であり，その謎を読み取り，それについて註をつけること，それがその時代の＜知＞の基本的な在り方なのであった。かくして，知は原典と註の形でかぎりなく増殖（proliférer）しつづける。しかも，不思議なことに，当時の言語学者の考えでは，人間の言葉は，まず，書かれたものとしてあり，話されるものとしてではなかった，という。

情報センター所長として2年間，図書館の内側から眺めていると Foucault の指摘した16世紀風の＜書かれたもの＞の増殖過程が奇妙な現実感を伴って迫ってくる，われわれの時代の＜書物＞の増殖過程は，なにやら癌細胞のそれを思わせ，もはやそれを止める術はないとさえ，感じられる。

現代における図書館の最大の課題は，書物を中心とする各種メディアによる＜情報の氾濫＞をいかにして人間の制御可能な範囲に収め，人間の＜知＞として編成可能とするかにある，とわたくしには思われる。そして，この目標を達成するためには，現代においてコンピュータの使用は不可避である，と言わなければならない。その意味で，当面われわれに課せられているのは図書館業務の total system としての＜機械化＞であると考えざるをえないのである。だが，実は，この＜機械化＞は本質的に図書館の間の相互協力を指向していると思われる。以下，もっぱらこの点について考えてみたい。

英国の York 近郊にある BLLD (British Library Lending Division) は，学術雑誌に掲載された論文のコピーを全世界に提供している機関であるが，その受入雑誌タイトル数を見ると，1970年の35,824から1981年の56,000に増加している。昨年ここを訪れたときに日本宛の小包みをいくつか見かけたこともきわめて印象的であったが，11年間における1.56倍の増加は爆発的と形容しても過言ではないと思われる。わたくしの研究領域においても新しい雑誌の刊行はあいかわらず盛んであるし，既存の雑誌への掲載も多くの待時間を必要とすることを見れば，この傾向が鈍化しているとはとても思えない。

このような傾向は，当然，塾の図書館にも反映されている。すでに三田情報センターにおいてカレントなものだけで7,761（83年度末）タイトルの雑誌を受け入れているが，ノンカレントなものをあわせれば14,710に達する。全塾レベルでは，それぞれ，13,794と26,736の数値となる。単行書を含む年間全受入数を見ると，三田情報センターで83年度末70,373（70年度に比べて2.56倍），全塾レベルで106,708に及んでいる。このような収書数の急激な増加は図書館業務量全体の増加を招き，四谷と矢上においては書庫スペースの確保が緊急の課題となるとともに，三田では整理業務の消化を困難にし，いわゆる滞貨問題をひきおこして，利用者の方々に多大のご不便をおかけしている。

言うまでもないことながら，このような業務量

の増大がある限度をこえると，通常の処理方法ではコントロール不可能となる。そこで，受入数を押さえることによってこの困難を乗りきるか，大幅な人員増によって対応するか，それとも処理方法を変革するかのいずれかの方策を取らざるをえないこととなる。研究上の要求と経済的な要因とを考えれば唯一の対応策は第3の方策とならざるをえない。現在，多くの図書館においてなんらかの形で<電算化>が試みられているのも，基本的に同じ事情が控えているからにほかならない。

ところで，塾図書館の機械化はかなり早く69年ごろ着手された。現在では，KULIC システムとして BICC（図書予算管理システム）と PICC（雑誌管理システム）を中心とするシステムが運用されている。現行各システムの詳しい内容については雑誌 KULIC 第17号所載の<情報センター機械化計画>において述べられているから，ここで触れる必要はないが，これらのシステムはいずれも利用者の目に触れにくい分野に関するものであり，またバッチ処理を前提していることも今となればいささか時代遅れの感を否めない。

図書館・新館には，電算機のための機械室が5階に設けられていることも，電算機の導入が今後の図書館運営に不可欠であるという認識を物語っている。そして，83年度における計算センターの電算機のグレード・アップの計画に関連して，三田情報センターにおいても収書・整理・貸出・検索全般にわたる total system としての KULAS (Keio University Library Automation System) の開発計画を策定することとなった。このシステムの特徴は，従来のバッチ処理に代るオンライン・リアルタイム・システムであり，利用者と直接に関係する貸出手続きの機械化や，カード目録から端末による検索への変更などが含まれている。当初の計画では5年間で三田情報センターでの標準システムの開発を終え，以後逐次他のセンターにおけるシステムの開発に移り，最終的には4センターを統合する総合的なシステムの完成を目指すものである。

このシステムが完成すれば，塾の図書館の利用法はいちじるしく変貌せざるをえない。おそらく，現在の目録ホールのかなりの部分がコンピュータの端末によって占められ，利用者はカードを繰るかわりに端末を操作して必要な情報を得ることとなろう。因みに，現在のカード・システムを取りつづければ，書庫が収容不能になるまえに，10年ほどの間に目録ホールが一杯になってしまうのである。また，利用者は，現在，日吉で行なわれているように，適当なＩＤカードを持参することによってきわめて簡単に貸出手続きをすませることになる。いまのような記入による方式をいつまでも取りつづければ，すでに多くの公共図書館において貸出事務が機械化されているので，繁雑の非難を受けるであろうことは目に見えているし，貸出関係の各種統計を用いて業務内容を分析し，改善を計ることも困難となろう。さらに，機械化によって，選書段階の重複調査やさまざまな検索が従来よりもはるかに容易に行なわれることは言うまでもない。

以上に述べたような基本構想に基づいて，83年における計算センターへのFACOM M-360の導入とともにデイスプレー端末8台，シリアル・プリンター2台を図書館内の関係部署に設置して，まず，85年4月からの貸出業務の機械化に向けて開発を始めたのであった。現在，準備の一つとして機械可読（ＯＣＲ）ラベルの貼付といった地味で骨の折れる仕事がセンター所員の分担によって続けられている。

しかし，現実に開発の仕事を始めてみると，克服せねばならぬいくつかの問題点が浮びあがってきた。その一つは図書館業務の電算化のもつ宿命的ともいえる特徴点，つまり<書誌情報のサイズの大きさ>である。通常，書物一冊につき約800バイトが必要であると言われている。三田の現在の図書数125万で計算すると，10億バイト（1000メガバイト），つまり1ギガバイトなければ，全情報量を収納できないことになる。しかも，この数値はあくまでも現時点での話であって，時とともに増加することは言うまでもないし，情報制御に必要な数値を加えると，とても1ギガでは収まりそうもない。そのうえ，この種の情報は図書館の業務が行なわれている間は眠らせておくわけに

はゆかず，つねに取り出すことができなければならないのである。

この数字は三田の蔵書をデータ・ベース化するに際して二つの困難があることを示している。一つはこれだけの情報量を収納することの物理的・経済的困難であり，言いかえれば，これだけの書誌データを収納するデイスク装置の置場所とコストの問題である。第2に，データ・ベース管理システム（Data Base Management System），いわゆる DBMS のサイズがまた大きいという問題がある。普通，約6メガ必要であると言われている。現行の三田計算センターのM-360のシステムの主記憶6メガ，デイスク4ギガと比べればその大きさがわかる。何時の時点かで電算機システムの見直しを求めなければ，ほかの電算機ユーザーと共存できなくなってしまう。

以上のように考えてくると，図書館業務の機械化が電算機システムという点でかなりの負担を塾財政に強いることは明らかであるし，また蔵書のデータ・ベース化にもかなりの労力と費用を要することも明らかであろう。それでは，なにか良い方策があるかと言えば，おそらく，つぎに述べるような図書館間の相互協力によるほかはないであろうと思われる。

そもそも，すでに述べた情報量の増大は，どのような図書館にせよ，一館で対応することをきわめて困難にしている。それゆえ，アメリカとカナダにおいてはすでに大学図書館相互を結ぶネット・ワーク・システムが有効に機能している。アメリカにおける OCLC（最初は Ohio College Library Center，現在は Online Computer Library Center）は，1971年以来，各参加館がネット・ワークを形成して目録業務を分担して行ない，目録データを共有することによって，多様なサービスを可能にしてきたのである。カナダにおける UTLAS（University of Toronto Library Automation System）もまた，1973年から同様のサービスを開始している。

この方面におけるわが国の立ち遅れは一目瞭然であるが，その理由のひとつに日本語による情報処理の技術的困難があることは否定できない。漢字処理技術の開発なしには図書館業務の電算化は不可能である。もうひとつの理由として，わが国における大学を始めとする研究機関の伝統的な閉鎖性をあげねばならないであろう。

情報資源の活用に関しては三流国並みと言われるこの立ち遅れは，わが国の研究の発展に多大の障害となることは明らかであって，1969年の科学技術会議による首相あての答申＜科学技術情報の流通に関する基本方策＞，いわゆる NIST（National Information System for Science and Technology）においては，データ・ベースの構築およびオンライン・サービスの拡充が唱われている。さらに，1980年の学術審議会の答申＜今後における学術情報システムの在り方について＞は，全国の国立，公立，私立大学の研究者に対する一次情報および二次情報の提供を目的とする大学間のネット・ワークを作り，その中心機関として学術情報センターを設置することを提言している。この学術情報センターは，オンラインによる検索サービスを行なうとともに，大学図書館の総合目録をオンラインによって形成することも目的としている。それゆえ，もしこの学術情報センターが設置されれば，日本の大学図書館における文献の所在情報を容易に得ることが可能となり，大学図書館の相互貸借のシステムを確立することによって，研究者は居ながらにして希望の文献を入手できることになる。

この学術情報センターは一橋の旧如水会館跡に建てられる計画まで発表されて，その急速な実現が期待されたのであるが，折悪しく行政改革・財政節減の時期に遭遇して，計画は基本的な修正を余儀なくされることとなった。予算折衝がらみの計画変更の経緯はよく分らないが，幸いこの計画は＜学術情報センター＞から＜文献情報センター＞へと名称ならびに規模を変更しながらも継続されることになった。

この＜文献情報センター＞は，まず，東京大学の情報・図書館学研究センターを改組し，学内共同利用施設として，83年に発足したが，ついで東大構内から東京教育大の跡地に移転するとともに，きわめて大型の電算機を導入してシステム開

発を開始することとなった。その電算機システムは，HITAC M-280H（32メガ）2台，M-280H（64メガ）1台，70.5ギガのディスクおよび101ギガの大容量記憶装置MSSを備えるという膨大なものであり，すでに稼働を始めている。

システム開発のスケジュールからすると，83年秋から準備を進めている regional center としての東京工大，名大，阪大とのあいだに85年春からネット・ワークを形成して試験的な業務協力に入る。そして，このネット・ワークを順次国・公・私立大学間に広げて，全国的な規模におよぼそうというものである。

いま，さしあたり，塾がこのネット・ワークに参加するとどういうことになるか，考えてみよう。現在，参加館と文献情報センーとの結び方についてはガイドライン的なものが発表されているにすぎない段階であって，詳細は明らかではないから，一般的かつ抽象的なことしか述べられないが，まず，塾図書館は文献情報センターの機械と接続した端末をもつこととなる。塾図書館がある文献を入手すると，この文献がすでに登録されているかどうか端末を通して照会する。発録されていれば，この文献に関する書誌情報を呼び出して，それを利用して目録を作成する。この目録が現行のようにカードの形になるか，それとも塾固有のファイルの形でディスクその他に保存されることになるかは塾におけるシステム開発の状況によることとなる。もしも入手した文献が登録されていなければ，塾がこの文献に関する書誌情報を端末を通して文献情報センターのデータ・ベースにインプットすることになる。この場合には塾自身で目録作成に必要な情報を提供しなければならないわけで，その点では現行の状態に近いと言ってよい。文献情報センターのネット・ワークに参加することのメリットは，以上の説明からうかがえるように，参加館相互の協力と分担によって目録作成に必要な書誌的情報が得られることであり，それによって整理業務の軽減が期待される点にある。また，文献情報センター自体が各種のMARC (Machine Readable Catalog) を整備しようとしている点も注目されなければならない。

現在，塾図書館でもアメリカ議会図書館のLC（Library of Congress）MARCと国会図書館のJAPAN MARC を用いて目録業務の効率化を計っているが，塾のような大学図書館には次のような問題が控えている。塾図書館が入手する洋書の目録をとる場合には，LC MARC を利用することになるが，英語の書物はともかく，独・仏その他の言語による書物は LC MARC に登録されているものが比較的少数であるために hit 率が低く（約36%），いまひとつ効率化につながらないのである。一方，和書については JAPAN MARC を利用することになるが，この場合にも国会図書館自体の収書率が100%ではなく，大学図書館はかなり珍しい文献を入手するという事情もからんで hit 率はけっして高くない（約65%）。そのうえ，書物の刊行以後 JAPAN MARC に乗るまでのタイム・ラグが長く，そのために塾図書館としては待ちきれないという問題もある。こういった事情があるために，文献情報センターでは LC や JAPAN MARC に止らず，英国の UK MARC や，各国の情報政策がからむが，もし可能ならば，ドイツおよびフランスの MARC も入手することによって，目録業務の効率化を計ろうとしている。各種 MARC の整備が個々の図書館にとってかなりの経済的負担であることを思えば，このような努力は多とすべきであろう。

文献情報センターを中心とする図書館ネット・ワークの形成は，日本における図書館業務の在り方を大きく変えようとしている。いわば，個人的なコレクションが体系的図書館の出現によって影が薄くなった以上に，将来ネット・ワークから外れた図書館はその処理しうる情報量において大きく後退せざるをえないであろう。ネット・ワークに参加するということは，たんに，目録作成業務の効率化に役立つだけでなく，参加館の提供する情報の全てを収納する文献情報センターのデータ・ベースが文献の所在に関するきわめて有力な情報源となるため，研究者は容易に多くの情報を獲得できるからである。

さて，国が設置者である国立大学は時期が来れば，ただちにこのネット・ワークに組み込まれる

こととなろう。そのときには，図書館の整備されていない地方大学においても，それぞれ500万を数える，東大や京大の蔵書を従来よりはるかに容易に利用しうることとなり，それによって得られる研究上のメリットは計りしれないものがあろう。それに反して，設置者が多様であり，規模もまたさまざまである私立大学の間では，この種のネット・ワークの形成はきわめて困難であり，文献情報センターへの参加を通してそれを実現する以外に現実の方策はないと思われる。すでに触れた OCLC や UTLAS を導入することによってそれに代えることもひとつの方法ではあるが，コストその他の問題を考えると最善の方法とは言い難い。もしも今後ネット・ワークから孤立した図書館があるとすれば，その館の利用者は研究上の情報に関してきわめて不利な立場におかれることは明らかであって，単なる<時流への乗り遅れ>などですまされる問題ではないであろう。

従来しばしば口にはされていたが現実味に乏しかった図書館間の相互協力の問題は，わが国においてもこの2年間に急速に実現可能な問題となり，いまや各図書館がそのための具体的準備に入る段階となったのである。文献情報センターを中心とするネット・ワークにできるだけ早い機会に参加しなければ，塾の研究者に文献情報の提供という面で多大の損害をかけることになりはしないかと，わたくしは恐れる。1980年代に大学図書館を中心とする日本の情報政策は新しい相互協力の時代に入ったと言うべきであり，相互協力の時代に相応しい塾図書館の整備こそ当面の最大の目標であると，わたくしは考えている。終りに，塾が委員館を務めている国公私立大学図書館協力委員会も文献情報センター設立後の ILL (Inter-Librarry Loan) の方法について各種の提言を行っており，従来の相互協力の形態よりも一歩踏み出した相互協力の実現に向けて歩み出したことも付言しておきたい。

新図書館と見学

新図書館が昭和57年に開館してから早くも2年半が過ぎた。見学者の訪れもひと頃の様な賑やかさも少なくなり，徐々に図書館としての落ち着きを取り戻してきた感がある。

見学者の推移を見ると，開館初年度の見学者数は269団体・2,887名であったが，昭和58年度は142団体・1,496名にほぼ半減した。内訳は表の通りである。昭和59年度はまだ途中であるが，4月から9月末までの状況は，46団体・687名の見学者が訪れている。この推移でいくと59年度の見学者数は58年度とほぼ横這いかそれより下がるものと思われる。(この数字はいずれも事前に三田情報センター総務課で予約受付したものである)

さらに57年度と58年度を団体種別に見学者数を比較してみると，大学図書館外図書館関係者の見学は58年度は3分の1に減っているのに対して，“その他”の図書館関係者以外の見学は団体数では16%減，見学者数では20%減にとどまっている。この背景には，塾の新図書館建設後，他大学でも新図書館建設の動きが増えてきており，大学当局者，企画・施設関係者，又建築・設計関係者の見学が比較的多いことである。

すでに大きな新図書館を建設された大学もあり，さらに大きな機能的な大学図書館を目指して，現在建設中もしくは立案・計画中の大学が幾つかある。図書館の発展のために大変喜ばしいことである。

団体種別	昭和57年度		昭和58年度	
	団体数	見学者数	団体数	見学者数
塾内	13	586	4	323
大学図書館	112	479	44	225
公共図書館	9	33	8	78
専門図書館	16	115	6	34
学校図書館	8	146	3	76
図書館関係団体	22	596	3	30
その他	89	932	74	730
計	269	2,887	142	1,496

むかしの慶應義塾図書館

渡　部　満　彦
（三田情報センター資料課長）

1.　慶應義塾図書館の歩み

創立125周年を祝った5月15日を義塾はウェーランド経済書講述記念日としている。周知のように，慶應4（1868）年のこの日上野彰義隊の砲声で江戸市中が騒然とするなか，福澤諭吉は悠然と「原書」の講述を行い，慶應義塾がある限り日本は文明国だと塾生を激励した。当時の情景をわれわれは安田靫彦の「福澤諭吉ウェーランド講述の図」によって思い描くことができる。

> シテみるとこの慶應義塾は日本の洋学のためにはオランダの出島と同様，世の中にいかなる騒動があっても変乱があっても，いまだかって洋学の命脈を絶したことはない。（略）この塾のあらんかぎり大日本は世界の文明国である。「世間にとんじゃくするな」と申して，大ぜいの少年を励ましたことがあります。[1]

このような高邁な思想を表明した創立者をいだく学塾で図書館はどのような歩みを辿ったのだろうか。そもそもわが国に西洋の近代図書館を紹介したのは福澤諭吉であった。[2] 義塾図書館の歩みについてわれわれは幸いに精細な「慶應義塾図書館史」を持っており，本書の目次によって大まかな流れを摑むことができる。

第一章　ゾーフ部屋の流れ
第二章　初期図書館
第三章　五十年記念図書館
第四章　大地震から戦争へ
第五章　罹火から再建へ
第六章　この十五年

著者の伊東弥之助は塾の経済学部を昭和10年に卒業，同年8月図書館に就職，停年まで主として三田の図書館で過した。幅広く文献を渉猟し，自己の経験を織りまぜながら時代の流れとその文化的背景を見据えながら「図書館の成立，建設，発展に貢献あった人々の努力を中心に，やや読物風に記述」[4] している。従って，歴史小説を読むような面白さがあると同時に，多くの先達のそれぞれの時代における貢献，あるいは蔵書の充実されて行く過程やその来歴を窺い知ることができる。

しかし，一方で伊東の主観がいろこく出たり，人と人との交感の記述がその主観によって増幅減衰されているようなところが見受けられる。また引用文の典拠が省かれているため，どれが伊東自身の見聞，どれが古老の懐旧談，どれが個人所蔵の史料，どれが公刊資料かの判別が困難で史実確証に手間どるのは惜しまれる。さらに，巻末索引がないため人名や事項の検索を不便なものとしているが，このような瑕瑾はわれわれ後生によって補正されていくであろうし，かかる欠点を無視できる内容を本書は備えている。筆者の拙稿も本書を超える何ものをも有していない。

「慶應義塾図書館史」が刊行されてから12年が経過した。＜十年ひと昔＞というから，この12年も既に歴史たり得る。そこで現時点で義塾図書館の流れを大項目で捉えれば以下のようになるであろうか。

- 明治六年前後
- 慶應義塾書館の整備
- 五十年記念図書館の誕生
- 十五年戦争と義塾図書館
- ジャック・ダルトンの来塾
- 研究・教育情報センターの発足

◦慶應義塾図書館・新館オープン

義塾図書館のこのような流れにあって，昭和26（1951）年4月の文学部図書館学科の開設は塾の図書館ばかりでなく，わが国図書館界にとってもエポック・メーキングであった。このことは中村初雄の以下の文章によって確認できる。

昭和26年3月，都下の各新聞は，一斉に，此の新開設の図書館学校について報じた。図書館人を書庫の番人位にしか認識していなかった一般世人は，「大学程度のそんなコースが必要なのか」と眼をみはった。米人教授による日米共同管理の形式が，福澤諭吉先生の伝統の慶應にくるということも注目をひいた一因であったろう（略）。

慶應にきまって，当時いろいろと批評もされたが，将来の財政的負担を覚悟して引き受けられた，塾当局者の勇気と，先見に対し，図書館界は感謝してよいのではなかろうか（略）。

この学校の日本図書館界に与えた功績は大きい。それが，図書館界の一般的な沈滞と共に忘れられようとしているのではあるまいか。許されるべきであろうか。[5]

文学部図書館学科は連合国最高司令官の日本政府に対する「日本教育制度に対する管理方策」の一環として設置された。昭和23年7月7日国立国会図書館顧問として来日した Robert Bingham Downs は日本に図書館学校を創立させるというＡＬＡの意向を受けて昭和25年6月再来日，東京大学，京都大学，同志社大学，早稲田大学，慶應義塾大学を調査した。その後同年末，日本図書館学校主任として Robert Lorence Gitler が来日，彼によって「歴史的意義に於て慶應義塾大学が，新しい国民的専門図書館学校が創立される大学として」[6] 最適であると総司令部民間教育局に報告された。彼はこう言っている。

この新しい計画は，日本に於る真の近代人の一人であった創立者福澤諭吉先生の伝統をうけつぐものであり，慶應スピリットである。彼は新しい又創造的な考え方を以って個人として群集から離れて立つには非常なる勇気を要する時代に於て，その思想に於ても行動に於ても自由主義的であり進歩的であった。彼の慶應義塾に対する大望は高く先見的であった。この福澤の進歩的な伝統が，慶應義塾大学文学部内にアメリカ図書館協会が新しい図書館学校を作った所以である。[7]

ギットラーは「福翁自伝」の英訳に感激して慶應に決めたという。[8]

具体的には米国政府の10万ドル（昭和26年4月—昭和27年6月）とロックフェラー財団の5ケ年間援助によって米国から派遣された外国人教師によって運営された。わが国図書館の近代化はこれによってはじまると言っても過言ではない。[9] 昭和36年日本政府はギットラーの図書館学科の創設と日本の図書館界への援助に対して勲四等旭日小綬章によって報いた。

さて本題に戻ろう。「慶應義塾五十年史」[11] の口絵写真に図書館広間読書室（旧会議室）が掲載されている。中央奥の福澤諭吉の肖像画と思われる額の下の一段高くなった処に図書館員がいて，前方の8人掛閲覧机何個かを見降している。この机で坊主頭和服姿の塾生が思いおもいの恰好で読書している。彼らの傍には風呂敷づつみと鳥打帽子，ソフト帽子などが置れている。左手にはカード箱が見え，壁にはいくつかの扁額がかけられてある。これが恐らく「慶應義塾年表」の明治38年（1905）1月の「書館の名称を図書館と改め，れんが講堂内北側の旧会議室大広間に移転。初代監督に田中一貞就任。根本的整理改革を行う」[12] という記事と合致する光景であろう。紆余曲折を経た文部省の図書館が「東京図書館」と称したのは明治13年7月1日であるから，かなり遅い改称である。[13]

2. 慶應義塾図書館の濫觴

われわれは物事の濫觴を追求したいという欲求を常に持っているが，慶應義塾図書館の始りはどうもはっきりしない。先の「慶應義塾年表」では「明治4年（1871）旧藩邸の月波楼を図書室とし，架蔵書を塾生に貸し出す」が図書館に関する記述の最初である。[14]「五十年史」には「第14図書館」

の章があり，これによれば「慶應義塾図書館の起源は，甚だ漠然たるものにして，元来初めより図書館設置の目論見ありしに非ず，唯私塾経営の必要上，時々買ひ求めたるものが，漸く集りて，何時の間にか書館と名の附くものと為りしが如し」，「兎に角義塾図書館が多少図書館らしき躰裁を備ふるに至りしは，明治二十三年義塾大学部の設立を以つて始まるものと云ふも不可ならず」と記されている。[15] 明治42年（1909）11月23日の創立50年記念図書館安礎式の式辞で塾長鎌田栄吉も大学部開設時の図書館を大学図書館の起源としている。

一方，明治40年（1907）10月創刊の「図書館雑誌」で竹内忠一は「慶應義塾図書館は初め福澤先生が購入されし洋書四五百冊と他に義塾関係の外国帰朝者が買ひ来りし数十部の図書とを基礎として漸々発展し来れるものなるが，明治二十三年大学部設立以来欧米より買入れし書籍漸く多く，明治三十一年頃に至り多少図書館らしき体裁を備ふるに至れり」[16] と書いている。「慶應義塾年表」の明治31年（1898）に「３月書館（図書館）を旧藩邸内講堂の一部よりれんが講堂一階に移転」，「９月書館幹事を設け，菅学応就任」なる二項が見える。[17] 従って，明治31年に大学図書館としての組織が徐々に整備されて行ったようである。「五十年史」によれば煉瓦講堂に移転したのは火災の危険を避けるためであったが，この頃蔵書も飛躍的に伸びていったものと思われる。そのためにも図書館員が必要とされた。[18]

伊東は図書室から図書館への脱皮を明治12年頃と見ている。

> 明治十年東京大学の開校式に福沢は講演を頼まれて出かけて行って，その施設を見た。それが動機か或は和歌山県新宮の元大名水野家が旧藩の蔵書を寄附しようと申し出たのが発端か，どちらかは判明しないが，その蔵書を中心に本格的な図書館建設に乗り出したことがあった。それは月波楼のような部屋の一隅ではなく，明治八年建てられた演説館の控室のすぐ脇に，木造の家を建て，図書を納めてそれを「文庫」若くは「書籍庫」と呼び，係は八田小雲と定められた。明治十二年には出来ていたと見え，その年の二月三日英国の下院議員サー・エドワード・リードが海軍卿川村純義と共に来校した時，すでに観覧させている。[19]

これについては「慶應義塾年表」に関係する記述を見い出すことができない。

慶應義塾図書館が大学図書館としての陣容を改めるのは図書館長田中一貞の就任によってであった。東大図書館，帝国図書館，大橋図書館の経営を参考にしながら，同時に第二回留学生として欧米での体験見聞を導入して田中は図書館の刷新を企てたらしい。

事実，創立五十年記念図書館の建設にあたっては「19世紀の傑出した図書館員の一人」[20] であった William Frederick Poole の見解を土台に更に新案を加えていっている。[21]

わが国国立図書館の源流である文部省書籍館は明治10年（1877）２月西南の役による政府の出費増大によって廃止される。慶應義塾にあっても入社生の減少と鹿児島県出身士族の塾生の退学等で福澤は義塾の廃止を決意する。[22] 明治12年には教員の俸給を$^1/_8$に減ずるなどの処置を行っている。このような秋に「文庫」若くは「書籍庫」を整備していたということの考究は後日を待ちたいが欧米の図書館思想に基づいて近代的な意味における大学図書館の誕生はどうも明治38年と見てよさそうである。

ところで「慶應義塾年表」では前述したように書館から図書館への名称変更，館長の就任を明治38年１月としている。百年史でも

> 三十八年（1905）一月には，前年の三月留学から帰った大学部教員田中一貞がその監督を兼ねることとなった。それまでの慶應義塾書館の名が改められて，慶應義塾図書館となったのもそのときのことであって，ここに義塾図書館は根本的整理改革が行なわれ，面目一新，真に図書館らしき体裁を備えるに至り，次第に広い場所を必要としてきたので，北側の旧会議室大広間に移され，その結果，ややもすれば塾監局の狭溢を訴えしめるようにな

った。[24]

となっている。一方，伊東作成の「慶應義塾図書館年表」によれば，これを明治38年4月としている。「五十年史」には

平山氏死去の後は，同年四月田中一貞氏，慶應義塾図書館監督の名義を以て，講師より書館を監督することと為ると同時に，慶應義塾書館の名を改めて，慶應義塾図書館と為し，急激に館員を増加し，根本的に整理事業に着手

とある。また竹内は「明治三十八年春新に帰朝したり田中一貞氏義塾大学講師より図書館を監督することとなると同時に急に館員を増し，根本的整理に着手」[26] と言っている。月日の探索は好事趣味とも受けとれるが，いづれが正しいのであろうか。

3. 創立五十年記念図書館

郵政省は慶應義塾創立100年の記念切手を発行した。これには福澤諭吉の横向き銅像とペンの記章，それに八角塔を望む図書館が演説館の生子壁をバックに淡い小豆色で彫刻されている。原画は大塚均，彫刻は笠野常雄の手になるという。一私立大学のために政府が記念切手を発行したという意味は極めて大きいが，ともあれ八角塔の図書館は常に義塾の象徴であった。高鳥正夫は「慶應義塾図書館史」序で「図書館が義塾における学問研究と教育に果した役割は極めて大きなものがあり，図書館の歩んできた道はまた義塾の発展のあとを示すものである」と言っている。誤解を恐れずに言えば，八角塔の図書館とはわが国の文明開花のシンボル，あるいは近代化の礎であったのではなかろうか。記念切手の意図がその辺にあるように筆者には思われる。

早稲田大学や明治大学等と共に義塾が文学，経済学，法学，医学の四学部から成る総合大学となるのは大正9年である。これは大正7年（1919）12月6日の臨時教育会議の答申にもとづいて公布された「大学令」の申請認可によるものであった。この時を百年史執筆者をして名実ともに官立の帝国大学と肩をならべる私立最初の総合大学と言わしめるが，[27] それまで大学と言えば明治19年（1886）東京大学を帝国大学と改称した国家が設置した本郷の官立大学ただ一つであった。もっとも大正7年までに政府によって明治30年京都帝国大学，明治40年東北帝国大学，明治43年九州帝国大学，大正7年北海道帝国大学が開設されている。この帝国大学の誕生とは明治日本が少しでも欧米先進列強諸国に近づき，それらに拮抗できる近代国家になるためには教育の刷新と振興こそが肝要であるとする森有礼の思想の体現であったという。[28] 大化の改新が朝鮮半島を媒介とする中国文明の取捨選択であったとすれば，明治維新はアメリカ大陸を媒介とするヨーロッパ文明の取捨選択であった。そしてこのヨーロッパ文明に対抗して行くためには「帝国」（The Empire）という語がぜひとも必要だったのである。

初代駐米公使（明治5年）として夷狄の現実を冷静に直視することのできた森にとって文明開花，殖産興業は自明の理であり，これを支えるものとして帝国の帝国による帝国のための大学は不可欠であった。[29] そしてこの大学は15年戦争を経て今日に至るまで，法科系高級官僚の養成を権威の拠り所しながらわが国近代化において独得の地歩を固めてきた。[30]

慶應義塾は明治23年（1890），ハーバード大学エリオット博士の推薦になる外人教師三名を招聘してわが国でいちはやく大学部を開設した。しかし国家は明治19年の帝国大学令によって，これを大学とは認めなかった。

図書館は大学教育上に欠く可からざる設備にして，欧米諸国の大学を見るに何れも宏大なる図書館の設あらざるなし。蓋し大学専門の教育に教場の講義と共に図書館の研究に重きを置くは欧米一般の趨勢にして，其国々の大学が図書館を以つて設備の一大要件と為す所以なれども，我国の如き公私図書館の数少なくして一般閲覧者の希望を充す能はざる国に於ては，大学の図書館を単に学生の研究場たらしむるに止めず，之を公開して世間の公益に資するの必要あるを信ず。[31]

これは「創立五十年記念図書館建設資金募集趣意

書」の一節である。図書館は大学の心臓であるとはよく言われる言葉である。Allan M. Cartter は1966年米国教育審議会（the American Council on Edrcation）の報告書で「the library is the heart of the university」と言って高等教育における図書館の役割と必要性を強調している。[32]

この「趣意書」で注目すべきことは二つである。一つは上に述べた「図書館は大学の心臓」という認識であり，いま一つは図書館行政が貧困だからだとは言っていないが，兎も角も公私図書館が少ないために一般人が困窮しているから公開図書館にしようという心意気である。西洋の図書館は16世紀末に紹介されていたという。[33] しかし，その出現のためには福澤諭吉の「西洋事情」を経て，京都の集書院まで待ねばならなかった。京都集書院は明治5年（1872）5月チャールス・ボルドウュンの建言と福澤の慫慂によって出来た「ビブリオテーキ」であった。[34] その思想が40年後慶應義塾図書館として開花するのである。

明治45年（1912）4月に竣工した50周年記念図書館の存在は名称がどうであれ，国家が承認しようとしまいと，慶應義塾が「大学」であったことの有力な証拠であり，筆者は慶應義塾の一図書館員としてこのような趣意書を起草できる先達を明治という時代に持てたことを誇りにしたいと思う。

現代でも立派に通用する「趣意書」は突然表われたのではない。官尊民卑の風潮の中にあって慶應義塾の発展とわが国の教育の向上を念願して，私学では例のない海外留学生の派遣を決定する。第一回留学生五名の一人，堀江帰一はアメリカ，イギリス，ドイツと遊学し，明治35年（1902）7月9日帰国する。留学中は「連日のように図書館に通い，つぎつぎに書籍を入手しては読みつづけた」[35] と言う。この時の経験がやがて図書館に対する改革の意見となって現われ，そして塾当局者を動かして行く。[36]

塾の象徴であった八角塔の図書館は昭和57年新館のオープンによってその役割は保存図書館となった。また三田山上の回りのビルヂング群によって三田通りからその偉容をだんだんと望めなくなってきている。しかし大正の屋並みからみた50周年記念図書館は随分と美しかったに違いない。さて本節の最後として明治45年5月18日の開館式での日本図書館協会長西村竹間の祝文を引用しておこう。

> 学術の研鑽は図書館に待つ事至大なり而して図書館の効用は其管理の良否に因り管理の良否は其建築の如何に関する事亦少しとせず特に耐火の能否は職として其構造の得失に是れ由る今本館は所謂「スタック」式「プール」式を折衷し欧米最新式を採用せられたりと聞く（略）抑本館は福澤先生が安政五年に本塾を創立せられてより五十年の記念として建設せらる即ち此の輪奐の美は先生の光輝を担ひ巍然として長に三田台上に屹立して将来我国図書館界を照して其進歩発展を指導するの海燈たらん事猶本書が品海を睥睨して船舶の進路を左右するの観あるが如きに到らん事嘱望に堪へざるなり。[37]（傍点引用者）

4. おわりに

慶應義塾は「中国伝来の＜義塾＞なる皮袋に，英国の近代私立学校という新しい酒を盛った」[38] 一私塾として日本近代教育の先駆けとなった。その後，険阻な125年の歳月を閲みしながら，地球的規模になった国際社会で自己の役割を模索しながら21世紀に歩を向けはじめた。

昭和59年9月17日の日本経済新聞朝刊は創価大学と丸善がオンラインで結ぶということを報じている。いま大学図書館は先端電子技術C＆Cを導入してどのように経営したらよいのか等し並みに悩んでいる。わが慶應義塾図書館も例外ではない。

われわれの先達が時代時代の転換期にどのように対処して行ったかを検証することによって，情報化社会における大学図書館の姿を見通す，筆者にとってそのような作業がいまはじまったばかりである。

注

1) 福澤諭吉　富田正文校注解説　福翁自伝　慶應

義塾　昭33　p．188

2）「西洋事情」初編巻之一の「文庫」の項。これが西欧図書館紹介の劫初と言われていたが，斎藤はこれに異議申し立てをしている。[3)]

3）斎藤毅　西欧図書館知識の移入について(1)：日本図書館思想史の一断面　**図書館短期大学紀要** No. 10 1975 p. 7-19

4）慶應義塾大学三田情報センター　慶應義塾図書館史　昭47「凡例」

5）中村初雄　慶應義塾日本図書館学校を認識せよ　**図書館雑誌**　v. 48 N. 11 1954 p. 387

6）ロバート・ローレンス・ギットラー　ジャパン・ライブラリイ・スクール：慶應義塾大学図書館学科　**図書館雑誌**　第45年第3号　昭26　p. 40

7）ibid.

8）慶應義塾図書館史　p. 234

9）「近世日本は欧米の影響を受くること多く，政治においても，軍事においても，経済においても，技術においても，科学においても，教育においても，明治初年には傭外国人から親しく手を執って教へられた。しかも図書館に関する限においては，今日まで一人の外国人も来てわれわれを教ふることはなかった」。[10)]

10）竹林熊彦　近世日本文庫史　京都　大雅堂　昭18　p. 31

11）私立慶應義塾　慶應義塾五十年史　明治40

12）慶應義塾　慶應義塾百年史　付録　昭44　p. 314

13）しかし，「図書館」という語はこれ以前に頻繁に使われていたらしい。例えば明治33年1月発行の「**慶應義塾学報**」(p. 65) には次のような記事が見える。「○図書館の近事　義塾図書館は，川勝貞吉君の熱心と勉強とに依り，漸次整理されつつあることなるが，昨冬十一月中に於ける開館時数，及び閲覧人の数を聞くに，左の如し　開館事数　二百二十四時　貸出書数　四百八十八冊　閲覧人数　三百六十七人　因に記す，近来塾員にして，同館へ書籍の寄贈を為すもの甚だ多しと云ふ」。

14）慶應義塾百年史　付録　p. 283

15）慶應義塾五十年史　p. 502, 504

16）竹内忠一　慶應義塾図書館の建築及び整理　**図書館雑誌**　第壱号　明治40年10月　p. 28

17）慶應義塾百年史　付録　p. 301-302

18）慶應義塾五十年史　p. 505

19）慶應義塾図書館史　p. 35

20）Wedgeworth, Robert et. al. ed. ALA world encyclopedia of library and information services. Chicago, American Library Association, 1980. p. 435

21）竹内　op. cit. p. 27

22）「明治十年代は新旧私学の交替の時期であった。文明開化の潮にのって多くの私塾が生れたが，十年代になって，これら私学はいっせいに「ふるい」をかけられ，消えるものは消え，この「ふるい」に堪えた少数のものだけが残ることになる。私塾にとって，ある意味では最悪の時期であった。」[23)]

23）慶應義塾　慶應義塾百年史　上巻　昭33　p. 712

24）慶應義塾　慶應義塾百年史　中巻（前）　昭和35　p. 574-5

25）慶應義塾図書館史　p. 316

26）竹内忠一　op. cit. p. 28

27）慶應義塾　慶應義塾百年史　中巻（後）　昭和39　p. 9

28）神田孝夫　帝国大学の思想〔芳賀徹他編　西洋の衝撃と日本　東京大学出版会　1973（講座比較文学 5）p. 126〕

29）森有礼が文部大臣に就任するや否や東京大学が帝国大がへと変貌するが，「帝国」なる語を愛用した森の意図を神田は前掲書で分析している。

30）中山茂　帝国大学の誕生：国際比較の中での東大　中央公論社　昭53（中公新書 491）

31）慶應義塾百年史　中巻（前）p. 571

32）ALA op. cit. p. 1

33）斎藤　op. cit. p. 8

34）竹林　op. cit. p. 90-93

35）慶應義塾　慶應義塾百年史　別巻（大学編）昭37　p. 54

36）慶應義塾図書館史　p. 54

37）慶應義塾図書館開館式　**図書館雑誌**　第15号　p. 77-78

38）慶應義塾百年史　上巻　p. 245

情報の量と質

渡辺　彰

“情報”という言葉は日頃使いなれているわりに，いざその語義を説明しようとすると一口ではいい辛いものである。筆者は言語学にはほど遠い人間であり，厳密なことは述べられないが，国語辞典では情報とは「あることがらについてのしらせ」，英和辞典や大英百科辞典には，Information が告発，犯罪記録の意などとも記されている。これらは，“教育情報”，“理工学情報”のニュアンスとはかなり掛け離れているように感じられる。最近“情報記録材料”とか“情報伝送材料”という用語が，たとえば前者はフィルム，後者は光ファイバーなどを指すように使われだしてきた。このような場合の情報とは，“データ”や“信号”に近い意味を表わしている。

通信などで伝えられる情報を量として扱うためにシャノンが次のような“情報量”を定義した。すなわち，ひとつの問に Yes，No の答をもつ情報で最小の単位を定め，1 bit と表わす。したがって文字を選択する場合に 2^n の可能性の中から1文字が選ばれたなら，この文字は n bit の情報量をもつことになる。つまりローマ字1文字は 4.7bit，ひとつの俳句のもつ情報量は 95bit といえる。ある人がこのようにして大英百科辞典の全情報量を算出し，人間の脳の記憶受容能力を推定した結果から，約2週間でこの辞書のすべての内容が記憶できると述べた記事を読んだ記憶がある。このような結果が現実に適さないことは自明である。

ことほど左様に，学術情報の内容を定量的に表現することは難しいと考えられるが，“情報の質”を定量化するのはさらに困難である。昔聖書のリプリント版が出はじめた頃に，リプリントになる本は良書にちがいないといわれていた。今でもそうであろう。しかし，学術専門書ではかならずしもそうはならない。限定出版された評判の良い本はすぐ売切れ，売手が少ないので古本屋の店頭に出現することは少ない。語弊のある表現をすれば，良書とは本屋で買いにくい本であるともいえよう。

学術論文が今の時代のように多種，多量に出版されるようになると，文献を几帳面に読み出すと際限がなくなりそうである。研究者が文献を読む時間と研究業績の間にはどの程度の相関があるだろうか？一流の研究者で文献を問題にしないで創造的な研究を進めている人も多い。そういう人達は仕事をする前に文献を読んでしまうと，潜入感や固定的なイメージが残って創造ができにくくなると言っている。いずれにしても今日の多量の学術情報をいかに整理し，優れたシーズソースを探し出すかについては，各人が自分に適した方法をマスターしておくべきである。欲張ったコンピュータ検索をすると，とても短時間では読みこなせない程の論文名がはじき出され，中には入手困難な文献も多量に含まれることも多い。

大分昔の話であるが，あるアメリカの会社研究所で技術担当の副社長と話をしていた際に，筆者の面前で，「ちょっとの間，失礼」と言って，山積みされた英文の学会雑誌から，必要なページを破って抜き出し，残りをくずかごにほうり込んだのを筆者が見て唖然とし，思わず「もったいない」と叫んだことがある。その際の学会雑誌とはたとえば，Physical Review とかそれに類する，日本の図書館ではやや貴重品扱いにしているものであったためである。当の副社長は筆者が驚いているのを見てむしろ怪げんな表情で「なぜそんなことを言うのか」と問いかえされた。若干の対話の後で，矢張りその副社長の情報のファイリングロッカーの中は実にきちんと整理されており，これが自分の財産であると言われたのが印象的であった。

学術情報の質をよく吟味し，ルーツおよび，オリジナルな論文をピックアップし，シーズとして活用するための努力は，今後学術研究がますます多様化し専門化が進むにつれ研究者としても重要な課題となるであろう。学術情報の整理法，活用法に関して，研究・教育情報センターが音頭をとって体系的な研究を促進されんことを希望する次第である。

（理工学部助教授）

レファレンス・サービスとライブラリー・インストラクション

——スライドの試作——

市古健次
（三田情報センター選書課）

1. はじめに

1970年代後半，中央大学をはじめ，東京23区内にあった大学のいくつかは，広いキャンパスを求め，郊外に移転した。それと同時にキャンパスの一画に近代的な図書館を建設し，その新しい図書館は薄暗くて，カビ臭いという従来からある図書館のイメージを一掃してしまった。また，慶應や上智大学は新館を建て，同様に利用者に申し分のない環境を提供している。

館内に一歩入ると，目録ボックスが整然と並び，書庫は自由に閲覧できる開架制，閲覧室にはゆったりとしたソファーや洒落れた机と椅子が並べられている。さらに，カセット，スライドやビデオなどのＡＶ資料の設備もある。

新図書館の建設でも明らかなように，ここ数年学生を取り巻く環境は着実に整備されてきている。その一方で，学生はこの新しい図書館を充分に使いつくしているだろうか。その答は，レファレンス・カウンターで見る限り，“否”。そんなところから，図書館利用に関する知識を提供する場，すなわち，ライブラリー・インストラクションの必要性を感じるのである。

2. 参考質問の分析

昨年度レファレンス・カウンターで受けた質問件数は13,000件。その半数の6,700件が学部生からの質問で，その内容も様々である。文部省の『大学図書館実態調査報告』の業務内容に準じて分類すると，学部生からの質問は表1のようになる。これを見ると，利用案内・指導が82.3％と非常に高い割合を占めているが，この項目には，その大半を占める場所・請求記号などの指示に関する質問のほか，本来的な利用指導である文献探索も含まれている。

表 1

	件　数	%
利用案内・指導	5,588	83.2
事項調査	167	2.5
所在調査	924	13.7
その他	40	0.6
計	6,719	100

そこで参考質問をインストラクションの観点から把握するため，ある時間帯だけ，学部生とレファレンス係員（筆者）との応対過程と，使用したトゥールを記録することにした。その期間及び時間帯は，1983年6月10日から1984年3月29日の間の週1日，11時30分から12時30分の1時間と，16時30分から18時までの1時間半（ただし，この時間帯は，夏，春休みを除く。）。受けた質問は111件で，その内，学部生の質問は84件であった。

さて，参考質問の類型化は，Ｓ.ロースティーンやＫ.Ｉ.エマーソンをはじめ，多くの研究者によって試みられているが[1]，参考質問の実体を的確に類型したものはないと言われている。そこで，「いずれを選ぶかは具体的な条件によって決める必要があるが，いたずらに分類に凝っても実効性はない。むしろ，利用目的を確定した上で，分類項目を決め，その概念規定を明確化することこそ重要である[2]」という考え方に立って，ロースティーンの類型化及び概念規定[3]を基礎に次のように類型化し，その例を84件の質問の中から示していくことにする。

(1) 場所指示に関する質問

特定の図書,図書館施設の配置についての質問。

例1　1983年11月24日(木)　17時40分

学部生―"H" 番号の本はどこにありますか。

係　員―旧館にあります。利用は18時までです。(図書館利用案内シリーズ No.8『図書の配置記号と配置場所』を示しながら。)

(2) クイック・レファレンス

1つ,ないし2つの基本的な参考図書を用いて,即座に確かめられる事項についての質問。

例2　1984年1月26日(木)　16時45分

学部生―ハンナ・アレントの綴りを知りたいのですが。

係　員―(『岩波西洋人名辞典』を見せる。)カードをひく時は,ファミリー・ネームから。

(3) 調査を要する質問

時間を要し,多くのトゥールを用いて回答する質問。

例3　1983年10月17日(木)　18時

学部生―松坂佐一の『総合判例研究民法7』を読みたいのですが,慶應にないので紹介状を書いて下さい。

係　員―一応,著者名,書名の両方のカードを調べましたか。

学部生―調べました。

係　員―出版社,出版年はわかりませんか。同じような書名が多いので。

学部生―わかりません。(判例研究書の註を見せながら。)

係　員―①註,その本の凡例等を確認する。

②『日本書籍総目録』,『現代日本執筆者大辞典』,有斐閣のカタログを調べたが,確認できず。

③民法の概説書を開架書庫に見に行くと,『総合判例研究民法』は『総合判例研究叢書民法』と同じであることがわかる。

④学部生と一緒に書名カードを見に行くと,この書名のカードは入っていた。

係　員―著者名カードにカードがない理由は,この本が多数の執筆者による論文集の形をとった本であるためです。

(4) 主題探索の方法に関する質問

ある分野についての図書,雑誌論文の探し方についての質問。

例4　1983年10月25日(火)　11時40分

学部生―各国の年金制度について調べたいのですが。

係　員―欧米ですか。

学部生―そうです。

係　員―(単行書を探すために,日本十進分類法=NDCと分類目録の見方を説明し,さらに雑誌論文を探すために,『雑誌記事索引』の使い方を示す。)

この4つの類型に従って,学部生からの質問を分類すると,表2になる。場所指示に関する質問

表　2

	件　数	%
場所指示	36	43
クイック	20	24
調査	9	11
文献探索	14	16
その他	5	6
計	84	100

は,全体の43%で,かなりの割合を占めている。この数字は,利用についての知識を体系的,系統的に得る機会が極めて少ない現状において,当然かもしれない。また,見立たないサイン表示が,こうした場所指示の質問を多くする要因になっているかもしれない。

クイック・レファレンスは24%。質問内容から判断すると,クイック・レファレンスもインストラクションでかなりの部分を補うことが可能であろう。百科事典,人名辞典,専門用語事典,年鑑,文献目録などの参考図書の中で,基本的なものは,自分で使える力を学部生は早い時期から備えておくべきであると思う。

調査を要する質問は10%であったが,インスト

ラクション実施後，この種の質問は増えることが予想される。増加傾向はすでに米国のある大学図書館の調査で実証されている[4]。

以上のように，参考質問の分析から判断すると，学部生は基本的な図書館利用に関する知識をあまり持っていない。そこで，図書館の紹介を中心としたオリエンテーションや，文献探索を重点に置いたインストラクションの実施によって，学部生は自分の必要としている文献を自立的に，能率よく探すことができるようになると思われる。

3. インストラクションの現状

三田のレファレンス（情報サービス担当）がインストラクションを始めたのは，1979年であり，その直接的な契機はゼミ担当の先生からの要望であった。それ以来，毎年2，3ゼミずつ増え，新館が開館した82年には一挙に26ゼミ，83年は30ゼミ，そして今年（84年6月末現在）は39ゼミに及んでいる。しかしながら，実施ゼミは三田における総ゼミ数の五分の一程度に過ぎない。

方式は，説明と現実とのイメージ・ギャップをなくすために，担当者と一緒に廻る“ツアー”方式をとっている。同様にその構成は，各々のゼミに即した図書を選び，その図書カードの説明，文献目録の説明・紹介，他館の利用法からなっている。一回のツアーの人数は一担当者に付き，12，3人までとし，人数の多いゼミでは2，3班に分けて行っている。時間は45分間。ツアー時には，利用案内のパンフレットのほか，文献目録の説明に必要な箇所のコピーを配布している。さらに今年から各ゼミに即した簡単な“書誌の書誌”を出来る限り作成し，配布している。

ツアーの一場面

昨年4月，ツアーの効果を一層高めるため，ツアーの前にスライドの上映を試みたが，スライドの内容が必ずしもそのゼミに即していなかったことや，撮影に技術的な問題があったことで，その効果は期待したほどではなかった。その一方で，ある学生は「ツアーの時，うしろの方にいたためにカードがよく見えなかったが，スライドで予備知識が入っているので，余り気にならなかった」とスライドの補助的な役割を指摘してくれた。主題と撮影の問題を解決すれば，スライドもインストラクションの一方法として有効性があることが再確認できたのである。

このように試行錯誤しながら，行って来たインストラクションは，ゼミ担当の先生の意向と，担当者が持っていた必要論の一致によって，推し進められてきた。そして，学部生のインストラクションに対する潜在的要望も加わり，実施ゼミが増えている。増加傾向にある状況において，ツアーの効果を高め，さらに多くのゼミに対応できるために，ツアーのほかに，他の方法，すなわち視覚や聴覚に訴えるＡＶ資料によるインストラクションの方法も本格的に研究する必要性が出て来た。

4. スライドの制作

1970年代，インストラクションが飛躍的な発展をとげた米国大学図書館において，その方法は伝統的なツアーをはじめ，講義，カセット・テープ，スライド，ビデオ・テープ，そしてコンピュータと多様化している。Library Orientation Exchange (LOEX) の調査によると[5]，米国における840の学術図書館は，合計1,632のプログラムを作成し，そのプログラムの3割がスライドによって行われている。英国も同様に，116館の内，99館がスライドを制作している[6]。

米英ではスライドが多く用いられているが，スライドが最も効果的で，しかも利用者が関心を持つ方法と言うわけではない。米国の大学におけるスライドとカセットとの比較調査によると[7]，7割の学生が，カセットの方が「おもしろい」，「役に立つ」と評価している。とはいえ，今のところ最善の方法はなく，従来からある方法に加えて，

"セルフ・ペース・ツアー"（self-paced tour）や"ポイント・オブ・ユーズ"（point of use）などの趣向が凝らされている[8]。

そこで，今回ツアーとの併用を前提で，比較的，制作が容易なスライドを制作することにした[9]。そして撮影，録音作業の前に，基本方針，基本構成，主題選択，場面構成の順に検討を行った。

〔1〕基本方針

a）目的―卒論のための文献収集

b）対象―ゼミ学生（法学部政治学科）

c）人数/1回―20人

d）形式―スライド，ナレーション

e）場面数―80コマ

f）時間―20分間

〔2〕基本構成

基本構成は利用者のニーズ，すなわち利用者が必要としていること，知りたいことによって決まる。このニーズ・アセスメントは本来，綿密に計画された利用者動向調査に基づいて行われるべきであるが，今回は各カウンターで受けた質問の整理によって行った。レファレンス・カウンターを含め，閲覧課，雑誌室，総合資料室，そして目録案内を行っている整理課の各々の担当者からの回答を集計すると，利用者は主に，(1)場所・配置記号，(2)主題探索，(3)所在，(4)事項について質問をする傾向が出た。そして，米国のテネシー，バーモント大学のインストラクション用ビデオを参考とし[10]，ニーズ・アセスメントに基づいた基本構成を(1)カード目録の見方，(2)文献目録の使い方，(3)ＩＬＬとした。

〔3〕主題選択

ゼミ学生を対象としているインストラクションのため，ゼミに関連した主題が好ましいことは言うまでもない。主題には，政治学科，ＮＤＣの構成，邦文および欧文の文献使用の三点を考慮し，日米関係，行政改革，官僚制などがあがった。そして，政治学科の大学院生にも意見を聞き，最終的に，主題をカレントな問題である行政改革に決めた。周知のように，日本では財政赤字のため行革の必要性が叫ばれており，一方米国でもレーガン大統領が「小さな政府」，"Federalism"を展開している。そこで「行政改革―日米比較―」というテーマの下で，文献を探す過程を描くことにした。

〔4〕場面構成

場面構成にあたっては，ゼミ学生が出来るだけ自然にスライドに溶け込めるように，参考質問の例4―利用者がある分野の文献を探すために，カウンターを尋ねる形―と同じ形にした。場面構成の概略は以下の通りである。

a）行革について

b）カウンターにおける応対

c）ＮＤＣ，分類目録の見方

d）人名辞典，専門用語事典の紹介

e）文献目録の使い方（雑誌論文の探し方）

f）ＩＬＬ

g）卒論の提出

場面構成の細部については，繰り返しを避け，カード，本以外の場面も多用した。

以上のプロセスを経て，撮影と録音を行った。

5. インストラクションの実施とその感想

多くのプログラムが制作され，実施されている米国では，その関心がプログラムの評価（evaluation）に集っている。一方，三田では，やっと制作の段階に入ったところである。しかしながら，歴史の浅いインストラクションであっても，評価の問題を避けて，続けて行くわけにはいかない。

そこで，法学部政治学科の3つのゼミの協力を得て，学部生の関心および要望の把握と，プログラムの修正，改訂材料の収集の意味を兼ね，インストラクション実施後，ゼミ学生に感想を書いてもらうことにした。

さて，インストラクションのやり方はゼミ毎に変え，次の要領で行った。

Ａゼミ―ツアー（50分），内容：ゼミに即したカード目録と文献目録の説明。

Ｂゼミ―スライド（25分），内容：行政改革／ツアー（30分），内容：ゼミに即したカード目録と文献目録の説明。

Ｃゼミ―スライド（25分），内容：行政改革／ツアー（35分），内容：行政改革を中心に，ゼミに即した内容を補足説明。

自由記入方式によって得た感想の集計結果が表

表 3

	ゼミ	A	B	C	合計
	学年	4年	3年	3年	
	人数	8人	10人	5人	
	方法 T＝ツアー，S＝スライド（S≠TはSとTの内容が異なる）	T	S≠T	S＝T	
インストラクション全般（26件）	有意義，参考になった	3		3	6
	実施学年を早くして欲しい	2	2	1	5
	図書館利用を再認識できた		4		4
	雑誌の説明がわかりにくい		4		4
	総合資料室の利用法がわからなかった	1			1
	総合資料室，図書館・情報学資料室，貴重書室の説明をもっとして欲しい			1	1
	今後も続けるように			1	1
	PRをもっとやった方がよい	1			1
	説明して欲しい項目を事前に担当者に伝えておけばよかった			1	1
	実際に自分で本を探す作業を行った方が効果的だと思う			1	1
	担当者が親切だった		1		1
ツアー（2件）	説明が手短かでよかった		1		1
	説明が前にいる人を対象にしているようだった			1	1
スライド（5件）	わかりやすかった		1	2	3
	画面の変化が乏しい		1		1
	長かった		1		1
ツアーとスライド（5件）	組合せでよくわかった		1	4	5
その他（12件）	図書館の設備が非常によい	2			2
	机，椅子がすわりにくい	1	1		2
	総合資料室を学部生にも公開して欲しい	2			2
	雑誌の貸出もして欲しい		2		2
	サインが見にくい	1			1
	利用案内のパンフを常備して欲しい		1		1
	レファレンス係員が親切で本を探す時に助かる	1			1
	いつも不気嫌そうな女性館員がいる	1			1
計		15	20	15	50

3である。3ゼミ合計23名の総記入件数は50件。ゼミ学生は，インストラクション以外の要望，関心についても記入してくれた。多くの項目の中で，担当者にとって特に関心をもつのが，インストラクションについてどう思っているかということと，説明内容をどの程度理解できたかということで，問題をこの二点に絞り，話をすすめて行くことにする。

インストラクション観について，「有意義，参考になった」，「図書館利用の再認識になった」と

書いた学生は10名で，半数近いゼミ学生がプラスの評価をしている。当初，中には「役にたたない」とか，「時間の浪費」とか，インストラクションを否定的に見る学生がいるのではないかと思っていたが，マイナスの評価をした学生は今回の場合，一人もいなかった。こうして見ると，インストラクションに対して，潜在的な要望がかなり多いと推測できる。

「実施学年を早くして欲しい」という要望が，4年生に2名，3年生に3名，合計5名であった。慶應の場合，一般教養課程が日吉，専門課程が三田と，キャンパスが分かれているため，本格的なインストラクションの実施には，まず日吉と三田情報センター間の連携が前提となるであろう。連携によって，学部生は必要に応じて，段階的に図書館利用に関する知識を習得できると思われる。

次に内容の理解度については，「雑誌の説明がわかりにくい」という感想が，Bゼミに4件と集中している。Bゼミには，スライドで行政改革についての雑誌論文を『雑誌記事索引』から，そしてツアーでゼミに即した雑誌論文を『東洋学文献類目』から探す方法を説明した。スライドとツアーの主題の不一致により，「わかりにくい」という結果がBゼミにでたのであろう。このことが，スライドとツアーの併用の評価にも反映している。スライドとツアーの主題が同じであったCゼミでは，両者の併用をプラス評価しているのが4件であったが，Bゼミでは1件。さらにBゼミの学生は，スライドに「画面が乏しい」，「長かった」という評価を与えている。

このようにスライドとツアーにおける主題の不一致が「雑誌の説明がわかりにくい」要因となって，延いてはスライド自体のマイナス評価につながったと思われる。したがって，スライドとツアーの併用の際，両者の主題の一致か，両者の実施期間をあけた方が，理解しやすくなる。そのような使い方をすれば，スライドは，インストラクションにおいて，ツアーの補助的な役割を果たすと同時に，ツアーの時間の半減も可能となる。

6. おわりに

利用者は問題解決のために，明確な目的や，漠然とした潜在的要望を持って，図書館を利用している。明確な目的を持っている利用者には，カウンターで解決策を提供しているが，潜在的要望に対してどのような対処の仕方があるだろうか。例えば，目録カードを調べたが，自分の必要な本が自館にない場合を想定してみよう。この場合，レファレンス・カウンターへ行って，所蔵館を調べてもらい，紹介状を持って所蔵館に行って初めて，その利用者は必要な本を読むことができる。つまり，利用者は，ＩＬＬというサービスを知っているために，目的を達成することができるわけである。逆にレファレンス・カウンターに行けば，解決策があることを知らなければ，その利用者は恐らく目的を達成することはできない。利用者は，図書館でこのようなサービスを行っていることを知らないために，「その本を読みたいのだが」という段階で終わり，次への行動をとれないでいる。だが，その利用者は内心何か解決策を求めている。このような潜在的要望に対処する方法の一つが，ライブラリー・インストラクションであろう。

三田に新館が開館し，各カウンターにおけるレファレンス・サービスは一層充実してきた。レファレンス・サービスは一般に，利用者の質問に適切な情報，指示を提供する。しかしこのサービスは飽くまで利用者が直接，カウンターを尋ねることを前提としている。

一方，ライブラリー・インストラクションは利用者に自立的な文献探索を可能にする。簡単なことなら，自分で探したい人や，図書館で行っているサービスを知らないため，サービスの恩恵を受けていない人もいる。さらに図書館の構造，書架の配置をよく知らないために，図書館を充分に使い切れない人もいる。インストラクションの対象は，こうした利用者である。インストラクションの目的は本来，「図書館利用者のレファレンス・デスク，あるいは図書館員からでなく，無知と非効率からの解放をめざす[11]」ことにある。すなわち，インストラクションとは，利用者が必要な文献を自立的に，能率よく探せるように，カード目録，文献目録の基本的な利用に関する知識を前以

って，必要最少限度，体系的，系統的に提供することである。

このインストラクションとレファレンス・サービスは機能的に異なるが，相互補完的な関係にある両者が円滑に機能してこそ，今までにない効果的な図書館利用ができる。インストラクションを受けた利用者でも，何かわからないことがあれば，カウンターに尋ねてレファレンス・サービスを受ける。この新しい利用者の流れが定着すれば，カウンターで受ける質問内容は変わることが予想される。

1970年代後半，米国大学図書館におけるインストラクションの状況が日本に紹介され，その必要性が説かれ始めた[12]。関西の竜谷大学図書館はゼミ単位のインストラクションを積極的に実施している[13]。日本の大学図書館でも，インストラクションを図書館における一機能として徐々に認められ始めた。今後，インストラクション担当者間で情報交換を積極的に行ない，効果的なライブラリー・インストラクションを実施して行きたいと思う。

尚，今回の研究は，昭和58年度慶應義塾学事振興資金の援助の下で行った。スライドは，磯宏美（情報サービス担当），松本和子（同）との共同制作である。

1) 例えば，John Martyn & F. Wilfred Lancaster, *Investigative Methods in Library and Information Sciences: An Introduction* (Arlington, Information Resources Press, 1981), pp. 111～114, Diana M. Thomas, et al., *The Effective Reference Librarian* (New York, Academic Press, 1981), pp. 98～100, 参照。

2) 長沢雅男『参考調査法』（理想社，1969），167～168頁。

3) Samuel Rothstein, "The Measurement and Evaluation of Reference Service," *Library Trends*, Vol. 13, No. 2 (January 1964): 458. 著者は参考質問を (1) directional questions, (2) ready reference questions, (3) search questions, (4) readers' advisory questions の4つに類型している。

4) Penelope Pearson & Virginia Tiefel, "Evaluating Undergraduate Library Instruction at the Ohio State University," *The Journal of Academic Librarianship*, Vol. 7, No. 6 (January 1982): 355.

5) Carolyn A. Kirkendall, "Information Exchanges for Library Instruction: Disseminating the Media," *Drexel Library Quarterly*, Vol. 16, No. 1 (January 1981): 105.

6) Ian Malley, "The Production and Use of Audiovisual Media for User Education in UK Academic Libraries," *Audiovisual Librarian*, Vol. 8, No. 4 (Autumn 1982): 185.

7) James Rice, Jr., *Teaching Library Use: A Guide for Library Instruction* (Westport, Greenwood, 1981), pp. 52～53.

8) Carolyn Kirkendall, "Co-operation, Co-ordination and Communication: The LOEX Clearinghouse Experience," *British Library Research & Development Reports*, No. 5503 (1980): 40.

9) 制作にあたっては，James Rice, Jr. の前掲書をはじめ，以下の文献を参考にした。"Guidelines for Bibliographic Instruction in Academic Libraries," *College and Research Libraries News*, 38 (April 1977): 92, Association of College and Research Libraries, *Bibliographic Instruction Handbook* (Chicago, American Library Association, 1979), Millicent Palmer, "Creating Slide-Tape Library Instruction: The Librarian's Role," *Drexel Library Quarterly*, Vol. 8, No. 3 (July 1972): 251～267.

10) 両大学のビデオ・テープは，LOEXのカーケンデール女史の好意により，借用することができた。

11) Janice T. Koyama, "Bibliographic Instruction and the Role of the Academic Librarian," *The Journal of Academic Librarianship*, Vol. 9, No. 1 (March 1983): 12.

12) 渋川雅俊「大学図書館利用者教育研究序説『テキサス大学図書館利用者教育総合計画』を中心として」，*Library and Information Science*, No. 16 (1978): 235～251.

13) 渋田義行「大学における利用指導の意義について—3，4回生を対象とした事例を中心にして—」，『図書館界』，第33巻，第6号（1982年3月）：243～248.

慶應義塾図書館蔵書劣化調査計画

上　田　修　一
（文学部助教授）
奥　沢　美　佐
（大学院文学研究科修士課程）

蔵書の保存は，大学図書館にとっての主要な機能のひとつである。図書の保存，劣化についてわが国では関心が高かったとは必ずしも言えないが，最近，金谷博雄氏や小林嬌一氏らの問題提起をきっかけとして，書籍用紙の酸性化問題が注目をあびるようになった。1983年から1984年にかけて次のようなシンポジウムや講演会がもたれている。

1. 昭和58年度私立大学図書館協会西地区部会京都地区研修大会「図書の保存について」1983年10月31日（京都外国語大学）
2. 国立国会図書館　シンポジウム「紙の劣化と図書館資料の保存」1983年11月9日
3. 専門図書館協議会関東地区協議会　第9回公開専門懇談会　1983年12月6日
4. 金沢工業大学「'84資料の保存，劣化防止および修復等に関する国際セミナー」1984年6月7日～9日

米国では，30年以上前からこの問題への取り組みがみられ，特に，1956年に設立された米国図書館振興財団（The Council on Library Resources）は，積極的に関与している。有名な Barrow の研究を援助し，現在では保存のための全国計画の策定を推進している。

米国や西欧諸国に比べ，わが国では資料の保存に関する基礎研究，調査の蓄積が不足している。先にあげた各種の会合でも，問題の展望と米国等の活動の紹介，それに図書館界，製紙業界，出版界，研究者等を含む協力体制の必要性を確認するにとどまっている。

わが国の大学図書館がまず取り組む必要があるのは，現在の保存状況の把握である。図書館資料の保存状態は，書籍用紙の一般的な特性ばかりでなく，それぞれの環境条件によって異なることが明らかにされている。従って，適切な保存計画をたてるためには，まず図書館資料の劣化調査からはじめるのが順当と言えよう。

米国のミシガン大学，ノース・カロライナ大学，エール大学図書館等の劣化調査例がすでに発表されており，わが国では国立国会図書館が1983年に調査を実施し，結果の概要が明らかにされている[注]。そして，調査方法や判断基準も共通となりつつある。調査の際に資料を破損することはできないために観察法に頼らざるを得ない。そして紙を折りまげた際の強さと変色の度合で判断するのが，一般的な傾向となっている。

今回の三田情報センター蔵書の調査は，こうした既往調査例の検討にもとづいており，概要は次のようなものである。

1. 調査目的
   三田情報センター蔵書の劣化状況を観察によって調査し，他館の調査結果とも比較する。
2. 対象資料
   新図書館 B4F～5F，旧図書館の B2F～3F から模本抽出した。国内図書（和装本等を除く）1,023冊，外国図書1,193冊である。なお，逐次刊行物，会議録，学位論文，特殊コレクション，貴重書は対象外とした。
3. 調査期間
   1984年5月14日～26日
4. 調査方法

観察によって行なう。劣化の度合を5段階（Excellent から Very Brittle（くずれているか，くずれかかっている）まで）に分け，さらに変色の度合をみる方法を用いるが，これは，国立国会図書館とほぼ同じで，判断基準も調整している。

現時点（1984年6月）では，調査は終了しており，粗集計の段階では三田情報センターの蔵書は国立国会図書館の蔵書より多少良好であるが，全体の傾向は，ほぼ同じ（1900年以降の図書の劣化が進んでいる）であることが明らかになっている。

なお，雑誌の劣化，複写などによるいたみの度合，および環境条件の調査も行なう予定である。

注）“紙の劣化と図書館資料の保存；シンポジウムの記録”図書館研究シリーズ，No24，p. 129-204(1984)

小展示ニュース

昭和58年

1月11日～28日
新年お伽草子展

2月1日～15日
三田文学ライブラリー最近戸板康二氏寄贈資料展示

2月16日～3月12日
高橋誠一郎西洋経済史稀覯書展示

5月1日～15日
久保田万太郎没後20周年記念展示

5月10日～20日
創立125年記念展高橋誠一郎浮世絵コレクション展示

7月4日～21日
女性解放思想の古典

9月26日～28日
オーストラリア関係参考図書

9月29日～10月15日
折口信夫没後30周年記念著作展示

10月6日～15日
斎藤茂吉歌集・歌論展

10月24日～12月2日
高橋誠一郎浮世絵コレクション小展示

11月1日～11日
国際シンポジウム講演者著作展示

昭和59年

1月17日～2月3日
高橋太華宛明治画人文人書簡展示

4月6日～30日
高橋太華と根岸党展示

5月7日～23日
龍岡晋氏旧蔵久保田万太郎関係資料展示

5月25日～9月19日
雑誌「三田文学」の流れ展示

9月25日～10月31日
ラフカディオ・ハーン没後80周年記念展示

第3回慶應義塾図書館講演会

「Book・man・ship　ヨーロッパ中世～現代まで」
昭和59年7月7日　　於　図書館・新館　A・Vホール
講師　高宮利行（文学部助教授）

書痴・書債・売書

金　文京

何ごとにつけ，それに熱中しすぎたあまり常識の枠からはずれてしまった状態を，「痴」という。遊山痴，情痴，なかには銭痴などというエゲツないものもあるが，書痴などは，その中でもまず品のよい部類に入るであろう。

昔の中国人は，自分の本にやたらとハンコを押したものだが，なかには所蔵者の愛書，乃至は書痴ぶりが窺えるものがあって興味深い。二三紹介すると，陶崇質という人の蔵書印は次のような長たらしいものであった。「聚書藏書，良匪易事，善観書者，澄神端慮，浄几焚香。勿巻脳，勿折角，勿以爪侵字，勿以唾揭幅，勿以作枕，勿以夾策，随開随掩，随損随修。」（本をあつめるのは手易いことでない。ちゃんとした読者は，精神を統一し，きれいな机に香をたいて本を読むものだ。本を巻いてはいけない。角を折るな，汚い爪で字にさわるな，唾をつけてページをめくるな，枕にするな，脇にはさむな。あけたらとじろ，いたんだら修理せよ。）これなど，ちょっと耳が痛いが，まだ大したことはない。なかには脅迫調もある。「有仮不返遭神殊，子孫竊之何其愚。」（借りて返さない奴には天罰が当たるぞ。子孫でこれを売る奴は大馬鹿者だ。）次は哀願調。「吾存寧可食吾肉，吾亡寧可発吾椁，子子孫孫永勿鬻，熟此自可供饘粥。」（貧乏で食うものがなくなったら俺の肉を食ってもよい。だから子子孫孫どうか本だけは売らないでほしい。腹がへった時は本を煮て食えばおかゆの代りにだってなるのだ。だから売らないでくれ！）執念もこう度を越すと何だか気味が悪い。

「えっ，どうですか。いい本でしょう。これぐらいはもってなくっちゃねえ。」「うーん，でもちょっと値段が……」「いや，またある時で結構。出世払い！」といいように口車に乗せられて，本屋の借金（書債）はたまる一方である。この書債から逃れる方法はないか。これはあらゆる借金に共通することだが，借金から逃れる最も安直な方法は，借金をしつづけることなのである。いまかりに，本屋に五万円借金があるとする。そこでそのうちの一万円だけ払って，別に二万円分の本をかけで買うのである。こうやって本を買い続けている限り，つまり借金を不断に再生産している限り，本屋は決してカコクな取り立てという手段にはでないものだ。逆に，本を買うのをやめてしまうと，時を移さずして恐怖の請求書が送られてくること必定である。

しかし，これでは当然ますます借金はかさむばかり，最後は一体どうなるのだろうか。本は子子孫孫つたえたいだろうが，借金は一代限りにしたいのが人情の常である。幸い今までに僕の知るかぎりでは，死んだ後まで本代を取り立てに行ったという例はないようである。相当の額でも香典代りということであきらめてしまうらしい。本屋さんは，ありがたいことに，高利貸しなどとちがって，心の寛い方々ばかりなのである。（ここの所は，某書店のオヤジに是非読んでもらいたい。）

しかし絶体絶命，一文無しになって，かつどうしても金が要るという時は，他に能もなければ財産もない身の哀しさで，仕方なく本を売ることになる。僕の経験では，売書はどこか売血に似ているのである。と言っても，さすがにまだ血を売ったことはないので，想像するだけであるが。（ただし献血は心理的に売血に通じる所がなくもない。）どこが似ているかというと，まずなんとなく不労所得―なにして紙袋にいっぱい本をつめて行けば，何もしないでかなりの金が手に入る―のような錯覚に陥るが，その実，勿論大損をしているという点である。それから，一度やるとなかなかやめられないという所もよく似ている。馴れてしまうと，最後には，一宵の酔いを買わんが為に，紙袋をさげて古本屋へかようという所まで堕落するのである。売血は身体の破滅におわるが，売書は精神の退廃をもたらすという訳である。

自分が一度手放したのと同じ本を，大枚をはたいてまた買わねばならぬ破目に陥った時のあの口惜しさ，自己嫌悪，あれだけは体験したものでなければ絶体に分るまい。本を売って飲んだ酒の味は，いつも苦かった。

（文学部助教授）

よく働きよく学び

酒　井　明　夫

本塾の職員を対象とする図書館・情報学研修課程に出席して今年度で３年めになります。現在，委託研究生として修士課程に在学中です。職員として働き，また学生として勉強するという，たいへん恵まれた機会を与えられているわけですが，それだけに責任の重さも感じます。この制度によってすでに何人もの先輩諸氏が研修課程を終了し，現場で活躍されています。ちなみに勉強ということばの本来の意味は“無理をして……する”ということのようです。辞書にあるような①学業・仕事に精を出して励むこと，②商人が安い値段で品を売ること，という一見つながりのない２つの意味もその奥では１つになるというわけです。したがってこの研修制度は働きながらなおかつ自分に無理じいして学問を修めるという解釈が成り立つかもしれません。

義塾に勤めて５年めの昭和57年４月，ちょうど三田の新図書館がオープンした時から授業は始まりました。図書館の資料と学部の資料が新館という１つの建物に組み込まれ，組織も新しく統合される中で，日々の業務をどう軌道に乗せていくかという不安と，不勉強な自分がはたして大学院の授業についていけるかという不安とでいっぱいでしたが，それでも職場のスタッフの皆さんの理解と協力に支えられながら，なんとか働く生活と勉強する生活に順応していったのです。情報センターには夜学に通って仕事をしている嘱託の学生がたくさんいますが，考えてみれば彼らの方がもっと条件はきびしいのです。

授業は学部時代とは違って小人数，小教室で行なわれ，また進行も受講者による発表形式をとる場合が多いので緊張します。友達に出席を頼んだり，大勢に紛れて後ろの席でこっくり，などはまったく論外なのです。社会に出て働くようになるとちょっと（ちょっとではすまないことの方が多いのですが）飲んでいこうかという機会も増えてきますので，そんな晩の翌日に授業があれば自己と睡魔との戦いという結果にもなります。

昨年，課程２年めの６月に異動があり，三田から医学情報センターに配属となりました。人文・社会科学系の三田キャンパスと，医学部と病院のある四谷キャンパスはまことに対照的です。雰囲気はもちろんのこと，教員や学生の研究活動や図書館の利用方法の違いをそこに見ることができます。ところで授業の方はといえば，三田まで通わなければなりません。なるべく曜日や時限を集中して履修することになります。４限，５限で終ればそのまま三田，それより早く終る日は申請時間に従ってまた四谷に戻りますが，天候不順の日はつい憂鬱になります。特に昨年暮れから今年の２月にかけて東京地方は実によく雪が降りました。４限から授業のあった或る日，朝からかなりの雪でしたが別に休講の連絡はありません（期待しなかったといえば嘘になりますが，なにぶん先生は高齢でしたので）。雪に弱い首都圏の交通ですが，ニュースではまだ電車は動いているとのこと，とにかく三田に向ったのです。開始時間に少し遅れて到着，教室のドアを開けると先生はすでに他の学生と一緒にいつもの席に座っておられます。来てよかったと思うと同時に心の中では赤面しました（結局その日は大雪の為，早めに打切となりました）。その先生をはじめとして，たいてい外部から招かれている先生は図書館・情報学や延いては慶應を内部からではわからない別の視点からながめておられることが多く，それ故授業はつとめてそうした先生方を選ぶことにしました。

さて，はじめの２年は単位取得に精一杯で論文を書く余裕などはなく，必然的に４月から３年めに入った次第です。今年度は論文を書かなければなりませんが，働きながら勉強していることを考えると，その成果が少しでも仕事やスタッフの皆さんに還元されるものでありたいと思っています。

かつて若き福澤先生は大阪適塾時代に「凡そ勉強と云ふことに就ては実に此上に為やうはないと云ふ程に勉強して居ました」が，自分も現在の課程をふりかえった時によく勉強したなと思えるようになっていればよいのですが。

（医学情報センター資料サービス担当）

『萬國政表』の原書の行方

東田全義
（三田情報センター情報サービス担当課長）

一般に文献の所在調査をするためには，事前に権威ある書誌なり解題書によって，書誌記述を確かめるのが常識である。『萬國政表』の原書については，その凡例に

> オランダ人「プ，ア，デ，ヨング」ノ著セル所ニシテ「スターチスチセ，ターフル，ファン，アルレ，ランデン，デル，アヽルデ」（萬國政表ノ義）ト題セル……

と記されている以外は知られていないようである。というのの，この訳書のおもな解題記事を手近にある蔵書中からとり出してみると，『明治文化全集』第九巻経済編（日本評論社　1929），日本統計研究所編『日本統計発達史』（東京大学出版会　1960），大槻如電原著　佐藤栄七増訂『日本洋学編年史』（錦正社　1965）などによっても，凡例にある記述以上のことは知ることができないのである。偶然にも上記の大槻如電とは，『政表』に序文を書いた磐渓の長男である。これらの解題書中の他の訳書についての解説では，著者名の原綴とか原書名とかが記されているにもかかわらず『萬國政表』については，著者をヨングとしてカナ書きの原書名が書かれているだけである。万延元年（1860）に出版されて以来，原書は行方不明となり，したがって書誌記述もわからないままに120年余が経過したことになる。

この訳書は上記の解題書にもある通り，日本における最初の洋式統計の資料であるばかりでなく，スタチスチクに「政表」という訳語を考案したのは福澤先生ではないかと考えられている，歴史的に記念すべき書なのである。こうした事情について，千葉商科大学の細谷新治教授がエッセイを書くに際して，この原書について調査を試みることになった。この書の内容は1850年代前半のデータを扱っており，翻訳出版が1860年であるから，原書の出版年は1850年代と推定できる。この推定をもとにして，オランダの全国書誌 Brinkman's Catalogus van Boeken（1850～1882）をひいてみることにした。この目録は一連のアルファベティカルの配列のみで，索引などはついていない。主として著者名記入であり，中には書名記入のものも混配されているという普通の書誌である。著者とされている「プ，ア，デ，ヨング」は当然 P. A. de Jong と推定できる。しかし Jong のもとには，それらしき書名が見当らないのである。それではと書名を Statistische…… としてひいてみたがやはり出てこない。その日は落ちつかないままに探索を断念することにした。翌日，ふとあることに気がついた。日常使用しているドイツのカタログ類では，書名記入の配列に英語圏のカタログとは違った特徴をもっていることである。つまり書名記入の場合，文頭の形容詞は後置されて，最初の名詞記入のもとに配列されていることである。この場合，書名「スターチスチセ，ターフル……」を Statistische Tafel…… とするならば，Tafel でひかなければならないのである。このようにして，Tafel のもとに下記の記述が見出せたのである。凡例にあるカナ表記のタイトルと照合するとピッタリ一致するばかりでなく，P. A. de Jong の推定原綴もまちがっていなかったことになる。このオランダ語の書誌記述によって，原書については，凡例に書かれていたこ

と以外に次のような追加訂正情報が得られたことになる。

1. P. A. de Jong は著者名ではなくて出版者名であること。出版者が編者と考えられなくもないが，書名記入となっているのだから，少くとも著者とするのはまちがいであろう。Arnh, は Arnhem であってオランダの都市名。
2. 出版年は1854年であること。
3. 大きさは folio 版であること。
4. 「国名，面積，統治形体，首長等々からなる」というサブタイトルがあること。

念のためにこの書誌データによって，NUCとBL(BM)もひいてみたが，出てこなかった。この調査中に，慶應義塾図書館の先輩達も同じ調査をしたらしい形跡に出会ったのだが，結局発見できなかった理由がわかるような気がする。先輩達がこの調査をしたと思われる頃には，まだ Brinkman の書誌は慶應義塾図書館に架蔵されていなかったのである。近々七年前に，たまたま古書店の倉庫の中を見せてもらう機会があった。その時片隅に埃をかぶってこの Brinkman があった。これは業務用であって売り物ではないと古書店はいったが，強いて譲り受けたものである。私としては，いずれ蘭学資料の原典調査に役立つとひそかに期していたものである。まさにそれが現実となってみると，それぞれの書誌がもっているそれぞれの役割というものをあらためて認識する思いである。

次にこの原書の所在調査である。訳書に書かれた原書の書誌記述は，カナ書きとはいえ書名は正確に知られていたのであるから，日本のどこかの図書館に所蔵されているとすれば，調査をした先輩達の目に触れずにすむはずがない。再度私が目録類を調べるまでもないように思う。それよりも『萬國政表』の成立事情を調べる方が得策かも知れない。この翻訳を手掛けたのは福澤先生であり，半分ぐらいは訳していたようである。それがいつ頃であるか確かなことは解らない。先生が蘭学から英学に切り換えたのが安政六年(1859)，英語を独習すべく奥平藩に願して英蘭蘭英対訳辞書を購入してもらったのが，その年の11月であるから，この時にこの原書も同時に購入してもらったのではなかろうか。そしてすぐに翻訳にとりかかったものと思われる。ところが間もなく例の遣米使節に随行することになった。咸臨丸の出帆は翌年万延元年(1860)一月であるから，この翻訳を岡本節蔵(古川正雄)に託すことになった。彼は福澤先生と共に適塾で蘭学を学び，安政五年(1858)先生が江戸で開塾するのに従った塾生の第一号といわれ，また初代塾長とも伝えられる人物である。結局，岡本が翻訳を完成したのだが，五月に帰国した福澤先生の点閲を受けているのであるから，原書は先生の手元にあったはずである。それならば慶應義塾図書館にそれがあって然るべきと思われるのだが，無いのは何故だろうか。福澤先生が使用された本で，今は無い多くの本と同じ運命をたどったのであろうか。『萬國政表』の出版願が提出されたのが九月，この頃に原書が岡本に譲られていたと仮定したらどうだろうか。福澤先生はすでに英学に志されていたのであるから蘭書は不用になったとも考えられるのである。岡本は後に函館戦争に参加している。それはかなりの決意のもとになされたと想像できる。オランダ式築城法による五稜郭へこの folio 版の蘭書を持ちこんだと考えられなくもない。そして戦火で焼失したと考えるのはあまりに小説的すぎるだろうか。

今，日蘭学会が現存している蘭書の調査を進めているようである。その調査結果に，この原書の発見を期待したいものである。

原書の書誌証述

Tafel (Statistische) van alle landen der aarde, bevatt. de namen der landen, vlakte-inhoud in geogr. □ mijlen, regeringsvorm, opperhoofd van den staat, enz. enz. Arnh., P. A. de Jong. 1854. folio in cart. f 1.30; op linn. met rollen. f 3.—.

慶應義塾大学図書館・情報学への国内留学

岡　田　　隆
（松山商科大学図書館）

初めて慶應義塾大学への内地留学を聞かされた時，思わず「はあ？」と答えたのを今でも良く覚えている。その時の私はまだ母校へ就職したばかりのホヤホヤの社会人。いきなり図書館へと配属されまだ半年足らず。与えられた洋書目録作成業務にようやく慣れ始めてきた頃で，慣れるに従って，自己の仕事を極めて事務的に――つまり書誌事項等を一定の規則に則って，タイプして目録カードに単に写しとること――位に受けとめる様になってきつつあった頃であった。なぜ目録を作成する必要があるのかといった根本的な疑問さえもなく，ただ単に機械的にルーティーンとして同じ作業ばかりを繰り返し，規則がわからなければ人に尋ね，また自分の周囲の方々の担当している個々の作業の役割や意義，或いは図書館全体の作業の流れといったことすら考えず，自己の仕事を勝手に発展性のない様に解釈し，図書館での仕事はこんなものだと割り切っていた。その様な姿勢からすれば，「図書館員」というよりもむしろ「図書館にいる事務員」と言った方が適確であった。

とにもかくにも，図書館学に関する知識を殆ど持ち合わせず，勤務年数も一年という私が，社会人としての２年目を慶應義塾大学でお世話になることと相成った。

さて，慶應義塾大学では，昭和58年４月から同59年２月までの約一年間，三田情報センター作成の研修プログラムにより，週の前半を文学部，図書館・情報学科（以下ＳＬＩＳ）の開講科目中６科目を委託学生として受講し，週の後半は，三田情報センターの整理課及び閲覧課で，それぞれ主として目録作成業務，貸出・返却業務に携わった。

蔵書冊数約30万冊，利用対象者数約5,000名，図書館スタッフ計18名という中規模の大学図書館に属する母校の図書館しか知らない私にとって，三田情報センターはその外観，及びその内部で展開されている業務の規模，形態，そして利用状況何れをとっても驚愕に値するものばかりであった。初めて三田キャンパスへ足を踏み入れた時には先ず地上７階地下５階という新図書館の偉容に驚かされ，中へはいれば，全面開架が採用された70万点の資料群，80名のスタッフ，一日当たり3,000人を下回ることのない入館者数等々，余りのスケールの大きさに，当初は見るもの聞くもの，カルチャーショックの連続だった。

前述の様に慶應義塾大学では，ある時は「学生」として，またある時は「図書館員」と２つの立場で研修を行った訳だが，以下，講義を通して，或いは実際に図書館で働きながら感じたこと，得たものを述べてゆきたい。

ＳＬＩＳのカリキュラムは，従来の図書館学系の科目と情報システム系の科目の２つに大別することが出来る。私には主に後者を中心とした履修プログラムが用意されていた。「図書館・情報学」というあまり聞き慣れない専門分野を学ぶにあたって，留学前はその学問領域，対象範囲の理解不足から，また特に図書館学と情報学がどの様に絡み合っているのか，また全く別の学問であるのかといった点が把握できていなかったため他の部署の方から図書館・情報学とはどういう学問なのかと尋ねられても上手に説明できずにいた。しかしながらこの一年間で，様々な情報に関する問題を

扱うのが情報学であり，情報を組織的に扱う機関の一つである図書館に関して研究を行う図書館学がその一部を構成しているのだと，自分なりの解釈が出来る様になった。

講義を通じ，資料組織を始め，図書館の基本原理，各種情報シンテムの種類・機能・役割，現在及び今後望まれる図書館員のあり方，更には図書館建築，図書館の人事組織に至るまで，数えきれぬ程多くの事柄を学んだ。中でも特に興味を引かれたのは，研究者の研究活動過程である。研究者が一つの研究を完成するにあたって，雑誌論文や図書，その他の二次資料等のいわゆるフォーマルな情報源から情報を入手し，それらを分析・整理・総合して研究を進めてゆく段階に達する前に，インフォーマルな情報源からの情報収集という過程が存在するという事である。この過程で研究者は，研究者同志の会話や私信といったものから，学会・会議などいわゆる「見えざる大学」において個人的な接触を行い，自己の行おうとする研究に関する助言・示唆・批評を得，それが研究の方向を決定し，研究結果のおよその輪郭を形成する。そして研究の成果を論文にまとめ，学術雑誌に投稿した後も，レフリーによる審査が待ち受けており，研究成果が一定の水準に達していなければ掲載を拒否されてしまい，この審査をパスして初めて，研究者とその論文は専門的承認を受けることになるわけである。この様に研究者としての教員が，学外的にも一定の立場を持ち，環境があることを知ることが出来たのは，事務職，教育職という２つの役割の異なる者同士が共存する大学組織にあって，教員の立場を一層深く理解する上で，大いに役立った。

ＳＬＩＳについて特筆すべきことは，教員24名中に現職の図書館員が含まれている，つまり，図書館員が日常業務を遂行する傍ら，学生（更には大学院生に）対して講義を行っているということである。図書館員が現場に就いてからもルーティーンだけに追われるのではなく，更に専門分野の研究を続け，それを教授できるだけの実力を兼ね備え，かつそれを実践しているという事実を知った時，図書館員としての一年目，仕事が引けてからの時間を無意味に過ごしていた私にとって実にショッキングであった。図書館員としてのあるべき姿をまざまざと見せつけられ，大いに反省しなければならなかった。

その他にも，スタッフが図書館・情報学に関する英語の雑誌論文の和文抄訳をし，それを回覧したり，スタッフによる論文発表・研究発表が盛んなこと等々，スタッフの研究に対する姿勢には敬服させられるばかりであった。

この様に，スタッフによる研究活動が盛んに行なわれ，技能を更に向上させてゆくことが出来る背景には，スタッフが研究を遂行する上で非常に恵まれた環境に置かれているということの他に，大学当局が職員の養成に対して理解を示し，積極的に力を注いでいるということを挙げなくてはならない。急速に普及しつつある事務処理の機械化に関しても，大学側がその必要性，意義及びそれに係わる人材養成に対して十分な理解を示し，毎年度初めに新入男子職員を対象に２ケ月にわたるCOBOL研修を逸速く制度化している。幸いな事にこの研修に参加でき，今まで殆ど未知のものであったコンピュータについて，その基礎知識から，フローチャート作成，基本的なプログラムの作成法といったものを修得することが出来た。この他にも，図書館スタッフのＳＬＩＳの授業の聴講制度，大学院修士課程への入学制度，海外研修等があって，自己研摩の場が数多く用意されていることに羨望の意を禁じることができない。その反面，一般には，大学側の職員養成に対する姿勢が十分ではないことを痛感せざるをえない。

以上，一年間の留学を通じ経験したこと，感じたことを述べたが，今この一年間を振り返って見るに，この機会に吸収できるものは貪欲に吸収してやろうと，興味の対象をあれこれと広げすぎてしまったために，結果として１つの対象に的を絞ることが出来なかったこと，また，母校での勤務経験が浅く，母校の図書館の現状，或いは問題点

を十分に把握することが出来ぬままの状態で研修に臨んだために，帰任後，新たにあれもやっておけば良かったとか，あれも聞いておけば良かったといった点が数多くあり，後悔することしきりである。しかしながらこの一年間の体験が，自分自身が単なる「図書館にいる事務員」から「図書館員」へと脱皮する契機となったと確信できたことは幸いであった。

ILL (Interlibrary Loan)

(1) 三田情報センターのILL

―海外との相互貸借を中心として―

樋口恵子
（三田情報センター情報サービス担当係主任）

IFLA の International lending: principles and guidelines for procedure (revised 1983) は，次の様に始まっている。"個々の蔵書の相互利用は図書館による国際協力の必要な要素である。どんな図書館も一つの図書館自体で完全に利用者のあらゆる情報要求を満たす事は不可能であるのと同様に，どんな国もその国の蔵書だけで全ての情報要求に応えることは出来ない……。"

三田情報センターでは，自館に所蔵しない資料に対する利用者の要求を満たす為，海外・国内を問わず広く学外の図書館に依頼し複写を取り寄せるサービスを行う一方，学外の図書館や一般の方からの利用の要求に応えるインターライブラリーローンサービス（以下ＩＬＬと略す）を行っている。ＩＬＬには，現物の資料の貸借及び複写を以て現物貸借の代用とする二つの方法があるが，三田情報センターでは前者を行っていない為，複写の依頼及び提供がＩＬＬの中心である。昭和58年度のＩＬＬの実施状況は表１の通りであった。こちらから学外機関への依頼は大学院生からの申し込みが最も多い（表２）。この他に紹介状を持参して直接来館された学外利用者602人，こちらから学外機関へ紹介状を持参して直接利用させていただいた利用者671人であった。やや依頼を受ける方が多いが，活発に学外機関をこちらも利用している点に特色がある。

表１　昭和58年度相互貸借の状況

依頼をうけた(貸)(件)			依頼した(借)(件)			合計(件)
国内	国外	計	国内	国外	計	
1835	14	1849	719	368	1087	2936

表２　学外機関への依頼状況について（利用者別）

	国内	国外	合計
教員	258	157	415
大学院学生	385	211	596
学部生	76	0	76
計	719	368	1087

ＩＬＬに対する需要は伸びる傾向にあり，今後学術情報システムが全国的に利用される様になれば，さらに需要は増大すると思われる。しかし現状ではＩＬＬには様々な問題点があり，現在の方法で需要の増加に応じていくには不安がある。ここでは最近特に需要の多い海外とのＩＬＬについて取り上げ，昨年度のＩＬＬの結果について報告しＩＬＬの問題点について考えて見ようと思う。

<海外からの申し込み（貸）について>

昨年海外から受けたＩＬＬの申し込みは，韓国，

シンガポール，オーストラリア，東独，米国等から14件。主に日本語文献で当大学で発行した資料に対する依頼であり，複写枚数の少ないものは無料で提供した。複写枚数の多いものは，複写料金，送料，それに先方からの送金を現金化する際に必要となる銀行手数料を合わせて請求書を作成し，複写物とともに送付しているが，支払が遅い事が多い点に問題がある。海外からのＩＬＬの申し込みについては国立国会図書館が日本の National Center としてサービスを行っているので，該当資料が無い場合は国会図書館へ回送して処理をお願いしている。

<海外に対する依頼（借）について>

昭和58年度に海外機関に依頼した件数は381件（但し58年度中に依頼し，入手出来なかったもので59年度に依頼し直したものを含む）。依頼機関は12ケ国80機関に渡った。依頼先を国別に見ると，米国が最も多く44.8%を占め，次に西独18.1%，英国12.9%，東独8.1%，仏6.6%，アイルランド6.3%，シンガポール0.8%，イタリア，スイス，カナダ各0.5%，中国，オーストラリア，スウェーデン各0.3%となっている。依頼機関別では Bayerische Staatsbibliothek が最も多く，2位が Britsh Library Lending Division，3位が Stadt-und Bezirksbibliothek Magdeburg，4位が University of California，5位が Trinity College of Dublin となっている。

これらの依頼の昭和59年6月30日現在の入手状況は表3の通りである。『処理中』は著作権者の許可待ちや前払済で複写物の到着待ちをしているものである。『キャンセル』は利用者が直接先方の図書館へ行く事になった為，こちらの手続きを中止したものである。原則的にはすでに依頼したＩＬＬの利用者の事情によるキャンセルは出来ない。複写等で入手出来たものは72.4%であり，謝絶回答のあったものは利用者に連絡した上でさらに他の機関へ依頼し直しているので，実際に利用者当たりの入手率はもっと高くなると思われる。ＩＬＬの依頼は利用者から申し込みを受けた後，書誌事項を確認するための調査をスタッフの手で入念に行い，更に各国の総合目録等で所蔵機関を確認した上で依頼様式に記入し発送する。このため事前調査に必要な各国の総合目録・書誌・文献目録等の収集に力を入れており，大体は確認可能だが，どんなに調べても書誌事項や所在確認出来ない資料が有り，こうしたものが謝絶回答又は未回答となる事が多い。

表3 〔入手状況〕

入手済み	276件	72.4%
謝絶	85	22.3%
処理中	7	1.8%
キャンセル	4	1.1%
未回答	9	2.4%
合計	381件	100.0%

入手出来たものについて入手形態を見るとハードコピーが366件，マイクロフィルムが8件，現物貸し出しが7件であった。資料形態をみると，雑誌論文が圧倒的に多く74.3%，図書13.1%学位論文9.4%，オリジナル・ドキュメント3.2%となっている。

入手に要した日数は平均58日。謝絶回答について平均日数を調べると75日であり，調査に時間がかかっている事がうかがえる。表4に国別の平均日数を示す。所要日数は依頼書を発送した日から回答又は複写の到着した日までを算出したもので，実際にはこの他に事前調査や利用者への連絡等に数日余分にかかる。

表4 平均入手所要日数

国名	平均所要日数	国名	平均所要日数
英国	32	西独	72
カナダ	34	フランス	75
スウェーデン	35	アイルランド	92
米国	43	東独	110
オーストリア	48		
総平均所要日数			58

先方から請求された費用は一件当たり平均2684円。無料で送付されたものが多かった為平均としては安くなっている。但しこの他に，通常利用者は海外送金の際の銀行手数料2500円と通信手数料500円を負担しなくてはならない。

<海外ＩＬＬの問題点と今後の課題>

海外ＩＬＬにおける最大の問題点は，国内ＩＬＬとも共通であるが，図書について国内の所在確認のための総合目録が不十分である事である。多少『新収洋書総合目録』によって確認出来るが，あとは電話や郵便で所蔵の有りそうな図書館へ問い合わせなければならない。IFLA の Guideline によると海外機関に依頼する前に国内に無い事を確認する必要があるが，現在は完全に確認する事は不可能である。学術情報システムに国立大学のみならず全国の学術図書館が参加して，国内の所蔵確認及びＩＬＬに利用出来る様になる事を望むものである。

海外ＩＬＬでは，最近気軽に現物貸し出しをしてくれる機関が増えている。現物貸し出しは現物の往復の送料が単に複写物を送ってもらう場合より高くつく事が多いが，著作権保護期間中の出版物を利用したい時は便利である。これまで三田情報センターでは学外への現物貸し出しを行っていないが，国内・海外ＩＬＬの結果や塾内利用者の貸出状況など十分調査した上で，現物貸借に対する方針を検討し直した方が良いのではないかと考えている。

海外ＩＬＬは研究者向けのサービスとしてこれまで対象を大学院学生・教職員に限っていたが，最近学部生からの要求も増え，特に海外から入手する必要がある場合には指導教授と相談の上，教員名で申し込みを受けるケースも増えており58年度は14件取り扱った。海外ＩＬＬは国内に比べて日数もかかるので，サービス対象を学部生にまで広げる事には問題が多い。

事務的な面から見ると海外ＩＬＬは進行状況に関する照会が多い事，支払指示が多様である事，こちらで申し込みした機関ではない所から回答が返ってくる事が有る事などから申し込み番号順，申し込み者名順，申し込み機関名順のファイルを作成しているが，申し込み件数が増えると手作業では煩雑すぎて維持が難しくなる。また入手日数や費用などについての情報も現在の処理方法ではうまくつかめないので，ＩＬＬ処理を国内・海外ともに機械化する必要を感じている。また送金事務を合理化する為に，依頼の多い機関へ預託金を預ける等の方法が利用出来ないか調べる必要があると考えている。

先日ＢＬＬＤから送られてきたパンフレットは欧州地域外の海外諸国に対してもテレファクシミリサービスを開始する事を知らせるものだった。最近欧米の図書館では海外ＩＬＬにテレックス，テレファクシミリ，オンラインリクエスト等を導入する所が増えており，こうしたニューメディアの導入も検討する価値があると考えている。

(2) 医学情報センターにおける Interlbrary Loan

── 現状と課題 ──

松井　朗
（医学情報センター情報サービス担当）

日本医学図書館協会（JMLA）の Interlibrary Loan（ＩＬＬ）は，1927年の協会創立以来，半世紀以上にわたる歴史と実績をもっている。[1] そのシステムは，申込書の形式，Bibliographic Ver-

ification の手段，受付・料金請求・謝絶等，諸手続きの詳細な基準を具体的に定めた「相互貸借マニュアル」[2] に結集されており，相互協力の在り方のひとつのモデルとして評価されてきた。

医学情報センターは，ＪＭＬＡ内にあって常に文献情報提供の中心的役割を果たして来たと言える。各館の蔵書の充実や，1977年の自然科学系外国雑誌拠点図書館の設置等によってＪＭＬＡ加盟館からの申込は減少傾向にあるが，オンライン文献検索の普及，Medical Electronics 化の進展に伴なうと見られる病院図書室，理工学系図書館からのそれは増加の一途を辿っている。1983年を例にとると，加盟館から6,653件，非加盟館から2,006件（うち国外184件）の申込があり，学外者による複写申込を加えると，総数は91,365件に達した。この処理にはＩＬＬ係２名（１名は他係を兼務），複写係５名があたっており，センター内の業務に占める比重はきわめて大きい。

他方，当センターから学外に対する依頼は1981年度2,646件，1981年度2,960件，1982年度2,525件とここ数年ほぼ横這い状態にある。そのほとんどはコピーの取寄せであり，申込先としては JMLA 加盟館が約90％を占め，前述の拠点図書館の充実に伴なって外国機関への依頼は漸減している。

業務の膨大さもさることながら，生命科学は情報提供の迅速性が特に求められる分野とされている。この要求に応えるため，当センターは1968年から Telex による申込を開始した。下表は，当センターからの学外申込の平均所要日数であるが，Telex 利用の効果は一見して明らかであろう。1984年現在，ＪＭＬＡ内の Telex 設置館は32を数えている。

申込先	JMLA加盟館		JMLA外	国外		
	Telex	郵送		NLM	BLLD	その他
所要日数	3.2	6.5	10.9	21.7	13.6	21.9

文献到着までの平均所要日数（1983年，概数）

また，国外からの取寄せをスピードアップするため，1982年からはオンラインによる申込（DIALOG 社の Dialorder サービス）も行なっている。これにより，ＢＬＬＤからは最短７日間でコピー入手が可能となった。

無論，利用者にとっては，必要な文献が常に手近にあることが最も望ましいであろう。やや古いが，年間６回以上のＩＬＬ申込がある雑誌は購入したほうが経済的だ，との興味深い報告もあると言う。[3] 当センターでは1982年４月から1983年８月の間に処理した約3,500件について集計した結果，申込回数の上位10タイトルの新規受入を決定した。

今後も利用者の要求を蔵書構成に反映させるために，このような調査を継続していく予定であるが，同時に情報提供の一層の迅速化を目ざして，新たな手段を講じていかなければならない。

ＪＭＬＡでは，1973年からファクシミリ導入の検討に着手し，1978年には機種のテストとＩＬＬ業務に及ぼす影響についての実験を行なった。[4] しかし，塾内における今迄の実績からみて，ファクシミリには機器の性能（速度と解像力）や経費，業務の能率などの点になお若干の問題点が残されているように思われる。当面はファクシミリをはじめ情報通信媒体の技術的進歩や，学術情報システムの動向，さらには電子出版の将来などを見極めつつ，積極的活用のタイミングをはかっていくことが望ましいであろう。

参考文献

1) 角田昭夫．“日本医学図書館協会相互貸借業務の現状と課題”．医学図書館．Vol. 28, p. 132-142 (1982)

2) 日本医学図書館協会．相互貸借アニュアル．改訂版．日本医学図書館協会 (1982)

3) Darling, L. ed. Handbook of Medical Library Practice. 4th ed. Vol. 1. Chicago, Medical Library Association, 1982. p. 99.

4) 日本医学図書館協会ファクシミリ導入検討委員会．“日本医学図書館協会ファクシミリ導入検討委員会報告書”．医学図書館．Vol. 25, p. 104-114 (1978)

(3) 理工学情報センターにおける Interlibrary Loan

——文献取寄せ（依頼）の現状と展望——

吉川智江
（理工学情報センター情報サービス担当係主任）

当センターの Interlibrary Loan は，増大かつ多様化する科学技術情報を背景に，昭和41年の開始以来今日まで主要業務の一つとして発展してきた。

複写提供件数は，昭和54年以降年間2万7千件前後を推移している。その約60%弱が日本科学技術情報センター（IICST）からの申込みであり，過去に移管された雑誌を複写対象としたものである。これを含めて大学以外の機関あるいは個人による申込みは全体の約95%を占め，約5%が塾内及び大学からの申込みによるものである。このように当センターは大学はもとより広く一般にも門戸を開き，所蔵資料を閲覧，複写のサービスに供してきたのである。

一方，依頼件数は徐々に増加し昭和58年度で，1,536件を数えている。次頁のグラフはその資料形態別内訳及び依頼先を表わしたものである。国内手配での入手率は93%とここ数年漸増傾向にあるが，これは東京工業大学（外国雑誌センター館），JICST 他関連諸機関の資料が充実しつつあるためとみられる。特に雑誌に対大学での入手率が84%，国内では97%にまで達している。これに比して雑誌以外の資料は，会議録の41%，単行本の60%を除き対大学での入手率は低くJICST，国立国会図書館，学協会，研究所等にかなりの部分を負っている。海外への依存度ではレポートの25%，会議録の18%，依頼先では BLLD，NTIS が目立っている。塾内では，医学情報センターへの依頼が252件と4年間で3倍にも伸びている。研究の学際化が進む中，昭和55年には塾内を結ぶファックスも設置される等，今後は資料の収集協力，調整が重要な課題になるものと思われる。

ところでこうした文献取寄せの状況は，科学技術情報の種類，発生源，流通経路が広範かつ多様であることに因るところも大きい。従って迅速性，入手率等業務の向上を図るためには，国の内外を問わず，情報流通に係わる幅広い知識と経験とをもって様々な方向から活路を見い出すことが必要と考えられる。特にレポート，会議資料は需要が高まっているものの書誌事項，所蔵等を確認する資料は充分とは言えず，一部その対応に苦慮している。現在直接発行機関，主催者等に依頼する率は前者で約20%，後者で約10%に上っている。

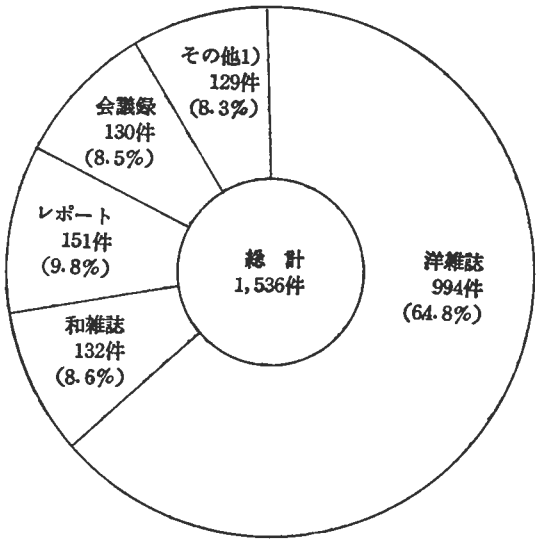
当センターでは，過去の経験を生かすため，文献取寄せに必要な各種の情報を記録した依頼機関別カードファイル，年平均の所要日数・件数・料金・支払い方法からなる同データ表，特殊資料の調査手段・所蔵先を記した資料等を作成，維持している。昭和50年以降の全申込書は資料の形態別にファイルされ，取寄せだけでなく，新規資料の購入選定の際にも参考としている。

他方，オンライン・オーダー等の新しい動きにも注目している。資料提供機関は，図書館，学協会，BLLD 等専門機関，2次資料作成機関，更には書店と拡大し，その幾つかは JOIS，DIALOG 等を通じ当センターからもオンラインによる申込みが可能である。また近年取寄せでは資料の「未着」が増加しているが，先行する利用者の要求と資料とのギャップは，情報伝達技術の発達と共に，フルテキストの伝送，電子出版の実現化等の方向からも次第に埋められている。

国内では，科学技術資料の充実が図られ，流通の整備も見直されようとしている。目録の不備等問題の多かった従来のＩＬＬも，学術情報システムを始めとして改善の手が加えられつつある。今後これらの動きが資源共有の基本理念の下に，より多くの成果を上げることが期待される。と同時に，当センターとしても，資料の提供，利用の両面から，進んで協力，参加の姿勢を示していくことが必要と言える。

昭和58年度　学外文献取寄せ内訳（含現物借出し）

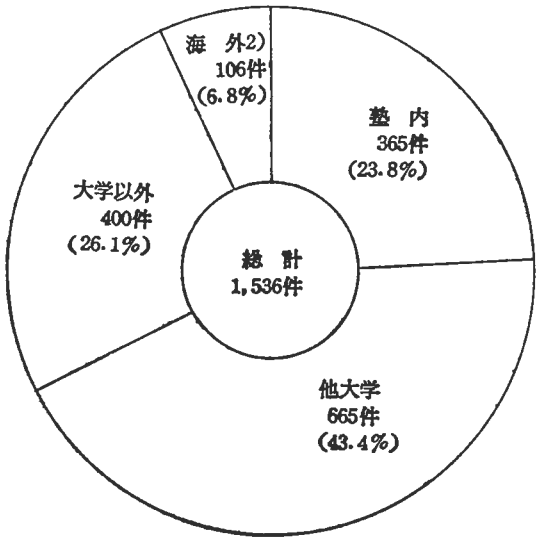
資料形態別



1）その他内訳

特許・規格	53件
単行本	47〃
ペーパー	14〃
学位論文	5〃
パンフレット他	9〃

依頼先別



2）海外内訳

BLLD	47件
NTIS	12〃
大学	5〃
その他	42〃

理工学情報センター雑誌目録

斎　藤　憲一郎
（高校図書室係主任）

はじめに

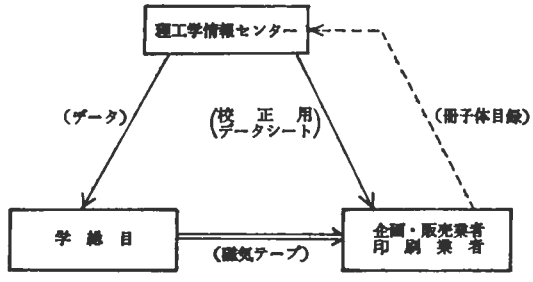
理工学情報センターの1984年版雑誌目録が，電子計算機ファイルを利用して出来上った。雑誌名，刊行頻度，発行団体，出版地，所蔵巻号，出版年等々の1つ1つがコード化されて，電算機ファイルの中に入った。1レコードの中に，それぞれが他と識別されて記載されている。この磁気テープファイルから冊子体の雑誌目録が打ち出されたのである。いわば，機械処理による雑誌目録の作成という1つの新しい時代に入ったとも言える。これを機会にいくつかの実際を記述してみたい。

1.　電算機ファイルと学術雑誌総合目録

この雑誌目録は，欧文編，和文編，露文編から成っていて，それにKWIC索引が付いている。そして，雑誌データの入力にあたっては，それぞれ別々に行った。その中で，欧文編については，「学術雑誌総合目録」（以下学総目とする）自然科学欧文編の電算機ファイルを利用しての作成である。

学総目自然科学欧文編は，1979年版とその補遺版である1982年版があり，そのいずれもが機械可読化されていて，理工学情報センターからもデータを送っている。ここから当センター分のデータを抽出して（磁気テープ），それに新規追加，訂正を加えようというものである。図は，これを示したものである。

和文編と露文編は，これとは別に，データシートに記入して電算機ファイルを作成した。



2.　データの精錬

データを記入するまでに，どれだけの書誌データが確認出来ているか，また，どれだけの所蔵データが確認出来ているかの問題である。

理工学情報センターでは，この雑誌目録記入データを形成する雑誌資料群について，欧文のものは，その典拠を *World List of Scientific Periodicals* に拠っている。最近では，*Chemical Abstracts Service Sources Index* が有効な典拠資料になっている。

和文のものについては，「国立国会図書館所蔵和雑誌目録」や学総目和文編予備版がある。

これらを拠りどころに，それぞれの雑誌資料群を識別してゆくのだけれども，変遷関係以外にも，Bulletin, Proceedings, Reports 等々の記述の仕方は，いつも雑誌担当者を悩ます。国内の出版物につけられた欧文名，特に，紀要の欧文名と国内誌との関係も同様である。国内の刊行物については，さらに精錬さを要求するものがいくつかある。講演予稿集，技術報告，試験所報告等々である。

その他に，研究者間では通称で知られているもの，略称等々，いわば典拠目録と直接結びついていない，1つのステップを入れないとその記述にたどりつけない問題が，雑誌目録の記述の仕方を悩ます。

こうした入力データの確かさへの注意は省けない。

3. データの入力

①欧文編

磁気テープから打ち出された3つの冊子体リストを使用してのデータ入力である。

誌名変遷のないタイトルは，所蔵校正用リストを使い，これにデータの修正，更新をした。誌歴のあるタイトルは，新たにデータシートを起して入力した。また，以前の冊子体雑誌目録（1977年版）を使って，書誌データ，所蔵データをコード化して入力した。新規追加データについては，新たにデータシートを起して入力した。

②和文編，露文編

データシートに記入して入力した。その際に，漢字とキリール文字を機械可読にするために，読みを付けて入力した。キリール文字の翻字は，ＬＣの翻字表に従った。

4. データの入出力におけるいくつかの問題

学総目電算機ファイルは，雑誌名の変遷関係の表示において，2つの記入形態が混在している。このことが，データの入力の仕方に少なからず影響を与えた。最新誌名記入方式と個別誌名記入方式である。

また，理工学分野の資料の多様さが，そのまま理工学情報センターの雑誌資料群の特徴の1つをなしているとすれば，この欧文編については，これらが打ち出された学総目ファイルとどれだけ差がないかが作業を容易にする。いくつかの相違がある。Comptes Rendus は C. R. になっている。Transactions of ASME の各シリーズは，各シリーズ名から出ている。ISA Proceedings の各セクションは，各セクションから出ている。

IEEE Conference Proceedings は，こうした誌名のとり方をしていない。

BHRA の Abstracts は，各セクション名から出ている。Science Abstracts の3つのシリーズも同様である，等々。

それから，こうした学総目ファイルの問題とは別に，電算機処理における大文字処理の問題がある。これらは，たとえば AIP と Aircraft の場合，入力時に AIP にピリオドを付けることによって，Aircraft の前に配列するようにした。

また，and, der, für, in, of, or, the 等々は，配列上無視しているので，ストップワードにした。

次に，欧文編に，日本語の注記を入れる時には，そのままでは入力出来なかったので，一定の記号を使用して入力した。

和文編については，学総目の予備版が2次資料を収録対象外にしていたので，他のツールに頼るしかなかった。

所蔵表示については，〔　〕に示された1部欠号してはいるが，不完全巻で所蔵しているというこの記号の表現は，原則として，所蔵表示，完全改行方式になった。

5. データの出力

欧文，漢字，そして，キリール文字がそれぞれアルファベット順に並んで打ち出された。1つ1つのデータ要素が機械処理されて出て来た。雑誌の記述の仕方，配列の仕方，構成が，データ量とうまくマッチしているだろうか，問われる。

誌名は，個別誌名記入方式である。

欧文編，和文編の相互参照には，漢字に一定の記号を当てて，処理をしている。

露文編では，初めからデータシートに記入して入力したデータを，学総目ファイルに翻字されて入っているデータと照合して，出力している。

活字の大きさ，行間のあき具合は，自在に電算

機が打ち出せる。

これらのデータ量は，欧文，和文，露文それぞれ，約6,200，3,400，400項目である。

6. 電算機ファイルと今後—おわりにかえて

今や，雑誌データが機械可読形態で電算機ファイルの中に入った。理工学情報センターの磁気テープファイルが出来た。磁気テープを回わすことによって，随時データを打ち出せることになった。ファイルは，データの追加，修正を容易に受け付ける。処理は速い。ますますデータの中身が，書誌記述といい，所蔵表示といい，確かなデータであることを要求される。このデータの確かさへの注意は，つとに弁えておかなくてはならないだろう。

また，一方で，電算機ファイルにおける雑誌目録記述データの確かさへの傾向は，着実な歩みをみせている。同じ個別誌名記入方式の中での，ちょっとした誌名のとり方の相違は，自らのファイルを持った時にすでに始まっている。

学総目のファイル，British Library の *Keyword Index to Serials Titles* のファイルも，それぞれデータ記述の充実の方向に進んでいる。

データの精錬さへの注意とともに，これらをみる少しの余裕を持ちたいものだ。

それにしても，学総目電算機ファイル利用の承認を得ることから始まったこの作業も，冊子体目録の刊行をもって終った。磁気テープが作成された。冊子体目録の版下とも考えられる。また，何らかの打ち出し形式を考えて，適宜使用できるかもしれない。

なお，筆者は，1984年5月まで理工学情報センターに在籍，その間，資料サービス（雑誌）を担当していた。以降の考察に理工学情報センターの人たちの恒なる協力，記して感謝したい。

図書館・情報学科出版物（勁草書房刊）

① 図書館・情報学概論　津田良成編　昭和58年5月　239p　¥2,600

② 図書館・情報学シリーズ（刊行予定）

第1巻　情報の発生と伝達　上田修一・倉田敬子　昭和60年9月

第2巻　情報の要求と利用　田村俊作　昭和60年4月

第3巻　情報ネットワーク　細野公男　昭和61年4月

第4巻　情報センターの管理と運営　高山正也　昭和61年4月

第5巻　図書館・情報学の調査研究法　緑川信之　昭和60年9月

第6巻　情報システムの設計　糸賀雅児・西荒井学　昭和62年4月

第7巻　大学図書館の運営　高鳥正夫　昭和60年4月

第8巻　理工学文献の特色と利用法　上田修一他　昭和62年4月

第9巻　資料組織法の展開　渋川雅俊　昭和60年9月

③ 翻訳シリーズ（刊行予定）

ビジネス・スクールと経商資料室

川　上　清　子

日吉の離島，大学院経営管理研究科図書室に３年間勤務しました。“ビジネス・スクール”の名称の方が通り易いかもしれません。大学キャンパスとは反対側の商店街のはずれにあり，赤レンガに蔦や芝生の良く映えるきれいな図書室です。ビジネス・スクールは以前からありましたが1978年に２年生修士課程の大学院になり，経営管理者育成と経営管理分野の研究推進を目的とした経営大学院になりました。学生（ここでは院生とは言いません）は企業派遣が中心で，学部新卒と転職を目的として勉強仕直している人達が次いでいます。１学年70名位で２年間を５学期に分け１年目は３学期，２年目が４・５学期で主に修論作成に充てています。三田の経済学研究科や商学研究科とは目的を異にしているので教育方法も自ずと違って来ます。単なる講義でなく，ケース・メソッドと言って自分が経営者になったつもりで現実に企業が直面している事態を分析し，具体的に策を考え，その案を実施した場合の諸問題をも含めて評価し，実行に要する判断力を養成します。ビジネス移にった当初，ここを知るのは授業に出るのが一番と思い２人の先生の授業を聴講させて戴きました。あまり専門的でない科目を選んで戴いたのでなかなか面白く解り易い授業でした。

ビジネス・スクールに移る前は経商資料室（総合資料室の前半身）におりました。２人で担当していましたがやはり大組織の一員です。ビジネス・スクールは教員25人職員10人の小世帯で，図書室は２名，初めての専任でした。規模が違えば中身も仕事の仕方も違って来ます。経商資料室は経済学部と商学部の雑誌・資料部門で図書は学部図書として別になっていますが，ビジネスの図書室は単行書約18,300冊，雑誌約460タイトルを所蔵し，各種企業・産業情報を主にしてビジネス関係の資料を集めています。予算は経商資料室の３分の１位です。コレクションで一番異なる点は企業情報の収集と言う点でしょう。三田では先ず購入しない様な種類の本が入っています。露骨に企業暴露した内容のものは避けますが，目を引くタイトルがかなりあり“読んでみようか”と手が伸びてしまいます。学生も，大学を出て何年も図書館を使っての，いわゆる“勉強”から遠ざかっていた人達が多いので読み易い本を好む様です。更に，内外の企業の Annual Report を積極的に集めています。これを見ると企業の営業状態がほぼ掴めます。日本企業の株主向け営業報告書はあまり見映えのしないものが多いのですが，海外向け英文のものは宣伝も兼ねているので特にファッション関係の企業のものなどきれいで眺めていて楽しくなります。海外のものは米国が殆んどで約300社，1970年代からあります。三田でも需要はかなりありますが必要とする年代が多少違う様です。大学院の性格上，一般に古い年代より新しい資料がより必要です。特に昨今の技術革新や先端技術の開発による業界の動きには常に注目していなければなりません。私達図書館員も日々の動きに敏感にならざるを得ません。

レファレンスはそれ程多くありませんがかなり専門的な質問をされることがあります。主として統計に関する質問が多い様です。例えば，“カセットテープのマーケットシェアを知りたい”との質問がありました。日本マーケットシェア事典を見ると，レコーダーのシェアはありますがテープのシェアは出ていません。こちらも知識が足りず遂に解りませんでした。

今，又，三田の雑誌室に参りました。ここは前２つとは違い抱括的であり人文系の資料もあります。慶應の人文・社会科学関係の雑誌・資料を一亘り見渡せることになり，何か掴めればと思います。

最後に，この特色あるコレクションを持ったビジネスの図書室が経商資料室と類似しない様，より充実した専門図書館として発展されることを祈ります。

（三田情報センター資料課係主任）

米国の大学図書館

カリフォルニア大学バークレー校の図書館活動を中心にして

高山正也
（文学部助教授）

I　はじめに

一口に米国の大学図書館と言っても，その数，種類，規模，等どの側面をとっても多種・多様で奥行きが深い。その一端を示せば第1表，第2表に示すような，日本の大学図書館との格差が見られる。このような巨大な対象について，限られた紙数の中で概観することは困難である。また今日では日本の大学図書館員の保有する米国大学図書館についての情報量は飛躍的に増大していると思われる。そこで我々に必要なことは米国の大学図書館の表面的な理解から一歩を踏み込み，よりきめ細かな活動の実態とその背景及び問題点等の理解・把握が必要であり，そこから見習うべきは見習い，教訓とすべきは教訓としつつ，欠点についてはその轍を踏まぬ心がけであろう。

そこで，本稿では，ハーバード大学やイエール大学と並び米国でも屈指の，そして西海岸最大のカリフォルニア大学バークレー校の図書館活動の一端を紹介することにより，読者の米国大学図書館理解の一助となるはずの諸事実を紹介したい。

II　カリフォルニア大学の図書館

カリフォルニア大学（以下U.C.と言う）は1868年にバークレーの隣のオークランドに開設され，1873年までに現在地のバークレーに移転した。その後，大学は発展を続け，現在州内に9キャンパスを有し，その大半のキャンパスがそれぞれ，総合大学相当の内容をもつ世界最大の大学にまで発展した。

これら9キャンパスはそれぞれの学長（Chancellor）の下に自主的に運営され，図書館もそれぞれに存在しているが，U.C.として共通の総長（President）と大学評議員会をもつ。評議員会は総長の任免権，予算権をもち，州憲法で認められた範囲内での全ての決定権を有する。

図書館の関係では，総長の許のAdministrationの中のSystemwide Administrationという組織がU.C. Library Systemとしての9キャンパスの図書館を統轄する。

U.C. Library Systemとしての9キャンパスの図書館の規模は第3表に示すとおりである。

またU.C. 9キャンパス並びにU.C. Library Systemとしての活動に要している経費は第4表のとおりである。

III　カリフォルニア大学バークレー校の図書館

カリフォルニア大学発祥の地であるバークレー校（以下U.C.B.と略す）は，1983年現在で30,400人のフルタイム学生（21,400人の学部学生と約9,000人の大学院生），3,400人の教員，約2,000人の研究員及び5,400人のフルタイム職員から構成される。

キャンパスの敷地は1232エーカであるが，主たる施設が178エーカのCentral Campusに集中しているため，9キャンパス中，医科単科大学のU.C. San Franciscoを除くと最も狭く感じられる。

このキャンパスで5,500以上の科目が開講され，学部課程での専攻が約100，教育されている言語は85言語に及ぶ。

このU.C.B.の図書館は約600万冊の図書，約4,200万点のマニュスクリプト，約30万枚の地図，

約10万種の逐次刊行物を有し，約600人の職員がGeneral Library としての本館と23の分館，及び11の Non-General libraries を通じて，これらの研究教育活動に奉仕している。（第5表，第1図を参照のこと）

Ⅳ バークレー図書館の管理体制

A．バークレー図書館の特徴

バークレーの図書館の管理の特徴は次の三点に集約できよう。

① U.C.の9キャンパスの一つとしてのU.C.B.図書館は，U.C.の9キャンパス図書館システムのために作られた10ヶ年にわたる長期経営計画に基づいて運営されている。

② U.C.B.図書館は本館の他に23の分館と11のその他図書館から成る図書館システムを構成する。

③ 業務体制としては本館のテクニカル・サービス部門がU.C.B.図書館システム全体（東アジア図書館分を除く）の収集から整理までを一括処理するが，対利用者サービスと蔵書の保管は各主題別の学部・研究施設内の分館や総合図書館に属さないその他の図書館（部局図書館）で行われる。いわば集中管理，分散保管・サービス体制を採用している。

B．組織

組織は概略，総務・管理系統，パブリック・サービス系統，テクニカル・サービスの系統に区分される。その組織図は第2図に示すとおりである。

1. U.C.B.図書館の最高意思決定機構

U.C.B.図書館の最高意思決定機関は館長の諮問評議会（Advisory Council to the University Librarian）である。この評議会は11名のメンバーで構成されるが，そのうち5名は図書館側から選ばれる。即ち図書館側委員は館長，副館長（2名），館長代理，及び館長補佐である。この会議は図書館の方針と計画について討議するが，このために次の六つの常置委員会を設けて，それぞれの専門事項を担当させている。委員会名と委員数はそれぞれ次のとおり。

書誌調整委員会　12名（うち図書館員9名）
閲覧利用委員会　11名（うち図書館員7名）
蔵書構成委員会　12名（うち図書館員9名）
展示委員会　8名（うち図書館員7名）
参考業務委員会　12名（うち図書館員9名）
職員研修委員会　9名（全員が図書館員）

これ以外にも，当面する問題については，随時，臨時委員会が設けられる。

2. 総務・管理系統

館長補佐が統轄し，日本の図書館組織と同様，人事，教育・研修，会計，庶務，営繕及び施設計画等の機能がこの系統に集中する。

特徴は複写サービス，及び Bancroft 図書館がこの系統に属している点である。Bancroft 図書館は大学のアーカイヴとしての，また貴重書や特殊コレクションの Annex としての役割をも有しているため，それ自体で完結した図書館機能を有しながら，総務・管理系統に属している。また複写サービスは複写業務の規模の大きさの故に，機器類の維持・保守業務の繁忙化や代金決済のカード化に伴う事務処理の増大等により，財務・庶務の部門に位置づけられている。

営繕部門はU.C.B.のキャンパス計画の一環として，図書館の施設計画[1]を有しており，先に述べたU.C.図書館システムの長期計画との関連の下で，新本館建設計画を含む図書館狭溢化対策と取り組んでいるが，この計画においても，U.C.B.では分散保管・サービス体側は維持されることになっている。

3. パブリック・サービス系統

前述のようにU.C.B.は分館及び部局図書館でのサービスを重視しており，このためサービスポイントとしての各分館が組織構成単位となっている。本館については，参考部門と蔵書構成部門を特に重視し，これらを一体化して Assistant University Librarian の担当としている。また閲覧と並んで相互協力が独立した部門となっており，この相互協力部門の活動の多様さは日本に類をみない。学部課程図書館と東アジア図書館の他は，人文・社会科学，生物科学，物理科学と主題別に分館をカテゴライズしている。これら本館・分館のキャンパス内の位置関係は第1図に示すと

おりである。

4. テクニカル・サービス系統

特徴は Conservation Department と Government Document Department がある点であろう。しかしこの二部門を有するのは大規模米国大学図書館ではそう目新しいことではない。

Systems Office についての詳細は後述するが，いわゆる図書館機械化業務が全てここに集中されているのではなく，既に日常業務の中に定着している業務はそれぞれの担当部署で行われており，純粋に開発的な業務や User Service が主となっている。また U.C. の Information Services Office との分業もあり比較的小規模である。

C．人事

現行の職員数は約600名であるが，ＦＴＥ（フルタイムの常勤者換算）で，1982年７月現在では522.45人となっている。その内訳は専門職154.42人，一般職員281.26人，補助者86.77人となっている。

1988年までの人事の基本方針は次のとおり。

① 収書量の増大には機械化システムの利用で対応し，1988年までは職員総数の増大は行わない。

② パブリック・サービス部門の職員定数は利用者の増加に応じて増大をはかる。

③ パブリック・サービス部門の増員はテクニカル・サービス部門の定員削減によってまかない，利用の増大に機敏に対応できるよう，図書館の各部門間での定員数の見直しと流動性を確保する。

④ 各部門における合理的な職員数を確定するための基準となる人員配分式を設定する研究を行う。

⑤ 職員の未経験部門への配置転換の増大に伴ない，実証的でかつ創造的な再研修プログラムを新たに作ると共に，職員の研修プログラム全体を強化する。

仕事の種類と職員の配置については，図書館のライン職務として，収書―資料整理系統に資料類の選定，購入，収書手配，受入記録，収書のための書誌データ調査，目録・分類，製本，装備等がある。同じくライン部門の参考―閲覧業務の系統に閲覧，資料提供，図書館利用指導，書誌情報調査，参考質問への回答，研究活動の支援（対教員並びに院生），各種情報サービスの提供等が含まれている。

これらの業務を担当する職員の処遇は幹部図書館員（専門職）と一般図書館員（専門職）および一般職員（非専門職）に分かれており，詳細は第６表，第７表に示すとおりである。

バークレーの図書館員（専門職）は Academic Personnel としての地位を得ている[8]。これは教員（Faculty）と一般事務職員（Clerical Staff）の中間に位置づけられる。

第６表にみられるように幹部図書館員の処遇には一種の年功的要素も加味されており，順調にゆくと，Assistant Librarian から Associate Librarian に４年で，Associate Librarian から Librarian に８年で昇格することができる。第５表の一般図書館員の給与表は，本来は非専門職を対象としたものであったかもしれないが，若い（経験の少ない）図書館学校卒業者（専門職）が Library Assistant として採用されているケースも多い。

D．計画

U.C. は９キャンパスの図書館を統合した Library System として，その整合的な運営のために，10ケ年にわたる長期経営計画[2] を保有している。

この長期計画は1978年から1988年に至るもので，1978年に U.C. の総長直轄の Systemwide Administration にある大学図書館計画担当理事の許で立案・設定された。現在U.C.B.をはじめとする９キャンパスの図書館は，原則的にこの計画に基づいて運営されている。計画内容の概略は次のとおりである。

1. 計画の概要

a．計画の背景と状況の認識

1960年代の U.C. は1960年につくられた州政府の高等教育計画に基き，その責任を遂行するために，急速に規模の拡大をとげた。U.C. の図書館もまた，この時期に，学生数，教員数及び研究・

教育プログラムの拡大に見合うべく，急速に大規模化した。

しかし，1970年代に入ると，大学も図書館も急激な状況の変化に見舞われ，計画の変更を余儀なくされた。入学者の伸びが止まり，州政府，特に州の財政当局は図書館の費用対効果に関心をもちはじめた。1971年にカリフォルニア州財務部(Department of Finance)は各キャンパス間の相互依存，協力，協調をもとに，経費の削減とサービスの改善を図書館に迫まった。各キャンパスではこれに応じて幾つかの措置がとられ，それらは実効をあげている。

しかし，まだ多くの問題が残っている。研究と教育のための図書資料を調達する予算は不充分であり，利用者は求める資料を蔵書の中から探し出すのに困難を感じており，利用者数と蔵書数のどちらからみても図書館スペースは狭溢化しており，その上，図書館の運営経費は上昇を続けている。

これらの問題の多くは，伝統的な図書館の考え方，特に各大学図書館が必要文献を自給自足しようとしたり，各図書館が独立した蔵書をつくり上げようとする考え方に固執した結果生じたものである。これら問題の解決には新しい考え方が必要となる。すなわち，利用者の要求の多様化に対応し，効用の観点から蔵書の特色を出し，調和のとれた9キャンパスにわたる図書館システムをつくり上げるのに有効な技術を開発することが急務となった。

そこで，U.C.の新図書館システムをつくるための基礎として，以下の目標が明示された。

b．計画の目標

① 新しい図書館システムは強力で柔軟な，各キャンパスの図書館システムに基づいていなければならない。しかし蔵書構成は各キャンパス図書館の相互依存と総合を前提としてなされるべきである。

② 求められている時間内に資料を提供することは図書館サービスの基本である。

③ 資料の存在，内容，所在場所について知ることのできる手段が用意されなければならない。

④ 最寄りの図書館にない資料についても，迅速かつ確実に入手できなければならない。

⑤ 大規模コンピュータシステムの利用により，図書館経費の増大を抑制すべきである。

多様な各図書館の蔵書，利用者，利用者の要求に対応しつつ，以上の目標を達成するために，この計画ではサービスシステムを以下の6つのレベルに分けて実施することを提唱した。6つのレベルとは，学部・学科のレベル，キャンパスのレベル，地域(Regional)のレベル，州のレベル，国のレベル，国際レベルである。これら各レベルを前提に，以下に示す個別計画を設定した。

c．個別計画

(1) 資料の識別と所在確定

U.C.当局は「全てのキャンパスの図書館の蔵書は単一の大学図書館の部分的な蔵書であると考えるべきである。」という方針を打ち出した。しかし利用者にその資料の内容や資料の所在がわからなければ，総合された蔵書としての効果的な利用はできない。そこで本計画ではコンピュータ化され，オンラインで利用できる，全キャンパス中に端末を有する総合目録(MELVYLとして知られている)の開発が提唱された。MELVYL Systemには伝統的なカード目録にまさる次のような利点があった。

(a) 同システムが開発された時点では，オンライン目録はその維持に，カード目録よりも経済的であると見積もられた。

(b) 提供される情報がより新しい。

(c) 提供される情報が，変更や訂正が容易なので，より正確である。

(d) 情報の探索がより迅速で，より能率的である。

(e) 端末を通じての目録の利用はより多くの場所から，また個々の利用者の手許から可能になる。

(f) 総合目録に加えて，他のデータ・ベースも同一の端末から利用できる。

(2) 資料の調達と利用

資料が特定されると，その資料が必要とされる時間内に利用者の手許に届けられなければならな

い。U. C. では'70年代の後半の時点では資料の提供に時間がかかり，利用者が資料を受け取った時には時機を失していることも多かった。キャンパス相互間の資料の受け渡しに数週間を要することもあった。キャンパス内ですら資料の伝送に数日を要していた。そこで本計画では各レベルに応じて，次のように資料の調達・伝送のレスポンスタイムの目標値を設定した。

学部・学科内：即時
キャンパス内：1日以内
地　域　内：2日以内
州　　内：1週間以内
合 衆 国 内：2週間以内
外　　国：1～6ケ月

以上の目標レスポンスタイムを実現するために，次のような方策が採用された。

(a) 即時の利用要求があると思われる資料を各館に備える。
(b) 各キャンパスで貸出システムの機械化をすすめる。
(c) キャンパス相互間連絡バスの運転経費を予算化する。
(d) 他のキャンパスへ現物よりもコピーを送る方が適当な場合に備えて，資料複写の財源を確保する。
(e) キャンパス間相互貸借の専任組織をつくる。
(f) 資料の輸送手段の開拓やテレタイプの活用。
(g) キャンパス間相互貸借の事務処理手続の改善。
(h) U. C. キャンパス間相互協力システムとカリフォルニア州立大学システムとの調整。
(i) 州外からの要求には相互貸借実費を賦課。
(j) Center for Research Libraries に U. C. として加盟。
(k) 英国図書館貸出部門（BLLD）の利用と他の諸国についての資料調達網開拓努力の促進。

(3) 情報サービスと利用指導

利用者が情報を入手できるように，利用者に自身で図書館や蔵書の利用ができるよう利用指導をすると共に，利用者自身では探すことのできない情報をレファレンス・サービスとして提供しなければならない。この種のサービスを改善するために，以下の計画を設定した。

(a) 図書館の利用指導についての既存のコースを公式のものとする。この計画に基き学部課程での Bibliography 1 というコースの拡充がはかられている。
(b) 各学部レベルでの主題書誌と研究調査法についての科目を積極的に支援する。
(c) U. C. の教員，学生以外の人々（カリフォルニア州の納税者）へのレファレンス・サービスができるよう，その予算を確保する。
(d) 一図書館では回答できない参考質問は U. C. 図書館システムやその図書館システムの熟練した参考図書館員に転送することにより，極力，回答不能の参考質問を無くす。

(4) 資料収集と処理

本計画の第2の目標，即ち，必要とされている時間内に，必要とされている資料を提供するために，資料の収集努力が重要であるが，現在の予算状況では必要最低限の収書量より更に14%下回っている。新規受入図書量は一貫して低下傾向にあり，現状の受入量は1960年代初頭の水準にまで後退した。1960年初から現在までの20余年間に学生数も教員数もほぼ倍増し，出版量もまた増加を続けている状況を勘案すると事態は深刻である。

このような状況に対処し，学術研究活動に支障をきたさないようにするためには，年間の購入図書冊数は609,000冊が必要であるとされているが，現在の予算実績では523,000冊しか購入できない。今後，U.C. の学生数の増大や受託研究プロジェクトの増大等を考慮し，適正な収書量を算出するためには，学生数に代表される教育機能と，研究プロジェクト数に代表される研究機能との函数として収書量を客観的に決定することや，適正な図書館サービスを維持するために，収書予算というレベルではなく，より高いレベルでの収書財源の確保が必要となっている。

受入れた資料を処理する経費は，この業務が労働集約的であるため，着実に増大する傾向にある。これを防ぐためにはオンライン・コンピュータ・システムが推奨されている。コンピュータに

よるオンライン・システムは単にコストを低減するだけでなく，処理時間を短縮化し，標準化を推進するものであるし，そうでなければならない。そこで本計画では全キャンパスにオンライン・システムを導入することを提唱している。

(5) 要員計画

機械化システムを導入するなら，受入・整理部門で要員が削減されなければならない。これらの余剰人員はキャンパス内およびキャンパス相互間の資料配送や図書館利用指導といった増大する図書館サービスの要員としてふり向けられる。そこで本計画では，テクニカル・サービス部門での削減要員をパブリック・サービス部門に異動させることで，利用者数対職員数の現行比率を変更しないことを前提としている。

(6) 施設計画

1970年代後半から1980年代にかけて，主要な図書館施設建設のための財源はなかった。この結果，図書館の基準によると，現在，U.C. として25万平方フィートのスペースが不足している。蔵書の収納に現行方式を踏襲すると，1980年代末までに75万平方フィート以上のスペースが不足する。このような状況と建設コストの増大という現状から，現行の蔵書収納方式を再検討することとなった。

そこで，各図書館の規模と特徴，記録として残されている資料利用のパターン，及びスペース問題に関連するデータが集められ，シミュレーション・モデルによって検討された結果，既存の蔵書の大規模な廃棄やマイクロフィルム化は実行もできないし，費用対効果の面からも得策でないことが判明した。

その結果，各地区（Regional）毎に Compact Shelving としての共同保存書庫を建設することとなった。この根拠となったデータは第8表のとおり。

この保存書庫はカリフォルニア州立大学や州内主要私立大学，その他機関と共同で建設・利用される。

またマイクロフォームの問題に関しては逐次刊行物のマイクロ版は積極的に受入れられることになった。その理由はスペースと製本費の節減，盗難の予防，最も利用の頻繁な時期に雑誌類が製本に出ているというサービス上の不都合の回避が可能等が主なものである。

この結果，次の実行計画がつくられた。

(a) 南北両カリフォルニア地区に2つの保存書庫を建設する。

(b) マイクロフィルム版が刊行されている逐次刊行物はマイクロフィルム版に切り換える。

(7) 運営計画

北カリフォルニア地区ではU.C.B.を含むこの地区の4キャンパスの館長及びU.C.の図書館計画担当理事で構成された理事会をもつ北カリフォルニア Regional Libracy System が既に存在していた。そしてこれは U. C. Library System の図書館方針に関する運営委員会の付属機関でもあった。

これをモデルにして次の計画がたてられた。

(a) もう一つの理事会を南カリフォルニアにもつくる。

(b) 南北カリフォルニアの両理事会は，それぞれの運営手順を決定し，U.C. 図書館計画担当理事及び図書館方針に関する運営委員会からの指示を受けるものとする。

(c) 両理事会は図書館員，教員，学生の各代表から成る諮問委員会を設ける。

(d) 両地区保存書庫の長とコーディネータは管理目的に関して，図書館計画担当理事に報告する。

(e) 両地区保存書庫の利用希望機関の代表は，各理事会の決定に服するものとする。

V バークレー図書館の活動実績

U.C. Library Systemの一部とは言え，それだけで大きな Library System を構成し，米国西海岸最大の図書館の活動を把握することは容易でない。そこで主要な各部門について81/82年度の活動実績を Annual Report[3] に基づいて以下にまとめる。

A. テクニカル・サービス系統

1. Acquisition Department

a. 組織（括弧内数値は定員数）

管理課(3)，発注課，会計課(7)，受入課(9)，

受贈・交換課（9）の5課体側で，発注課は英語書籍係（9），ラテン系統語書籍係（4），ゲルマン系統語書籍係（2），スラブ系統語書籍係（3）の4係から成る。総定員はＦＴＥ換算32.5人で，前年度比1名の削減。補助者は年間約9,000時間分を使役している。

b．予算

蔵書のための購入額4,533,028ドル。対前年比約25万ドルの増加であった。購入図書として101,882冊を受入，また寄贈本，重複本を売却し，約21,700ドルの収入を得た。

c．寄贈・交換

資料交換リストに記載されている機関数は約4,370機関で，現在寄贈・交換を受けている逐次刊行物は約11,500種に及ぶ。

2. Bibliographic Services Department と Catalog Department

a．組織及び人員

1982年7月以降は第2図の組織図のとおり，2つの Department に分割されたが，それまでは次の5課体制であった。

	専門職（単位：人）	非専門職（単位：人）	補助者（過当り労働時間）
管理課	2.50	1.00	3
MARC 処理課 (RLin)	0.00	4.00	42
単行書コピーカタログ課	1.00	14.75	106
〃 オリジナルカタログ課	8.25	1.00	0
特別整理課	0.75	10.25	163
合計	12.50	31.00	314

b．業務実績

目録業務の実績として，81/82年度ではテンポラリーカタログを225,170件，正規の目録（Full 及び Partial）は44,830件である。RLin への新レコードの登録は約35,000件である。ファイリングは約15万枚のカードファイリングを実施した。

これらの実績は対前年比，目録件数で約30％減，ファイリング枚数は約1/4に減少した。この一因として，MELVYL の定着があげられる。

c．バークレーの目録システム

U.C.B. の目録システムは Catalog 1 と呼ばれる伝統的なカード目録と，Catalog 2 呼ばれるマイクロフィッシュ目録（COM）から成る。Catalog 1 には著者名―書名目録と件名目録があり，Catalog 2 には図書(著者名と書名)，逐次刊行物，件名，キーワード（書名中のキーワードによる索引)の各目録から成る。1977～81年が移行期で，この前に刊行されたものは原則として Catalog 1 に，この後に刊行されたものは Catalog 2 にだけ収録されている。

更に，U.C. の総合目録として，オンライン目録の MELVYL System があり，これには Catalog 2 のレコードが含まれている。

3. Conservation Department

バークレーではその蔵書内容の優秀さ，規模の大きさ等の他に，この問題は有能な図書館員の下で，多数・多種の専門特殊技能熟練者を必要とする業務を含むこと，そのための専門作業施設も必要となること等により，一つの専門の部がつくられている。

a．蔵書の破損

バークレーの蔵書の破損については二大原因が認められている。それは蔵書の化学的変質と利用破損である。前者は主として紙質に起因するが，部分的には保管環境にも原因が求められる。後者は多年にわたる頻繁な利用と不充分な管理に起因する。

b．補修のコスト

バークレーでの1冊当り補修コストは，ほぼ16ドルと見積もられている。ただこれは自館内で補修可能な比較的軽微な補修の場合である。

U.C.B. の蔵書約600万冊と一千万を越える原稿，地図，絵図等は，大半が1850年以降に作られ，ほぼ50年から150年の寿命が見込まれている。U.C.B. 図書館は現在，各蔵書が平均して今後百年間は化学的変化に耐えられるとの仮定の下に運営されている。しかし一部の専門家はその仮定はあまりに楽観的にすぎると考えている。

今後百年間に，現存の全蔵書の対策を行うとすると年間6万冊を処理しなければならない。今，経済性を考慮して，蔵書の50％だけを将来に残さねばならないとしても，年間処理量3万冊で，年

間経費はスタッフの人件費を含んで120万ドル（1冊当りほぼ40ドル）を要すると見積られる。

脱酸素法による一括大量処理はこの問題に貢献すると見られている。U.C.B.はまだ脱酸素法を使用していないが，この方法で蔵書の寿命が少くとも2倍になり，その結果，処理を要する冊数が年間15,000冊に半減し，経費も年間60万ドルと脱酸素法による処理コストとの合計額にまで引き下げられる。

もとより，これらの計算は新規受入資料は保存のための対策がなされているとの前提に立っている。

c．製本

81/82年度の製本完成冊数は51,083冊であった。予算額減少のため，対前年度比約3,000冊の減である。新規製本だけで，現在年間54,000冊の製本が必要となり，現在，製本待ちとなっている滞貨は約2万冊から2万5千冊分あると推定されている。

再製本のコストについては U.C.B. と U.C. Bindery（U.C.図書館システムの製本所）との共同でコストの引下げをはかるべく，各々の得意分野を生かした分業を行なっている。81/82年度では3,090冊の再製本を行ない，コストは合計約28,000ドルであった。

d．修復・保存のための再購入

現状では蔵書の約10%に部分的な破損が生じている。このため破損した蔵書については再購入する計画（これを The Library Brittle Book Program という）をたてた。81/82年度については797冊分が手当され，人件費を除いて，15,522ドルを要した。この破損図書復旧計画が発足して間もなく，ある種の蔵書の修復コストが再購入コストを上回ることが判明した。

近い将来，資料の保存のための画期的な技術進歩が期待されているが，それまでの最良の方法はマイクロフォームの利用である。このため保存すべき資料のマスターとして，ネガフィルムを作り，そこから一般利用のためのマイクロフォームを作っている。既に約3万枚のマスターフィルムが作られている。

e．蔵書の安全対策

1981年に“Disaster Preparedness Task Force Report”が出され，これに基づいて，図書館安全対策協議会（Library Security Council）がつくられた。ここでは災害時の利用者と職員，建物と設備，蔵書のそれぞれについて，安全対策を検討している。同協議会では非常の際の避難・誘導，非常電話連絡網，蔵書の安全確保，建物の安全性，建物の防犯システム等の問題を扱かっている。更に，災害時の対策，復旧計画も設定している。

f．協同事業

(1) U.C.の他キャンパス

U.C.の他キャンパスとの間では Conservation に関して，Library System の長期計画を補完する計画[4]がつくられている。

(2) スタンフード大学との協同

U.C.B.はマイクロフィルム化を，Stanford は複写を専門に担当する。その他にも両大学の Conservation Department は非公式の協同を緊密に行なっている。この協力関係は Northern Regional Storage Facility の Conservation Subcommittee を舞台に行われている。

(3) R.L.G.

R.L.G.はその組織に Preservation Committee を有しているが，U.C.B.の Conservation Department はそこで大きな役割を演じている。

上記委員会では現在次の計画が提案されている。

① Preservation のマスター・マイクロフィルムの書誌調整

② 破損した蔵書資料のフィルムによる補塡。

4. Systems Office

a．組織の目的

U.C.B.の図書館システムの機械化は，既に利用者と整理部門のスタッフを巻き込むところにまで発展してきている。利用者は既に機械化システムを利用することに馴れており，整理部門のスタッフはシステムを通じて利用者に書誌データを提

供している。現在 U. C. B. 図書館の機械化計画の主な目標は，現行の三つのコンピュータ・システム，即ち図書館の一般業務用システムとしての TALUS, Shared Cataloging システムとしての RLIN/OCLC，及び Public Access System としての MELVYL を統合して，一つの統合図書館システムを作り上げることである。

b．日常業務

U.C.B. 図書館の Systems Office は U. C. の Information Services Office と緊密な関係にあり，その Back up を受けている。即ち，機械化のためのコンピュータのハード，ソフト両面にわたる技術的な問題は，ほぼ U. C. Information Services に委託し，Systems Office は基本的，管理的問題に専心できるようにしている。81/82 年度の主な業務内容は次のとおり。

(1) 図書館用コンピュータの選定，購入，据付
(2) 図書館用データ処理を U.C.B. の Computer Center から U.C. の Computer Center に移管。
(3) 閲覧用と収書用のＣＯＭフィッシュの品質改良
(4) Catalog 2 のキーワード索引作成
(5) OCLC と RLin に対する一元的窓口業務の引受
(6) プログラムの維持・管理を U. C. Information Services に移管
(7) U.C.B. の主コンピュータ変更に伴う業務
(8) 周辺・端末機器の購入と維持
(9) キャンパス内全分館の蔵書を機械可読形式に変更するためのプロジェクトの創設

c．業務統計

1982年６月度を基準に業務の一部を示すと，図書に関するレコードの入力件数は月間約53万件，作成フィッシュの枚数約 400 枚，逐次刊行物の入力レコード約30万件，作成フィッシュ約100枚である。また各館に配布されるフィッシュの作成頻度は，貸出記録が毎日，目録については図書が２週間に１度，逐次刊行物が月に１度，件名目録及びキーワード索引は年に３度，それぞれ更新されることになっている。

B．パブリック・サービス系統

1. Collection Development and Reference

a．蔵書構成の基本方針

蔵書構成に関する Policy Statement[5] によれば，U.C.B. 蔵書構成の基本方針は次のとおり。

(1) 図書館の使命

本図書館の使命は U.C.B. の教育と研究及びサービス計画のニーズに合致した蔵書を構成し，情報サービスを提供することにある。

(2) 図書館の目的

(a) 蔵書

① 現行の研究・教育プログラムに適切な全ての形態の記録情報を探し出し，入手し，組織化し，提供すること。

② 研究と教育のニーズを満たした上で，更に今後出現し，変化するであろうプログラムに対処するため，多様な資料類を収集し，組織化すること。

(b) サービス

① 学生と教員の双方が図書館のリソースを充分に利用できるよう，利用者に図書館利用技術を身につけさせ，物理的施設を利用に供すること。

② 利用者個人に対する直接的なサービスと他機関との共同プログラムの両面で，本図書館の有効性をカリフォルニア州，合衆国，および全世界の学者と学生に拡大するためのリソース共有化のプログラムを開発すること。

b．組織の目標

(1) U.C.B. の学術研究計画に合致した水準の蔵書を維持する。
(2) 高度のサービスを維持するために，望ましいレベルの図書館員をレファレンス・デスクに配置する。また，これを可能にするために，担当職務のローテーションを継続する。
(3) 当該部門のスペースに関する危機的状況を克服・改善するための可能性を検討する。
(4) 欠員となっているゲルマン語系図書館員とその秘書を補充する。
(5) 図書館利用教育担当の管理者と共同して，新プログラムの開発や既存プログラムの改訂

を行う。

(6) 当該部門のサービスを一層改善するため，広報活動を再検討する。

(7) 目録をはじめとする利用者の蔵書へのガイドを改善するため，テクニカル・サービスやシステム・オフィスの担当者と協力する。

c．改善すべき問題点

(1) 職員の欠員・空席

ゲルマン語関係図書館員とその秘書，イスラム系資料発注担当者が空席である。RLG, ARL, Stanford/Berkeley, U. C. Systemwide の各図書館協力要員が不足している。

(2) 目録の問題

既述のように，複数の目録システムが並存しており，統合されていないために，迅速なサービスが阻害されている。

(3) スペースの問題

(a) Reference and Bibliography Collection は約3万点に達している。廃棄・移管は実施しているが，新たな収容能力がなくなっている。

(b) 書庫は1965年までに満杯になっており，新しい保管施設が必要である。

(c) スペースが無いため，利用者とのインタビューに際して，利用者のプライヴァシーが守れない。

(4) 受入資料リスト

現在，購入予算費目別の受入資料リストは作られているが，これ以外に主題別，もしくは分類綱目別の受入資料リストが必要となる。

(5) 図書館をとり巻く，政治的，経済的状況

現在の状況の下で，次の諸問題がある。

(a) イランで刊行されている資料類の入手が確保できるか。

(b) レバノンにある中近東関係図書の納入業者への依存は収書上，問題とならないか。

(c) 外為レートの変動は資料の買付価格に影響するが，外為レートをどの水準に設定すべきか。

(6) 無断帯出防止装置を採用しているが，依然として盗難本が多い。

d．業務統計（1981/82年度）

(1) U.C.B.の本館及びReference and Bibliographic Collection 用の収書予算額は825,750ドルであった。

(2) 一般レファレンス・サービス

受付件数（記録されたもののみ）は71,887件。このうち38,480件は口頭で，33,407件は電話による。件数は対前年比で殆ど変化なし。若干の記録もれがあるため，実件数はこの数値よりも大きくなる。

内容別にみると70%強が情報要求で，30%弱が所在指示要求である。

(3) Library Tour

228回の Library Tour を行ない，1,924名が参加した。

(4) Computer Bibliographic Search

5人のオンライン・サーチャーにより，有料で209件，無料で（quick search）128件を処理した。工学系統が各研究室から直接サーチを行ない，図書館を通さなくなったことと，予算がタイトになったため，件数では対前年比約35%の減少を示した。

尚，209件の内訳は122件がU.C.内からの，87件がU.C.外からの要求であった。

(5) 外国からの参考質問

手紙により164件の質問を受けた。

(6) Reference and Bibliographic Collection 総数29,922冊。受入2,187冊，廃棄・移管580冊。

2. Cooperative Services

この部門の主たる活動は Bibliographic Retrieval Unit（B.R.U.）と呼ばれており，次の四種のサービスがある。

BAKER/LDS[6]（Library Delivery Services）

BAKER/FAST BOOK（スタンフォード大学図書館との相互協力）

BAKER/SLA(Special Libraries Association)

Inter Library Loan（I.L.L.）

B.R.U.は図書館学校の学生アルバイトによる良質の労働力によって支えられ，今までとは異なる新しいサービスを実施し，成功してきた。B.R.U.は Unit Head だけが正職員で，他は学生アルバイトであり，有料のサービスを実施する

独立採算部門である。

a．サービス料金

BAKER/LDS：登録料15ドル，要求1件当り2ドル

BAKER/SLA：Filled Request 10ドル，Unfilled Request 5ドル。

I. L. L.：州外からの要求は10ドル

以上の料金によるサービスの結果，81/82年度の年間売上げは30,023ドルであった。なお，B.R.U.の年間経費は53,129ドルで，収支は赤字である。

b．要求件数

BAKER/LDS：9,396件

BAKER/FAST BOOK：スタンフォード大学からの要求は1,907件で，対前年度比21.9%増

BAKER/SLA：1,465件（対前年度比9.3%増）

I. L. L.：借受約20,000件，貸出約15,000件

3. Circulation Department

a．一般状況

Circulation Department の81/82年度 Annual Report に，部長が次の註記を加えている。

「担当者達の志気は低く，パブリック・サービスの状況とその執務態度は私の想像できるレベルとは程遠いものがある。この部門の担当者は利用者に顔を向ける必要がある。」[7]

そこで81/82年度はスタッフの努力を学生補助者（'81年10月現在で113名，中53名は未経験者）の労働の質を改善することに集中した。具体的な方法としては，スタッフ・ミーティングを頻繁に開くこと，オリエンテーションを組織し，実施することであった。オリエンテーションとして実施された内容は次のとおり。

(1) 新学生補助者全員をサーキュレーションの全職員に紹介する。

(2) 個々の担当者が自覚すべき役割と責任。

(3) サーキュレーション部門の目標。

(4) この目標達成のために学生補助者に期待されている労働の質と義務。

(5) 学生補助者への期待。

このオリエンテーションのあと，学生補助者は専任職員から次の順序と内容の教育を受ける。

書庫の配置，要求文献の探し出し，図書の返却と貸出期間更新の手続き，入庫チェック，図書貸し出し手続き。この間に随時，貸し出し記録のキーパンチの方法を習得する。

これらの教育を通じて，当面1人月間5,000冊の配架（実績）が可能となった。（目標は1人月間8,000冊）。貸し出し記録のパンチカード処理は1人1時間当り200件から300件へ，カードの探索量は1人1時間当り，17枚から25枚へとそれぞれ増大した。

b．業務統計（本館のみ）

サーキュレーションのサービス時間は年間3,595時間。投入労働力は44,653人時，この中37%は書庫作業に振り向けられた。貸出し図書総計302,162冊。館内利用180,224冊。配架図書総計343,940冊で，これは1人1時間当り76冊を配架したことになる。

また Shelf Reading を約1千時間をかけて実施した。特に利用が頻繁な棚は年間2～4回実施した。Shelf Reading の対象となった図書は合計3,209,640冊で，1人1時間当り平均1,680冊の Shelf Reading を実施したことになる。

General Library の開館時間については，平日が学期中は午前8時から午後9時まで，休暇中は午前8時から午後5時までで，土曜日，日曜日は正午から午後5時まで開館である，全日閉館となるのはクリスマス休暇の数日間だけで，極力研究活動に支障をきたさないよう配慮を加えている。

VI おわりに

以上U.C.B.の図書館活動の一部を可能な限り客観的事実に即して記述した。U.C.B.の図書館は米国の大学図書館の中でも最も複雑で理解し難いものだと言われる。その全貌を明らかにするには本稿の数倍の紙数が必要であろう。しかし，本稿に記述した部分についてだけでも，その図書館活動にさまざまな問題点や努力や工夫がなされている事が明らかだろう。たとえそれらの事柄が日本の大学図書館にとって，現在は切迫した問題でなくとも，近い将来，必らずや参考にせざるを得ない時が来ると確信している。

注・引用文献

1) "Task Force Report : Library Facility, Prepared as part of The Berkeley Campus Space Plan." U. C. Berkeley Library, 1982, 104 p.

2) Office of the Executive Director of University-wide Library Planning. "The University of California Libraries : A Plan for Development." 1977, Berkeley, Systemwide Administration (U. C.), 210 p.

3) 図書館の Annual Report は公開されるのが原則であるが，U. C. B. では非公開であり，館長オフィスにファイルされている。副館長によれば非公開の理由は人事上のデータを含むためとのことである。Annual Report は各部門の責任者がそれぞれの部門の活動について報告しているが，書式，報告内容についての統一はなく，また報告がファイルされていない部門もある。

4) Annual Report によれば Conservation of the collections, a Supplement to the University of California Libraries, a plan for development 1978-88." という計画書がつくられている。

5) Koenig, D. and Dowd, S. "Collection Development Policy Statement : Preliminary Edition." The General Library, Univ. of California, 1980, p. 3.

6) サービス内容については，高山正也，"アメリカ便り　その4." 図書館雑誌，Vol. 78, No. 2, p. 100-2. を参照せよ。

7) この状況については，高山正也，"アメリカ便り　その1." 図書館雑誌，Vol. 77, No. 6, p. 350-1. を参照せよ。

8) 本件に関しては最新の動向が American Libraries 誌 Sept. 1984, p. 550 に報じられている。

三田図書館・情報学会月例研究会

第34回（59年5月26日）

「Bibliographic Instruction の方法」

発表者　H. R. Wheeler (Univ. of California, Berkley)

第35回（59年7月21日）

「オンライン・パブリック・アクセス・カタログの現状」

発表者　細野公男，上田修一（慶大図書館・情報学科）

第36回（59年9月29日）

「カリフォルニア大学（バークレイ）の図書館活動」

発表者　高山正也（慶大図書館・情報学科）

第37回（60年1月26日予定）

「学校図書館の現状」

発表者　高橋元夫（慶應義塾幼稚舎）

三田図書館・情報学会は，年3回の研究会のほか，年次研究大会・橋本孝記念講演会を毎年11月に開催している。これらの研究会等は，非会員にも公開している。また三田図書館・情報学会は，機関誌として Library and Information Science を年1回刊行している。同誌は，個人会費（年額3,000円），機関会費（年額5,000円）を支払った会員に送付される。

学会への入会，機関誌投稿等に関する問合せは，慶應義塾大学図書館・情報学科事務室（電話 03—453—4511 内線 3147）で受付ている。

第1表　日米大学図書館一館平均規模比較

		U. S. A. (1978—79)					日本 (昭和53年度)			
		All types	university	4year inst. with grad. students	4year inst. without grad. students	2year institute	国立大A平均	私立大A平均	私立大学平均	全大学平均
蔵書数(冊)	平均	198,292	1,435,516	284,775	109,203	41,105	1,882,965	1,010,723	154,447	233,438
	Median	59,214	1,076,005	123,488	71,703	28,920	—	—	—	—
図書年間増加冊数(NET)(冊)		2,507	40,857	2,004	1,467	848	76,394	88,652	10,467	13,254
受入雑誌種類数(タイトル)		2,009	22,500	3,400	2,081	1,301	15,825	8,318	1,265	2,007
図書館運営総経費(千ドル)		481.2	3,849.3	538.4	155.4	180.4	4,641.0 〔1,067,441.1〕	4,145.2 〔953,394.3〕	543.0 〔124,897〕	705.7 〔162,305〕
人件費	〃	227.5	1,759.7	244.0	73.0	102.9	1,901.2 〔437,287.1〕	1,175.9 〔270,461.0〕	222.1 〔51,072〕	277.8 〔63,901〕
図書購入費	〃	71.9	553.5	87.9	28.5	20.1	1,245.1 〔286,383.5〕	1,576.1 〔362,513.0〕	166.8 〔38,360〕	208.8 〔48,024〕
雑誌購入費	〃	57.4	557.7	68.5	14.3	7.2	910.6 〔209,448.2〕	803.1 〔184,705.5〕	62.8 〔14,436〕	103.3 〔23,766〕
製本費	〃	8.1	81.7	9.4	2.3	0.6	138.5 〔31,853.4〕	123.8 〔28,472.5〕	14.4 〔3,323〕	18.4 〔4,237〕
全専任職員数	(男)(人)	4.7	38.0	4.7	1.5	2.1	110.4	77.3	14.0	17.0
	(女) 〃	14.0	105.5	15.5	5.4	5.8				
プロフェショナル図書館員	(男) 〃	2.8	19.2	3.2	1.1	1.3	(73.8)	(47.0)	(9.0)	(11.0)
	(女) 〃	4.8	31.6	5.5	2.4	2.1				
非プロフェショナル図書館員	(男) 〃	1.9	18.8	1.6	0.4	0.8	—	—	—	
	(女) 〃	9.2	73.9	10.0	3.0	3.7	—	—	—	
機関数		3,122	161	1,025	752	1,184	12	4	312	432
備考		Library statistics of college and universities 1979 による					昭和54年大学図書館実態調査結果報告による 〔 〕内 単位 千円, 1ドル=230円換算 ( ) 内数値：司書資格保持者			

第2表　日米主要大学図書館比較表

	A. R. L. 中位数 (1979—80)	Harvard Univ. (1979—80)	Univ. of Cal. Berkeley (1979—80)	国立大学 Aグループ平均 (1980)	東京大 (1980年度)	慶應義塾大 (1980年度)
蔵書冊数	1,792,048	10,082,663	5,753,731	1,745,431	4,920,000	1,166,301
図書年間増加冊数	56,505	168,671	156,577	72,346	153,576	70,882
受入雑誌種類数	19,568	94,000	102,199	15,051	27,278	12,247
図書館運営総経費	4,783,864	17,445,634	14,442,480	4,339,839 〔998,163〕	〔2,995,144〕	〔1,484,013〕
人件費	2,730,942	10,428,993	8,970,402	1,717,378 〔394,997〕	〔1,426,992〕	〔595,747〕
図書館総資料購入費	1,637,405	5,001,716	3,391,896	2,171,778 〔499,509〕	〔1,229,797〕	〔725,603〕
製本費	108,844	494,462	387,704	122,417 〔28,156〕	〔97,071〕	〔29,983〕
全専任職員数	250	943	602	95 (37)	345	120
プロフェショナル図書館員数	61	285	141	—	—	—
非プロフェショナル図書館員数	189	658	461	—	—	—
相互貸借（貸出）	12,655	46,799	26,741	10,007*	13,786*	37,084*
〃（借受）	4,990	6,738	9,988	5,005*	1,629*	4,813
備考	A. R. L. Statistics による			〔 〕内 単位 千円 1ドル=230円 換算	*貸出冊数と受付件数，借受冊数と依頼件数のそれぞれ和 大学図書館実態調査結果報告，日本の図書館，KULIC，日本の図書館による	

第3表　University of California Library Statistics

Bound Volumes and Serials Received Currently

1980–81

Location	Volumes in Library			Volumes Added		Serials Received Currently			1980–81 Serials Activity	
	30 June 1980	30 June 1981	Percent Change	1980–81 Gross	1980–81 Net	30 June 1980	30 June 1981	Percent Change	Added	Cancelled or Ceased
Berkeley	5,758,622	5,927,773	2.94	184,590	169,151	102,199	104,793	2.54	*	*
Davis	1,606,266	1,681,545	4.69	79,838	75,279	42,759	44,084	3.10	2,086	761
(Hastings Coll. of the Law)	167,549	193,161	15.29	25,724	25,612	4,232	4,329	2.29	101	4
Irvine	939,012	983,379	4.72	46,878	44,367	13,112	13,558	3.40	811	365
Los Angeles	4,235,222	4,346,526	2.63	127,395	111,304	58,750	65,788	11.98	7,694	656
Riverside	980,253	1,033,177	5.40	53,852	52,924	14,010	14,403	2.81	532	139
San Diego	1,378,955	1,426,747	3.47	64,266	47,792	26,743	27,629	3.31	1,400	514
San Francisco	486,389	495,807	1.94	11,869	9,418	4,121	4,131	0.24	96	86
Santa Barbara	1,375,227	1,416,667	3.01	43,932	41,440	18,675	18,832	0.84	409	252
Santa Cruz	619,669	646,643	4.35	27,437	26,974	9,683	10,115	4.46	508	76
Total	17,547,164	18,151,425	3.44	665,781	604,261	294,284	307,662	4.55	13,637	2,853

* Not available.

注　U. C. 9キャンパスと呼ぶ場合には Hastings Call. of the Law は含まれない。

（出典：University of California Library Statistics, July 1981 より）

第4表 University of California

Library Expenditures and FTE Staff Information

July 1, 1981-82 Adjusted Budget

	Berkeley	Davis	Irvine	Los Angeles	Riverside	San Diego	San Francisco	Santa Barbara	Santa Cruz	Systemwide	Grand Total
Budgeted Expenditures											
1. Salaries and Wages											
A. Academic	$ 4,836,032	$ 2,008,004	$1,347,278	$ 4,446,583	$ 653,487	$1,397,176	$ 616,036	$1,651,706	$ 798,748	$ 98,982	$17,854,032
B. Staff	4,836,848	2,808,556	1,595,562	4,553,943	1,524,481	2,321,639	791,944	2,278,858	1,065,100	826,560	22,603,491
C. General Assistance	1,019,116	569,394	262,056	1,290,966	308,709	491,839	45,067	545,820	158,695	90,521	4,782,183
D. Employee Benefits	2,201,137	1,118,636	502,657	1,518,161	509,347	868,872	310,086	859,242	420,398	246,210	8,554,746
E. Subtotal	12,893,133	6,504,590	3,707,553	11,809,653	2,996,024	5,079,526	1,763,133	5,335,626	2,442,941	1,262,273	53,794,452
2. Library Materials	3,922,409	2,752,687	2,035,530	3,967,254	1,536,747	2,237,892	535,140	1,994,896	1,280,048	712,202	20,974,805
3. Binding	459,936	355,327	206.381	533,996	138,949	237,132	62,424	291,170	115,986	—	2,401,301
4. Supplies, Expense, and Equipment	917,219	634,028	215,325	1,145,920	179,450	421,861	76,967	358,356	212,625	1,519,444	5,681,195
5. Total Budgeted Expenditures	$18,192,697	$10,246,632	$6,164,789	$17,456,823	$4,851,170	$7,976,411	$2,437,664	$7,980,048	$4,051,600	$ 3,493,919	$82,851,753
FTE Staff											
1. Academic	154.41	66.25	48.00	144.65	25.50	47.25	19.00	54.00	27.80	3.00	589.87
2. Staff	281.26	169.58	96.17	259.15	90.25	129.60	48.73	138.90	61.90	32.77	1308.31
3. General Assistance	86.77	51.10	11.35	104.13	12.75	35.57	3.22	43.02	8.20	0.58	356.69
4. Total FTE Staff	522.45	286.93	155.52	507.93	128.50	212.42	70.95	235.92	97.90	36.35	2254.87

第5表　SIZE of the LIBRARIES of the UNIVERSITY OF CALIFORNIA on 30 June 1983
BOUND VOLUMES AND SERIALS RECEIVED CURRENTLY
BERKELEY DETAILS

LIBRARY UNIT	VOLUMES			SERIALS RECEIVED CURRENTLY		
LOCATION	30 June 1982	30 June 1983	% CHANGE	30 June 1982	30 June 1983	% CHANGE
GENERAL LIBRARY	5,021,267	5,180,152	3.16	83,633	81,599	−2.43
MAIN BUILDING	3,069,158	3,160,642	2.98	45,963	43,816	−4.67
Central Collection	2,461,637	2,529,708	2.77	25,063	24,332	−2.92
Bancroft Library	303,547	311,054	2.47	1,680	1,779	5.89
Morrison Library	11,577	11,950	3.22	61	62	1.64
Government Documents	292,397	307,930	5.31	19,159	17,643	−7.91
BRANCH LIBRARIES	1,952,109	2,019,510	3.45	37,670	37,783	.33
EAST ASIATIC	435,879	447,059	2.56	3,553	3,930	10.61
Ctr. for Chinese Stud.	33,150	34,328	3.55	264	287	8.71
HUMANITIES/SOCIAL SCI.	550,313	575,423	4.56	11,133	10,876	−2.31
Anthropology	53,850	55,278	2.65	1,222	1,191	−2.54
Education/Psychology	105,764	107,661	1.79	2,168	2,060	−4.98
Environmental Design	137,354	141,955	3.35	1,762	1,714	−2.72
Library School	39,921	41,215	3.24	1,837	1,791	−2.50
Music	102,645	115,734	12.75	981	979	− .20
Social Sciences	91,571	93,804	2.44	2,866	2,866	0
Social Welfare	19,208	19,776	2.96	297	275	−7.41
LIFE SCIENCES	438,891	450,044	2.54	13,544	12,909	−4.69
Biochemistry	8,966	9,081	1.28	164	161	−1.83
Biology	202,579	206,984	2.17	3,981	3,895	−2.16
Entomology	13,352	13,912	4.19	349	344	−1.43
Forest Products	8,018	8,317	3.73	314	311	− .96
Forestry	27,473	28,469	3.63	1,325	1,371	3.47
Natural Resources	98,727	100,591	1.89	4,693	4,304	−8.29
Optometry	6,816	7,462	9.48	180	182	1.11
Public Health	72,960	75,228	3.11	2,538	2,341	−7.76
PHYSICAL SCIENCES	315,528	327,567	3.82	8,640	9,242	6.97
Astron.-Math/Stat.-CS	52,266	54,279	3.85	1,258	1,264	.48
Chemistry	40,275	41,954	4.17	803	800	− .37
Earth Sciences	78,490	82,190	4.71	2,736	2,772	1.32
Engineering	113,896	117,077	2.79	3,366	3,914	16.28
Physics	30,601	32,067	4.79	477	492	3.14
UNDERGRADUATE (1)	178,315	185,089	3.80	527	539	2.28
Audio-visual Media Ctr.	33	35	6.06	9	13	44.44
NON-GENERAL LIBRARIES	1,096,157	1,156,149	5.47	18,632	19,985	7.26
Asian-American Stu.	15,500	15,800	1.94	58	172	196.55
Chicano Stu.	4,000	4,450	11.25	215	1,100	411.63
Earthquake Eng. Res. Cr.	17,578	18,936	7.73	391	525	34.27
Giannini Found.-Ag. Eco.	18,139	18,579	2.43	2,836	2,878	1.48
Inst. of Govern. Stu.	392,235	397,283	1.29	1,947	2,000	2.72
Inst. of Indust. Relat.	53,378	54,353	1.83	1,003	1,008	.50
Inst. of Internatl. Stu.	11,840	12,054	1.81	203	207	1.97
Inst. of Trans. Stu.	99,465	103,498	4.05	2,377	2,437	2.52
Law	429,652	441,026	2.65	8,009	8,009	0
Philosophy	6,559	7,115	8.48	40	42	5.00
Water Res. Ctr. Arch.	47,811	83,055	73.72	1,553	1,607	3.48
TOTAL	6,117,424	6,336,301	3.58	102,265	101,584	− .67

(1) Includes Audio-Visual Media Center　　Amended August 22, 1983

第6表　幹部図書館員給与表

（1981年7月現在）

職名	等級	経験期間	年俸額
			ドル
Librarian	V	——	39,672
	IV	3年	36,012
	III	〃	32,700
	II	2年	30,648
	I	〃	28,608
Associate Librarian	VII	2年	30,648
	VI	〃	28,608
	V	〃	26,712
	IV	〃	24,984
	III	〃	23,376
	II	1年	22,284
	I	〃	21,288
Assistant Librarian	VI	1年	22,284
	V	〃	21,288
	IV	〃	20,160
	III	〃	19,164
	II	〃	18,192
	I	〃	17,412

第7表　図書館職員給与表（専門職・一般職）

（1981年9月現在）

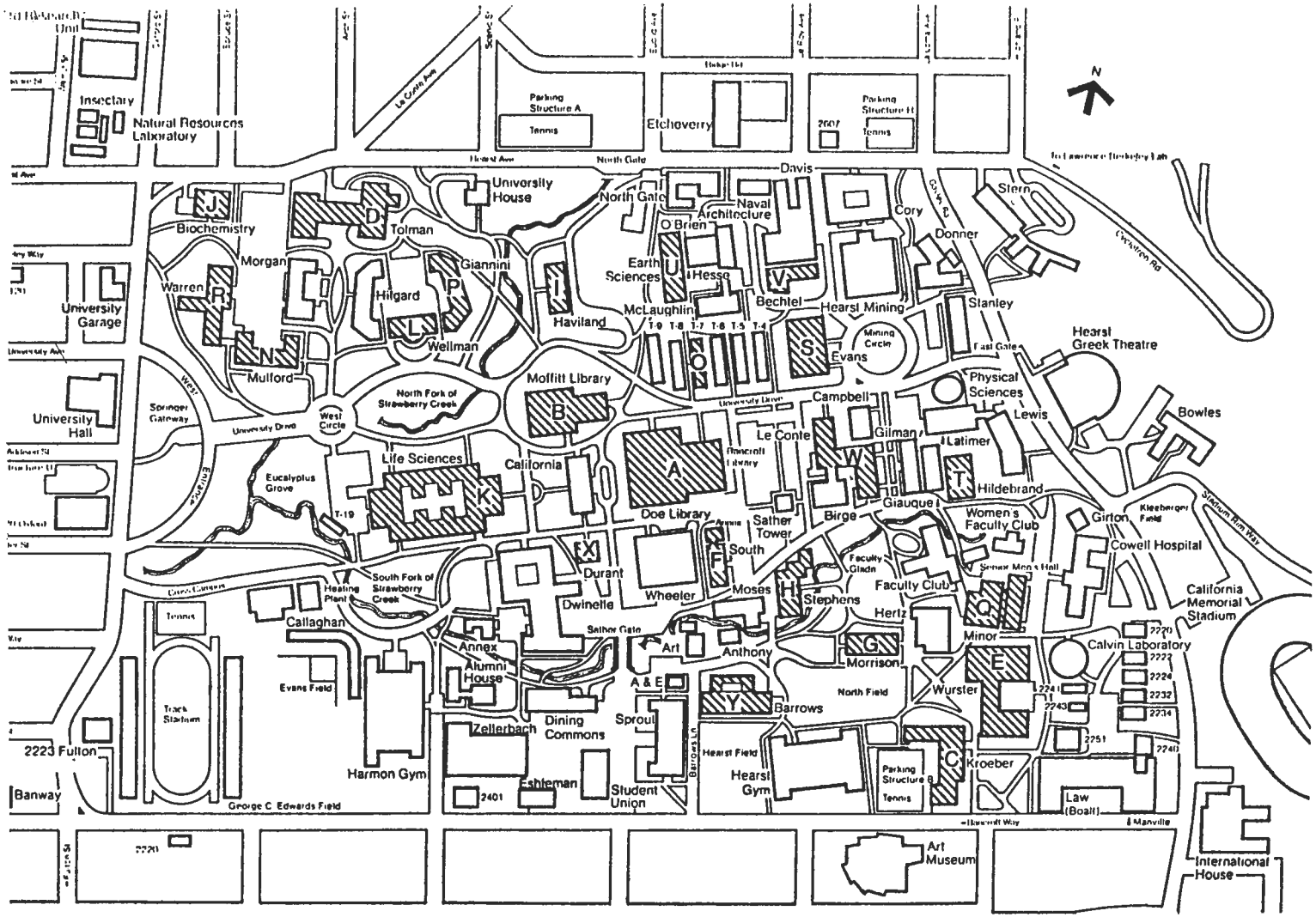
職名・等級	年俸額（ドル）		職名・等級
Clerk	11,232		
		11,448	
	11,640		
		11,844	
	12,072		
		12,276	
	12,516		
		12,756	Library Assistant I
	12,984		
		13,212	
	13,464		
		13,728	
Library Assistant II	13,992		
		14,244	
	14,520		
		14,808	
	15,108		
		15,456	
	15,804		
		16,140	Library Assistant III
	16,476		
		16,824	
	17,196		
		17,532	
Library Assistant IV	17,952		
		18,348	
	18,792		
		19,224	
	19,668		
		20,148	
	20,580		
		21,060	
	21,540		

第8表 Costs of Shelving, by Different Methods, for a Hypothetical Collection of 3 Million Volumes

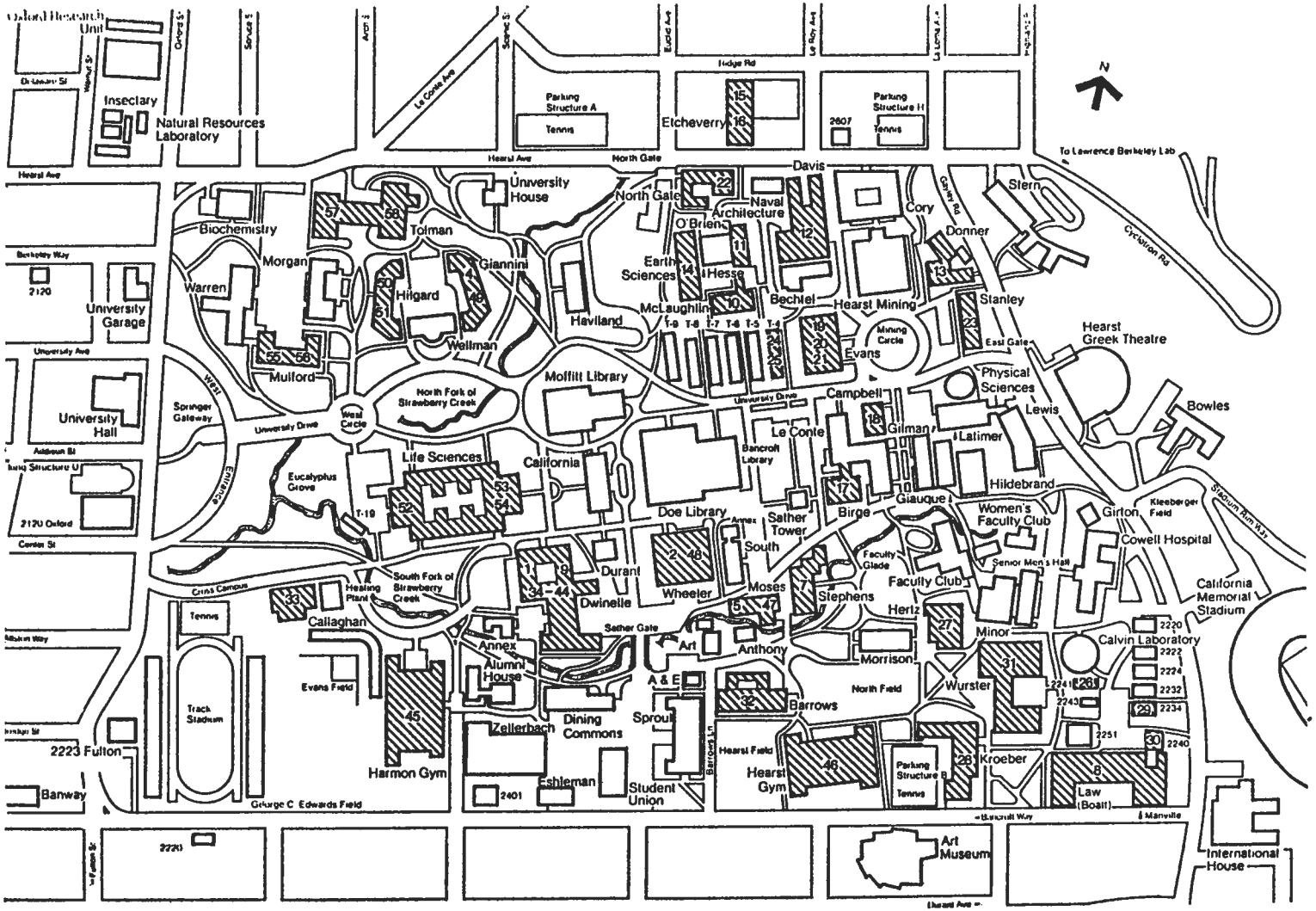
(U. S. Dollar)

System	Equipment				Space			Cost of Land	Total Cost, Equipment Space & Land	Cost Per Volume
	Volumes Per Section or Unit	Units Needed	Cost Per Unit	Total Equipment Cost	ASF Per Unit	Total ASF Required*	Total Space Cost			
1. Conventional	400	7,500	189	1,418,000	19	147,000	10,177,000	1,077,000	12,672,000	4.22
2. Elecompack	69,000	43	104,000	4,472,000	1,100	51,000	3,531,000	455,000	8,458,000	2.82
3. Stormor	350	8,600	350	3,010,000	6.5	60,000	4,154,000	463,000	7,627,000	2.54
4. Hallowell	108,000	28	78,900	2,209,000	1,250	39,000	2,700,000	347,000	5,256,000	1.75
5. Two-Tiered, Double-Shelved, by Call Number	1,176	2,550	375	956,000	19	53,000	3,669,000	406,000	5,031,000	1.68
6. Two-Tiered, Double-Shelved, by Size	1,600	1,875	375	703,000	19	40,000	2,769,000	326,000	3,798,000	1.27

* Includes 4,130 asf for staff and users.



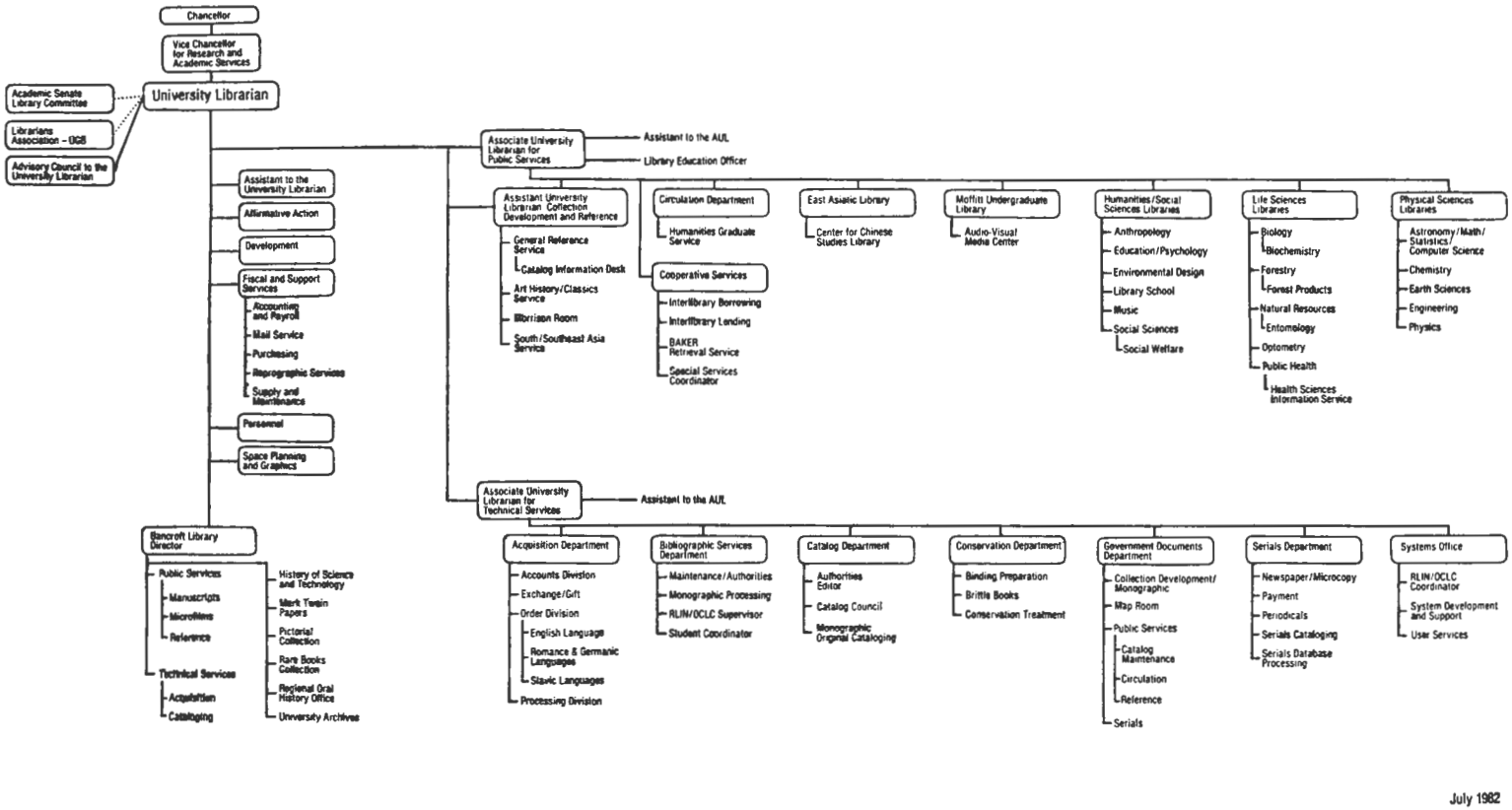
第1図　U. C. B. 図書館配置図（その1）



第1図　U. C. B. 図書館配置図（その2）
Non-General and Departmental Libraries

第2図 Organization Chart of the General Library, University of California, Berkeley

(1982 年 7 月以降の組織図)



July 1982

福澤諭吉の読書論

渋川雅俊

ある晩テレビニュースが福澤先生の肖像画がシンボルになった1万円の新券のことと読書週間のことを続けて報じていた。

読書週間は毎年秋に行われており，今年で38回目になるという。読書推進運動協議会（社団法人）が中心となってこれを進めている。今年は「秋です，本です，読書です」を標語にして，10月27日から11月9日までいろいろな行事が行われる。この時期になると各新聞社も読書週間に因んだ企画をする。最大のものは，毎日新聞社の『全国読書世論調査』である。この調査結果は今年同紙10月26日朝刊で詳報されている。他紙も読書週間に因んで社説を掲げている。

先のテレビニュースからあることを連想した。曰く，「福澤諭吉の読書論」である。ふとそんなことを思いついたのは，その日の午後，三越の福澤諭吉展で高鳥正夫前図書館長の講演，『福澤諭吉と慶應義塾図書館』を聴いたからかもしれない。

福澤先生が大変な読書家であったことは私ども慶應人の常識である。にもかかわらず先生が読書についてまとまった考えを書かれた事実がないことに驚く。読書論としてまとめられなかったことが，かえって，先生の読書論を考える上で重要なのかもしれない。読書については，折に触れて語られ，書かれている。その考えは，『学問のすゝめ』二編の端書に明確に著わされている。「学問とは広き言葉にて，無形の学問もあり，有形の学問もあり。〔中略〕何れにても皆知識見聞の領分を広くして，物事の道理を弁へ，人たる者の職分を知ることなり。知識見聞を開くためには，或は人の言を聞き，或は自から工夫を運らし，或は書物をも読ざる可らず。故に学問には文字を知ること必用なれども，古来世の人の思ふ如く，唯文字を読むのみを以て学問するとは心得違いなり。文字は学問をするための道具にて，譬えば家を建るに槌鋸の入用なるが如し。」

調べてみると，同じ主旨のコメントが福澤全集のあちこちにみられる。『豊前豊後道普請の説』（郵便報知投書），『福澤全集緒言』，『或云随筆』，『竹谷俊一宛書簡』，『阿原左金吾宛書簡』などなどである。

一般に読書論は，何をいかに読むべきか，それをどう生かすかを問題とした議論である。そしてそれが公共図書館であれ，学校図書館であれ，大学図書館であれ，およそ教育に関わる図書館でのサービスの根底にあることはいうまでもない。確かに先生は，たとえば小泉信三教授の『読書雑記』あるいは『読書論』のような形で読書論を展開することはなかったけれども，そういった問題については，先生の教育論の中で具体的に考えられ，そして大胆に語られ，書かれている。たとえば，「先づ当今の急務は富国強兵に御座候。富国強兵の本は人物を養育すること専務に存候。此まで御屋敷にて人物を引立には，漢書を読を先務と致来候得共，漢籍も読様にて実地に施し用をなし不申〔中略〕人物を養育するには，必ず漢籍を読むにも在らざること被存候」（島津祐太郎宛書簡）は，何をいかに読み，それをどう生かすかの議論そのものである。ただし，福澤全集に散見できるこの種のコメントから先生の読書論を理解するためには，飯田鼎教授の最近の著書『福澤諭吉―国民国家論の創始者』（中公新書）に再三述べられているように，そのコメントをその背景の中でとらえ直さなければならない。

福澤先生生誕150年記念の年の，読書週間における雑感。

（研究・教育情報センター本部事務室長）

資料 I

研究・教育情報センターに関する書誌 1983.10～1984.6

〔三　田〕

"三田図書館で盗難多発—机上のバッグ狙わる" **慶應塾生新聞** No.164, p.1 (1983.12.10).

三浦逸雄・戸田慎一・小田光宏・長沢雅男 "大学図書館におけるレファレンス・コレクションの比較分析" **Library and information science** No.21, p.71-102 (1984).

"Design: the just so of the swerve and line—architecture and design combine traditional skill with inventive daring," **Time**, Vol.122, No.5, Special issue Japan: a nation in search of itself, p.52-53 (Aug. 1, 1983).〔邦訳："デザイン：整然とした曲線—伝統的技巧と創造性の結合"（タイムライフブックス編集部訳 **模索する大国日本** Time 誌が見たニッポン タイムライフブックス p.127-128,133 1983).〕

〔日　吉〕

"日吉新図書館着工" 慶應タイムス (1984.1.15).

"塾キャンパスの未来—槇文彦氏に聞く" **慶應キャンパス** No.122 (1984.1.20).

"新刊文芸書，写真集も—日吉新図書館着工へ" **慶應塾生新聞** No.161, p.2 (1983.9.10).

高島正夫 "図書館の建設と日吉ルネッサンス" **塾** No.122, p.1 (1983).

資料 II

図書館学関係英語文献の和文抄訳リスト

研究・教育情報センターでは，これまで，スタッフの研修の一環として業務にかかわる英語の雑誌論文を選択し，日本語の抄訳を作成してきた。以下に掲げるのが，そのリストである。抄訳は職員によるもので適時センター内に回覧されている。

Areny, Brain, "Online catalogs: the transformation continues", **Wilson library bulletin**, Vol.58, No.6, p.406-410 (1984).

Avram, Henriette D., "Authority control and its place", **Journal of academic librarianship**, Vol.9, No.6, p.331-335 (1984).

Avram, Henriette D., "Barriers: facing the problems", **Journal of academic librarianship**, Vol.10, No.2, p.64-68 (1984).

Brand, Barbara E., "Librarianship and other female-intensive professions", **Journal of library history**, Vol.18, No.4, p.391-406

(1980).

Broadus, Robert N., "Online catalogs and their users: a review article on the CLR study of online catalogs", **College & research libraries**, Vol. 4, No. 6, p. 458-467 (1983).

Buhman, Lesley, "Fee-for-information: legal, social, and economic implication", **Journal of library administration**, Vol. 4, No. 2, p. 1-10 (1983).

Burger, Robert H., "Data definition and the decline of cataloging quality", **Library journal**, Vol. 108, No. 18, p. 1924-1926 (1983).

Cochrane, Pauline Atherton, "Modern subject access in the online age", **American libraries**, Vol. 15, No. 2, p. 80-83 (1984).

Farber, Evan Ira, "Catalog dependency", **Library journal**, Vol. 109, No. 3, p. 325-328 (1984).

Gennaro, Richard de, "Shifting gears: information technology and the academic library", **Library journal**, Vol. 109, No. 11, p. 1204-1209 (1984).

Griffiths, Jose-Marie, "Our competencies defined: a progress report and sampling—first developments in the eagerly awaited 'New Direction' project", **American libraries**, Vol. 15, No. 1, p. 43-45 (1984).

Halloran, James D., "Information and communication: information is answer, but what is the question?" **Journal of information science**, Vol. 7, No. 4/5, p. 159-167 (1983).

Hanson, Janet R., "The evaluation of library user education with reference to the programme at Dorset Institute of Higher Education (DIHE)", **Journal of librarianship**, Vol. 16, No. 1, p. 1-18 (1984).

Hildenbrand, Suzanne, "Some theoretical considerations on women in library history", **Journal of library history**, Vol. 18, No. 4, p. 382-390 (1980).

Hirshon, Arnold, "Considerations in the creation of a holding record structure for an online catalog", **Library resources & technical services**, Vol. 28, No. 1, p. 25-40 (1984).

Holley, Robert P., "Priority as a factor in technical processing", **Journal of academic librarianship**, Vol. 9, No. 6, p. 345-348(1983).

Horny, Kalen L., "Online catalogues: responding to the challenge", **Canadian library journal**, Vol. 40, No. 5, p. 277-282 (1983).

Kilgour, Frederick, "The online catalog revolution", **Library journal**, Vol. 109, No. 3, p. 319-321 (1984).

Knutson, Gunnar, "Use study of online cataloging in a special library", **Special libraries**, Vol. 75, No. 1, p. 36-43 (1984).

Malinconico, S. Michael, "Catalogs and cataloging: innocent pleasures and enduring controversies", **Library journal**, Vol. 109, No. 11, p. 1210-1213 (1984).

Malinconico, S. Michael, "Managing organizational culture", **Library journal**, Vol. 109, No. 7, p. 791-793 (1984).

Malinconico, S. Michael, "Planning for obsolescene", "**Library journal**, Vol. 109, No. 3, p. 333-335 (1984).

Marshall, Nancy H., "Register of copyrights' five-year review report: a view from the field", **Library trends**, Vol. 32, No. 2, p. 165-182 (1983).

Mason, Robert M., "Ergonomics: the human and the machine", **Library journal**, Vol. 109, No. 3, p. 331-332 (1984).

Meyer, Dave, "Cataloging and acquisitions: are the boundaries still there?" **Library acquisitions: practice and theory**, Vol. 7, No. 3, p. 183-189 (1983).

Ratcliffe, F. W., "The national information resources", **Library review**, Vol. 32, p. 177-195 (Autumn 1983).

Salmon, Stephen R., "In-depth: University of California MELVYL", **Information techno-**

logy and libraries, Vol. 1, No. 4, p. 350-371 (1982).

Savage, Noelle, "New technology in libraries: a report", **Wilson library bulletin**, Vol. 58, No. 6, p. 411-414 (1984).

Sever, Shmuel, "The challenge: information resources for a developing information society", **Libri**, Vol. 33, No. 3, p. 163-176 (1983).

Sewell, Robert G., "Managing European automatic acquisition", **Library resources & technical services**, Vol. 27, No. 4, p. 397-405 (1983).

Veaner, Allen B., "Libraries: the next generation", **Library journal**, Vol. 109, No. 6, p. 623-625 (1984).

Wajenberg, Arnold S., "MARC coding of DDC for subject retrieval", **Information technology & libraies**, Vol. 2, No. 3, p. 246-251 (1983).

Wayman, Sally G., "The international student in the academic library", **Journal of academic librarianship**, Vol. 9, No. 6, p. 336-341 (1984).

資料 III

スタッフによる論文発表・研究発表 1983.10～1984.6

〔論文発表〕

〔三　田〕

安西郁夫 "慶應義塾図書館（新館）—その設計と運営の理念" **丸善ライブラリーニュース** No. 126, p. 1-3, (1983).

東田全義 "参考業務の内容"（安藤勝・阿津坂林太郎・小林秀治編 **現代図書館学講座 5　参考業務** 東京書籍 p. 38-49 1983).

磯宏美 "講演会「ＯＣＬＣの現状と将来」" **Newsletter せんときょうかんとう** No. 72 p. 3-4 (1984).

森園繁 "聖ベネディクト読誦集" **塾** No. 123, 裏表紙 (1984).

酒井裕美子（田村俊作との共著）"公共図書館の availability 評価" **Library and Information Science**, No. 21, p. 49-69 (1983).

渋川雅俊 "ＢＬＬＤ：学術情報ネットワークにおけるドキュメント・デリバリー・サービス" **私立大学図書館協会東地区部会研究部報告書** 昭和58年度 p. 32-35 (1984).

渋川雅俊 "資料の収集"（岩猿敏生・長沢雅男他編 **新・図書館学ハンドブック** 雄山閣 p. 164-170 1984).

渋川雅俊 "図書館と出版流通"（**図書館年鑑** 1984 日本図書館協会 p. 248-251 1984).

渋川雅俊 "What Comes Next?（明日をみつめる図書館 ①)" **丸善ライブラリーニュース** No. 128, p. 12-13 (1984).

白石克 "江戸時代の鎌倉絵図—諸版略説" **三浦古文化** No. 34, p. 73-100 (1983).

白石克 "慶應義塾図書館魚菜文庫（旧称石泰文庫)" **汲古** No. 4, p. 29-31 (1983).

白石克 "慶應義塾図書館所蔵『相州鎌倉之図（江戸後期写)』鎌倉絵図十種所収地名索引共" **斯道文庫論集** No. 20, p. 449-473 (1984).

渡部満彦 "慶應義塾大学研究・教育情報センターの機械化システムの現状と今後" **大学図書館研究** No. 24, p. 12-19 (1984).

〔医　学〕

後藤敬治“1984年度 MEDLINE ファイル”**医学図書館** Vol.31, No.1, p.42-49 (1984).

加藤孝明“図書館員の保守主義と未来”**現代の図書館** Vol.22, No.2, p.83-86 (1984).

大澤充“医学情報センターにおける機械化—Automatic Control System について”**きたさとニュース** No.73, p.1-4 (1984).

〔日　吉〕

風間茂彦“A・Vホールと A・Vブース—慶應義塾図書館（新館）”**丸善ライブラリーニュース** No.126, p.4 (1983).

小川治之“米国の学習図書館”**塾監局紀要** No.10, p.81-84 (1983).

小川治之“コミュニケーション—慶應大学の場合”（日本ドクメンテーション協会編 **図書館のオートメーション** <NIPDOK シリーズ 33> 同会 p.102-106 1984).

柳屋良博“日吉の新図書館計画について”**塾監局紀要** No.10, p.20-29 (1983).

〔研究発表〕

〔三田〕

安西郁夫“目録の機械化：Japan MARC” 私立大学連盟一般研修（図書館関係） 1983. 10. 13 於　グリーンホテル三ケ根

広田とし子“ＥＣ関係書誌紹介”ＥＤＣセミナー 1984. 5. 24-25 於　早稲田大学

渋川雅俊“BLLD：学術情報ネットワークにおけるドキュメント・デリバリー・サービス”私立大学図書館協会東地区部会研究部昭和58年度第２回研究部会 1983. 11. 9 於　明治神宮会館

安田博“北米のネットワークシステム：RLIN を中心として”私立大学図書館協会東地区部会研究部昭和58年度第２回研究部会 1983. 11. 9 於　明治神宮会館

渡部満彦”簡易書誌レコード入力による受入業務の機械化” 第54回日本医学図書館協会総会 1983. 10. 27 於　中央農林会館

〔医　学〕

加藤孝明“ネットワーク（相互貸借活動の現状と将来：報告”第６回生物医学図書館員研究会 1984. 5. 19 於　三井記念病院

〔日　吉〕

風間茂彦“出版流通と図書選択—大学図書館の場合”全国図書館大会第９分科会（出版流通と図書館） 1983. 5. 27 於　山口県教育会館

小川治之（斎藤憲一郎・逸村裕・緑川信之・金子昌嗣との共同発表）“物理学論文の経時的引用傾向—Phisical Review を中心として”三田図書館・情報学会研究大会 1983年度 1983. 11. 12 於　慶應義塾大学

資料 IV

年次統計要覧 <昭和58年度>

慶應義塾大学研究・教育情報センター

I. 図書費 <58年度実績及び59年度予算>

内訳 / 支部センター	58年度実績 <単位：円>			59年度予算 <単位：千円>		
	図書支出	図書資料費	(計)	図書支出	図書資料費	(計)
三田情報センター	558,893,650	1,946,000	560,839,650	589,067	3,718	592,785
図書館	298,327,680	1,946,000	300,273,680	316,226	3,718	319,944
学部*	260,215,970	—	260,215,970	272,841	—	272,841
指定寄付金	350,000	—	350,000			
(私大研究設備相当額)	(19,645,000)	—	**	(20,234)		**
日吉情報センター	123,051,311	1,867,590	124,918,901	130,744	1,958	132,702
図書館	46,000,410	1,867,590	47,868,000	48,300	1,958	50,258
学部*	77,050,901	—	77,050,901	82,444	—	82,444
(私大研究設備相当額)	(6,670,630)	—	**	(6,867)		**
医学情報センター	116,843,915	2,229,692	119,073,607	127,091	2,324	129,415
〃	116,843,915	2,229,692	119,073,607	127,091	2,324	129,415
理工学情報センター	103,761,857	1,300,040	105,061,897	112,859	1,365	114,224
〃	103,761,857	1,300,040	105,061,897	112,859	1,365	114,224
(私大研究設備相当額)	(1,300,000)	—	**	(1,300)		**
合計	902,550,733	7,343,322	909,894,055	959,761	9,465	969,126

注) * 特別図書費は含まず。

** (　) 内は合計欄に加算せず。

私大研究設備相当額は私大研究設備助成金に相当するよう義塾が臨時的に手当したもの。

Ⅱ—1 蔵 書 統 計 <年間受入及び所蔵冊数>

支部センター＼内訳		単行本 和	単行本 洋	単行本 計	製本雑誌 和	製本雑誌 洋	製本雑誌 計	合計
年間受入冊数	三田情報センター	23,502	32,167	55,669	5,916	8,788	14,704	70,373
	図書館	(16,422)	(16,636)	(33,058)	(3,344)	(2,227)	(5,571)	(38,629)
	学部	(7,080)	(15,531)	(22,611)	(2,572)	(6,561)	(9,133)	(31,744)
	日吉情報センター	14,075	5,757	19,832	1,300	1,401	2,701	22,533
	図書館	(11,165)	(1,252)	(12,417)	(772)	(35)	(807)	(13,224)
	学部	(2,910)	(4,505)	(7,415)	(528)	(1,366)	(1,894)	(9,309)
	医学情報センター	1,536	1,588	3,124	1,050	2,322	3,372	6,496
	理工学情報センター	1,354	1,114	2,468	1,219	3,619	4,838	7,306
合計		40,467	40,626	81,093	9,485	16,130	25,615	106,708
所蔵冊数(累計)	三田情報センター	527,904	491,056	1,018,960	129,063	110,108	239,171	1,258,131
	図書館	(389,486)	(285,214)	(674,700)	(78,671)	(46,071)	(124,742)	(799,442)
	学部	(138,418)	(205,842)	(344,260)	(50,392)	(64,037)	(114,429)	(458,689)
	日吉情報センター	185,982	92,590	278,572	18,578	24,946	43,524	322,096
	図書館	(131,295)	(15,073)	(146,368)	(12,505)	(288)	(12,793)	(159,161)
	学部	(54,687)	(77,517)	(132,204)	(6,073)	(24,658)	(30,731)	(162,935)
	医学情報センター	23,955	26,401	50,356	38,692	74,926	113,618	163,974
	理工学情報センター	30,153	19,647	49,800	29,114	79,179	108,293	158,093
合計		767,994	629,694	1,397,688	215,447	289,159	504,606	1,902,294

注1） 所蔵冊数（累計）は年間受入冊数から除籍冊数を引いた数値を前年度の累計所蔵冊数に加えたもの。
2） 三田情報センター・学部には図書館・情報学科の製本雑誌を含む。

Ⅱ—2 蔵 書 統 計 <逐次刊行物：タイトル数>

種別 / 支部センター	カレント			ノンカレント			カレント・ノンカレント合計
	和	洋	計	和	洋	計	
三田情報センター	4,768	2,993	7,761	4,825	2,124	6,949	14,710
図書館	(1,830)	(791)	(2,621)	(2,958)	(1,164)	(4,122)	(6,743)
学部	(2,938)	(2,202)	(5,140)	(1,867)	(960)	(2,827)	(7,967)
日吉情報センター	650	532	1,182	321	593	914	2,096
図書館	(434)	(21)	(455)	(126)	(4)	(130)	(585)
学部	(216)	(511)	(727)	(195)	(589)	(784)	(1,511)
医学情報センター	1,186	1,482	2,668	692	1,043	1,735	4,403
理工学情報センター	1,006	1,177	2,183	1,250	2,094	3,344	5,527
合計	7,610	6,184	13,794	7,088	5,854	12,942	26,736

Ⅲ—1 利 用 統 計 <貸出及び閲覧冊数>

内訳 / 支部センター	館外貸出			館内閲覧		前年度比
	教職員	学生	(計)	一般図書	貴重書	館外貸出(計)
三田情報センター	9,788	119,736	129,524	*	1,286	1.16
日吉情報センター	4,989	60,972	65,961	*	—	1.03
医学情報センター	32,448	17,546	49,994	*	—	1.09
理工学情報センター	—	—	34,197	*	—	1.19
合計	—	—	279,676	*	1,286	1.11

* 開架のため実数不明。

Ⅲ—2 利 用 統 計 <相互貸借（複写依頼を含む）>

内訳 / 支部センター	依頼をうけた（貸）			依頼した（借）			合計
	国内	国外	計	国内	国外	計	
三田情報センター	1,476	6	1,482	811	368	1,179	2,661
日吉情報センター	128	0	128	103	32	135	263
医学情報センター	8,509	184	8,693	2,371	49	2,420	11,113
理工学情報センター	28,042	0	28,042	1,430	106	1,536	29,578
合計	38,155	190	38,345	4,715	555	5,270	43,615

Ⅲ—3 利 用 統 計 <複写サービス>

内訳 / 支部センター	種別	学内 件数	学内 枚数	学外 件数	学外 枚数	合計 件数	合計 枚数
三田情報センター	MF	14	3,187	38	7,954	52	11,141
	ゼロックス	10,161	228,497	1,843	57,866	12,004	286,363
	オフセット	190	269,866	—	—	190	269,866
	PPC	—	—	—	—	—	1,418,118
	OHP	44	201	—	—	44	201
	ファクシミリ	120	561	—	—	120	561
日吉情報センター	ゼロックス	4,187	25,656	172	3,451	4,359	29,107
	PPC	—	212,297	—	—	—	212,297
	ファクシミリ	16	115	—	—	16	115
医学情報センター	MF	1,137	5,689	—	—	1,137	5,689
	ゼロックス	49,075	299,467	103,419	631,087	152,494	930,554
理工学情報センター	MF	18	1,052	—	—	18	1,052
	ゼロックス	25,246	435,435	28,042	283,200	53,288	718,635
	OHP	267	1,620	—	—	267	1,620
合計	—	90,475	1,483,643	133,514	983,558	219,630	3,885,319

注） PPCはコイン方式のため内訳は不明。

Ⅲ—4 利 用 統 計 <レファレンス・サービス>

利用者別

内訳 / 支部センター	学内者 教職員	学内者 学生	学外者	合計
三田情報センター	1,578	8,626	3,539	13,743
日吉情報センター	632	2,645	51	3,328
医学情報センター	2,339	243	2,167	4,749
理工学情報センター	645	2,597	1,873	5,115
合計	5,194	14,111	7,630	26,935

業務内容別

内訳 / 支部センター	文献所在調査	事項調査	利用指導	その他	合計
三田情報センター	5,146	653	7,904	40	13,743
日吉情報センター	754	235	2,331	8	3,328
医学情報センター	1,032	178	668	2,871	4,749
理工学情報センター	2,130	505	2,171	309	5,115
合計	9,062	1,571	13,074	3,228	26,935

時間は間断なく過ぎてゆきます。義塾創立125周年記念を中心とした幾つかのコメモレーションも，明年の4月横浜三越における福澤諭吉展を最後に，無事終了の運びとなります。この2年間義塾の過ぎこし方を私たちは，普段のときよりも強く意識しました。私たちの生れるずっと以前から義塾が現代日本の形成に深く関わってきたことを誇りに思い，たとえ幾許かの間でもそれを引き継ぐことに喜びを感じない人はいないでしょう。個人的な感慨をここに記すことが許されるならば，私は次のことを書きしたためておきたいと思います。創立100周年に塾生として義塾の一員となって25年間，実に充実した歳月を過すことができたことに感謝し，今後もこれまでに培われた日本における義塾の使命達成に微力を捧げたいと。

渡部満彦君が同じような思いから慶應義塾図書館の歴史を調べています。時間の経過が原因となって現われる問題の一つに図書館資料の自然的，あるいは人為的老朽・老廃化があります。これまで余りことの重大さに気付かれなかった問題ですが，今日ではそれが資料保全の問題として世界中の図書館から関心が持たれています。図書館・情報学科上田修一助教授が同学科大学院生奥澤美佐君とこの問題に取り組んでおり，その一環として義塾図書館資料の劣化状況を調査することになりました。本誌ではその調査法を書いていますが，調査結果は，本年度三田図書館・情報学会で発表され，いずれ Library and Information Science にまとめられます。

図書館界における世界的関心といえば，この4月から理工学情報センター所長に就任された天野弘教授と，二期目の研究・教育情報センター所長を務められる大江晃教授が，義塾図書館サービスと運営に関わる課題について書いています。天野所長は資料の蓄積・保管の問題を，大江所長は図書館資源共通の理念とその運用上の問題として書誌情報ネットワークのことです。これらもまた，今日の図書館界で将来の課題とされている重大な問題です。

義塾創立125周年に際して提起された基本テーマは，次の25年を考えることでした。塾内のあちらこちらからいろいろな課題が挙げられようとしています。図書館に関しては，先の三田の新図書館，来年4月に開館される日吉の新図書館が今後の図書館サービスの新しい基盤となります。私たちは，こうした基盤に立って天野・大江両所長が指摘した問題に取り組むことになります。

具体的には，KULIC ノウハウで取り挙げた ILL，市古健次君のライブラリーインストラクションなどが私たちのこれからの問題の一つ，二つです。昨年10月から本格的に開始した機械化計画も重要なものの一つです。これからはいろいろな問題に当らなければなりません。高山正也助教授が，カリフォルニア大学（バークレイ）図書館の運営について，非常に詳細な報告をしています。それは，図書館サービス・運営について先進国である米国でも，困難な問題が多いようです。そうした問題を米国アカデミックライブラリアンがどう対処しているのか大変参考になります。

（10月29日渋川記）

編集委員＊情報センター本部　渋川雅俊＊三田情報センター　斎藤泰則　磯宏美＊日吉情報センター　木藤るい＊医学情報センター　山中みどり＊理工学情報センター　滝口久美子